第Ⅳ章　遺　　物

1　土器類

出土した土器類は、縄文時代から江戸時代の各時代に属するものがある。本節では、出土した土器類の内、飛鳥時代以前の土器を中心に報告する。しかし、天龍寺地区、北嵯峨地区から出土した平安時代前期の土器類、太秦6地区で出土した平安時代後期の土器類は一括資料である。また化野地区で出土した平安時代後期から江戸時代の土器類は埋葬施設に伴う一括資料である。このため、合わせて報告する。

双ヶ岡・太秦地域出土の土器類は、花園・常盤地区、太秦1地区、太秦4地区、太秦5地区、太秦6地区に分けてa項で、嵯峨・嵐山地域は、鹿王院・車折地区、天龍寺地区、北嵯峨地区、化野地区、嵐山南・鹿王院地区に分けてb項で報告する。なお、嵯峨野地域で実施された発掘調査で出土した土器類も含める。

a　双ヶ岡・太秦地域

花園・常盤1地区（図版31　図43）

須恵器（1～13）は、常盤御池古墳の発掘調査10-78[文377]で出土した。1～10は石室床面、11・12は石室入口付近の周溝内、13は現代の盛土層から出土した。また、史跡妙心寺境内の発掘調査11-49[附12]では、須恵器（15～17）が出土している。1～10は6世紀中頃、11・12は6世紀後半代に属し、13は6世紀前半に遡る可能性がある。15～17は7世紀前半代に属する。14は金属製品であり第3節で別に述べる。

杯蓋（1～4・11）　2・4は天井部と口縁部の境に凹線をめぐらせ、1・3は天井部と口縁部とを分ける稜はほとんどない。いずれも天井部はやや丸みを持ち、回転ヘラケズリの範囲は5分の4前後に及ぶ。口縁端部は内傾した面を持つ。11は天井部と口縁部とを分ける稜線や凹線はなく、天井部は丸みを帯び、回転ヘラケズリの範囲は約2分の1である。口縁端部は丸くおさめ、内側に凹線がめぐる。

杯身（5・6・12・13）　口縁部立ち上がりは内傾し、端部は受け部先端と同様に丸くおさめる。5・6は底部全体のほぼ5分の4に及ぶ範囲に回転ヘラケズリを施す。12は底部外面の回転ヘラケズリの範囲は5分の3で、口縁部の立ち上がりはやや低い。13は口縁部の立ち上がり端部には明確な内傾する面を持つ。

壷蓋（7）　天井部に中央が凹むつまみが付く。天井部と口縁部とを分ける稜があり、天井部はヘラケズリののち、つまみのまわりに櫛描き列点文を施す。口縁端部は丸くおさめ、内側に凹線がめぐる。天井部内面は、比較的丁寧なナデ調整である。胎土は砂粒を含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。

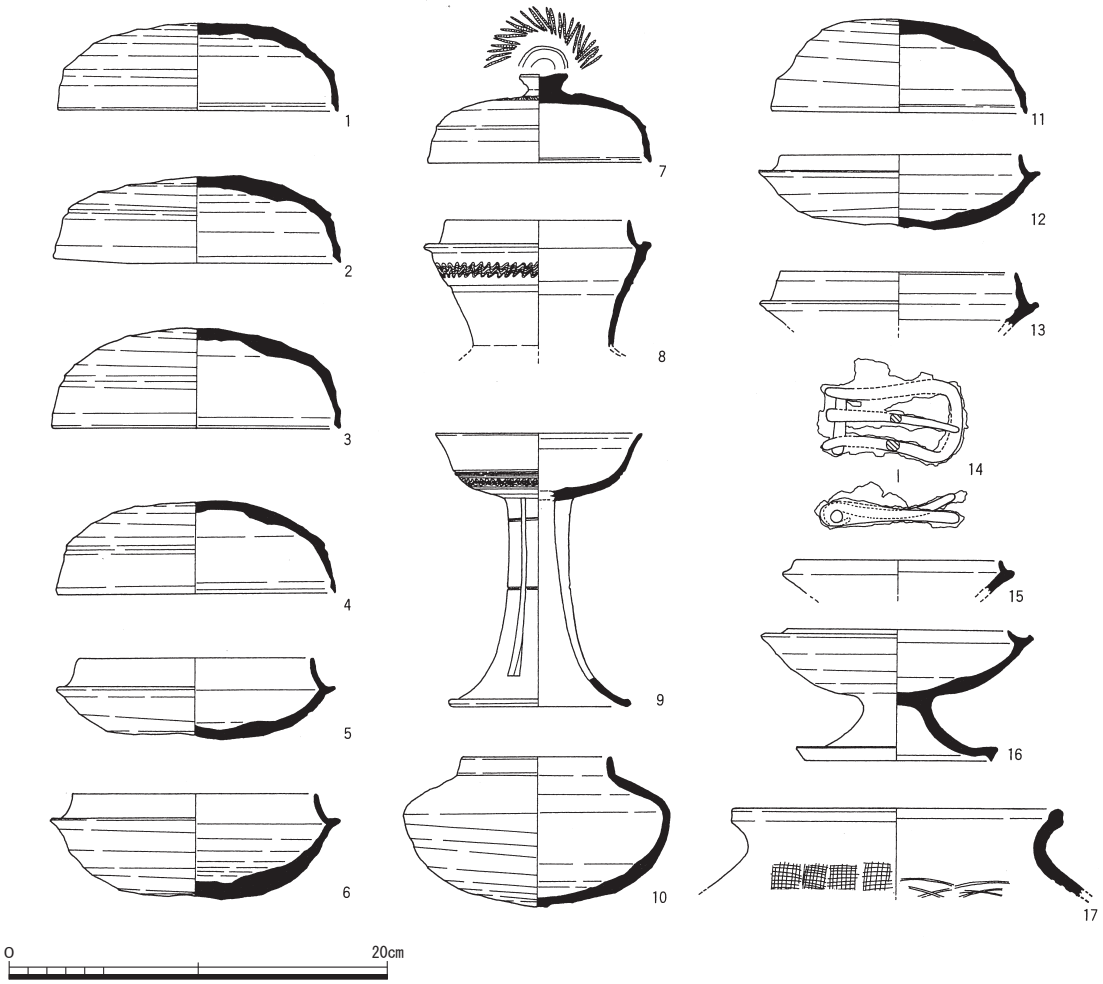

図 43　花園・常盤 1 地区出土遺物（1:4）

有蓋壷（8）　口頸部中頃から外反し、受け部になる。口縁部立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。口頸部中頃に凹線と、その上部に櫛描き波状文を施す。胎土は砂粒を含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。口頸部のみ残存する。蓋 7 とセットになる。

高杯（9）　杯部は小型で口縁部は外上方へ開き、先端はやや鋭く、内側に凹線がめぐる。底部から口縁部にかけて櫛描き波状文と 2 条の凹線を施す。脚部は細長く、裾部はラッパ状に広がり、端部はわずかに肥厚して丸くおさめる。透かしは三方に付ける。胎土は砂粒を含み、杯部は赤灰色、脚部は暗灰色を呈し、焼成は堅緻。

有蓋短頸壷（10）　扁平な体部からわずかに内傾して立つ短い口縁部を持つ。口縁端部は丸くおさめる。底部から肩部下まで回転ヘラケズリを施す。底部内面の中央部に櫛目痕が認められる。胎土は砂粒を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。

杯（15）　口縁部の立ち上がりは内傾し、端部はやや鋭い。受け部はやや外傾する面を持ち、端部は丸い。胎土は砂粒が少なく、灰色を呈し、焼成は堅緻。

有蓋高杯（16）　杯部は平坦な底部から外上方にのびて受け部に続く。口縁部の立ち上がりは内傾が強く、端部は鋭い。短い脚部は「ハ」字状を呈し、裾部で大きく外側に広がり、端部は下方にのびる。杯部、脚部ともにナデ調整を施す。胎土は砂粒が少なく、灰白色を呈し、焼成は堅緻。

甕（17）　口縁部は外反したのち上方にのび、受け口状を呈する。体部外面は格子目タタキ、内面は同心円文。焼成は軟質で口縁部の調整は不明。胎土は砂粒が少なく、灰白色を呈する。

太秦1地区（図版32　図44・45）

上ノ段町遺跡では2回の発掘調査により多くの遺物が出土した。図44は、調査9-42[文378]で出土した須恵器（18～36・44～48）、土師器（37～43）である。18～43は7世紀前半、44～48は7世紀後半に属する。図45は、調査9-44[附13]で出土した須恵器（49～57・66）、土師器（58～65）である。49は7世紀前半代、その他は7世紀後半に属する。

杯蓋（18～22・32）　19～22は全体的に丸味を帯び、天井部と口縁部の境界は不明瞭である。天井部外面はヘラ切り痕を残し、口縁部内外面はヨコナデを施す。18はやや器高が高く、32は天井部を丁寧にヘラケズリし中央に宝珠つまみを付ける。口縁部内面の返り先端は鋭く、口縁端部より下方に突出する。

杯身（23～31）　比較的扁平な器形で、底部外面は回転ヘラキリのまま未調整である。口縁部の立ち上がりは内傾し、やや高いものと低いものとがあり、27は口縁部の立ち上がりが大きく内傾し、受け部との差がほとんどない。

杯（44～46）　44・45は平坦な底部とやや外傾して立ち上がる体部からなる。口縁端部は外反し丸くおさめる。口縁部内外面はナデ調整、底部外面は粗いナデ調整を施す。46は平坦な底部に低い高台が底部端に付く。

高杯（33～35）　杯部の33・34は、共に器壁が薄く、口縁端部は外反する。杯部内外面ともにナデを施す。脚部35は、中位に2条の凹線を施し、内面には絞り目が認められる。

壷（36）　口縁部はやや外傾して上方にのび、端部を丸くおさめる。胎土は砂粒が少なく、灰色を呈し、焼成は堅緻。

甕（48）　口縁部は外上方にのび、端部は肥厚し上端面は凹面を呈する。口縁部内外面はナデ、体部内面は同心円文、外面は格子目タタキののちナデ調整を施す。胎土は砂粒が少なく、灰色を呈し、焼成は堅緻。

杯（37）　やや丸い底部と内湾し立ち上がる口縁部からなる。内面には放射暗文を施し、口縁端部内面には沈線がめぐる。外面は底部と体部下半をヘラケズリ、体部上半はヨコナデの後ヘラミガキを施す。胎土は精良で、赤褐色を呈し、焼成は良好。

高杯（38・39）　杯部38には底部と口縁部を分ける稜が認められる。内面には暗文を施す。脚部39は内面に絞り目が認められる。焼成は軟質で調整は不明。胎土は精良で、赤褐色を呈する。

甕（40～43）　41は小型で、やや外反する口縁部と、肩の張りが弱い体部からなる。口縁部内外面はハケメ調整ののちナデ、体部内外面はハケメ調整を施す。40の口縁部は大きく直線的に外反し、端部は内側にやや肥厚し、外上方に傾斜する面を持つ。口縁部内面はハケメ調整ののちナデ、外面はナデ調整を施す。外面には煤が付着する。42・43は大型で、口縁部は内湾して立ち上がり、端部は内上方に傾斜する面を持つ。口縁部は内外面ともにハケメ調整ののちナデ、体

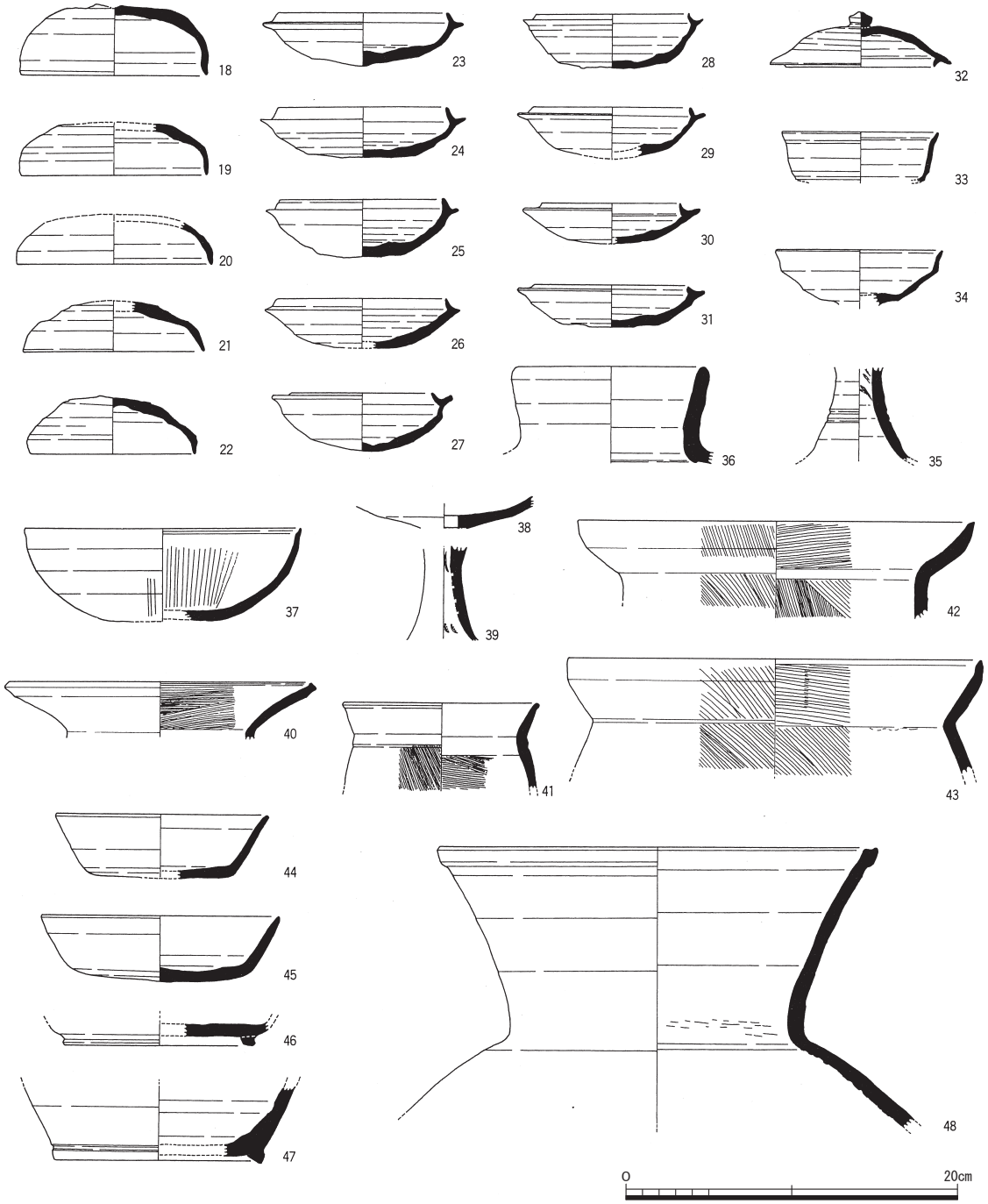

図 44　太秦 1 地区出土土器 1(1:4)

部の内外面はハケメ調整を施す。共に胎土は雲母を含み、焼成は良好。

杯蓋 (49)　天井部を欠くが、小型で丸味を持つ。内外面ともナデ調整で、口縁部外面には浅い 2 条の凹線が認められる。胎土は砂粒が多く、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。

蓋 (50)　天井部はつまみを欠くが平坦で、内面に返りを持つ。口縁端部は下方に突出する。内外面ともナデを施し、外面には灰オリーブ色の自然釉が付着する。胎土は砂粒が多く、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。

杯 (51 ～ 56)　53 ～ 56 は平坦な底部と外傾して立ち上がる体部からなり、口縁端部は外反し

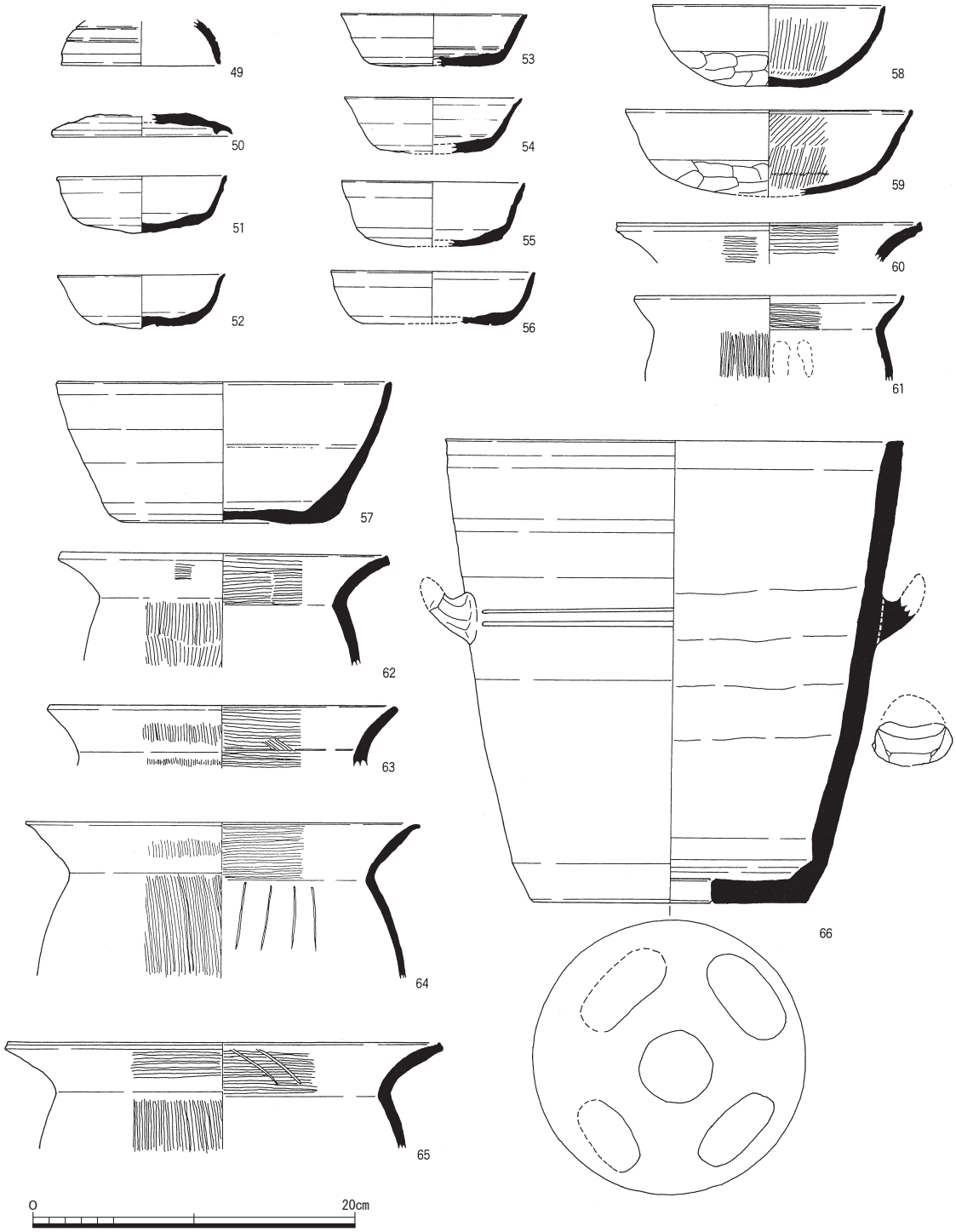

図 45　太秦 1 地区出土土器 2(1:4)

丸くおさめる。51・52 はやや丸い底部を持つ。いずれも口縁部内外面はナデ調整を施す。底部外面は、55 が粗いナデ調整、他はヘラキリ痕を残し、未調整である。

鉢 (57)　平坦な底部とやや内湾し立ち上がる体部からなる。口縁端部は内側に傾斜する面を持つ。体部内外面はナデ、底部にはヘラケズリを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈し、焼成は良好。

甑 (66)　平坦な底部と直線的に外傾して立ち上がる体部からなる。体部の中位よりやや上位

に2条の凹線を施し、把手を2箇所に付け、底部に5個の孔を開ける。体部外面はナデとケズリ調整である。部分的に煤が付着する。胎土は砂粒を多く含み、淡黄色を呈し、焼成は軟質。

杯（58・59）　58はやや丸い底部と内湾し立ち上がる体部からなる。口縁端部は内側に傾斜する面を持つ。59は口縁部が外反し、端部は内側に肥厚し、丸くおさめる。共に底部外面はヘラケズリ、口縁部はナデ調整、内面には暗文を施す。胎土は精良で、赤褐色を呈し、焼成は良好。

甕（60～65）　60～63は中型で、61以外はいずれも口縁部は外反する。口縁部内外面と体部外面はハケメ調整を施す。外面に煤が付着するものが多く認められる。

太秦4地区（図版33　図46・47）

広隆寺旧境内からは多くの遺物が出土した。図46の須恵器（67～73）、土師器（74～79）は発掘調査16-88[文232]の竪穴住居から、須恵器（80～90）は発掘調査16-52[附7]の竪穴住居から出土し、86・87は7世紀後半、他は7世紀前半代の時期に比定できる。図47は発掘調査16-83[附1]で出土した須恵器（91～96・105）、16-91[文416]で出土した須恵器（97～104・106）、16-85[文433]で出土した土師器（108）、10-169[附11]で出土した土師器（107）で、91～96・105は柱穴・土壙、97～104・106は溝から出土した。土師器（107）は発掘調査10-169の古墳周溝から、土師器（108）は発掘調査16-85の竪穴住居から出土した。107・108は7世紀前半に、他は7世紀後半に比定できる。

杯蓋（67～70）　天井部と口縁部との境界は不明瞭で、全体的に丸味を持つ。天井部外面はヘラキリ痕を残し未調整で、口縁部内外面はヨコナデを施す。

杯身（71）　口縁部の立ち上がりは低く上方にのび、先端はやや鋭い。受け部はやや外傾する面を持ち、先端は丸くおさめる。内外面ともにナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。

高杯（72）　杯の底部と体部とを分ける位置に稜を持ち、体部は内湾しながら立ち上がり、さらに上部の稜を境に外反して端部に至る。内外面ともにナデを施す。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈し、焼成は堅緻、焼け歪みが激しい。脚部を欠く。

甕（73）　口縁部は外上方にのび、端部は上面に凹面を持つ。口縁部内外面はナデ、体部外面は格子目タタキ、内面は同心円文。胎土は砂粒が少なく、灰色を呈し、焼成は堅緻。

杯（74）　やや丸い底部と内湾し立ち上がる体部からなる。口縁端部は内面に沈線をめぐらせる。内面には暗文を施し、外面は底部と体部下半をヘラケズリし、上半はヨコナデを施す。胎土は精良で、赤褐色を呈し、焼成は良好。

鍋（75・76）　75は緩やかに内湾し立ち上がる体部と、直線的に外反する口縁部からなる。内外面ともハケメ調整を施し、外面には煤が付着する。胎土は砂粒を含み、淡赤褐色を呈し、焼成はやや軟質。76は口縁部が水平にのびる。

甕（77・78）　小型で、体部は球形を呈する。77は口縁部がやや内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部内面と体部外面にハケメ調整を施す。体部内面には炭化物、外面には煤が付着する。78は口縁部が外反し、端部は内側に傾斜する面を持つ。

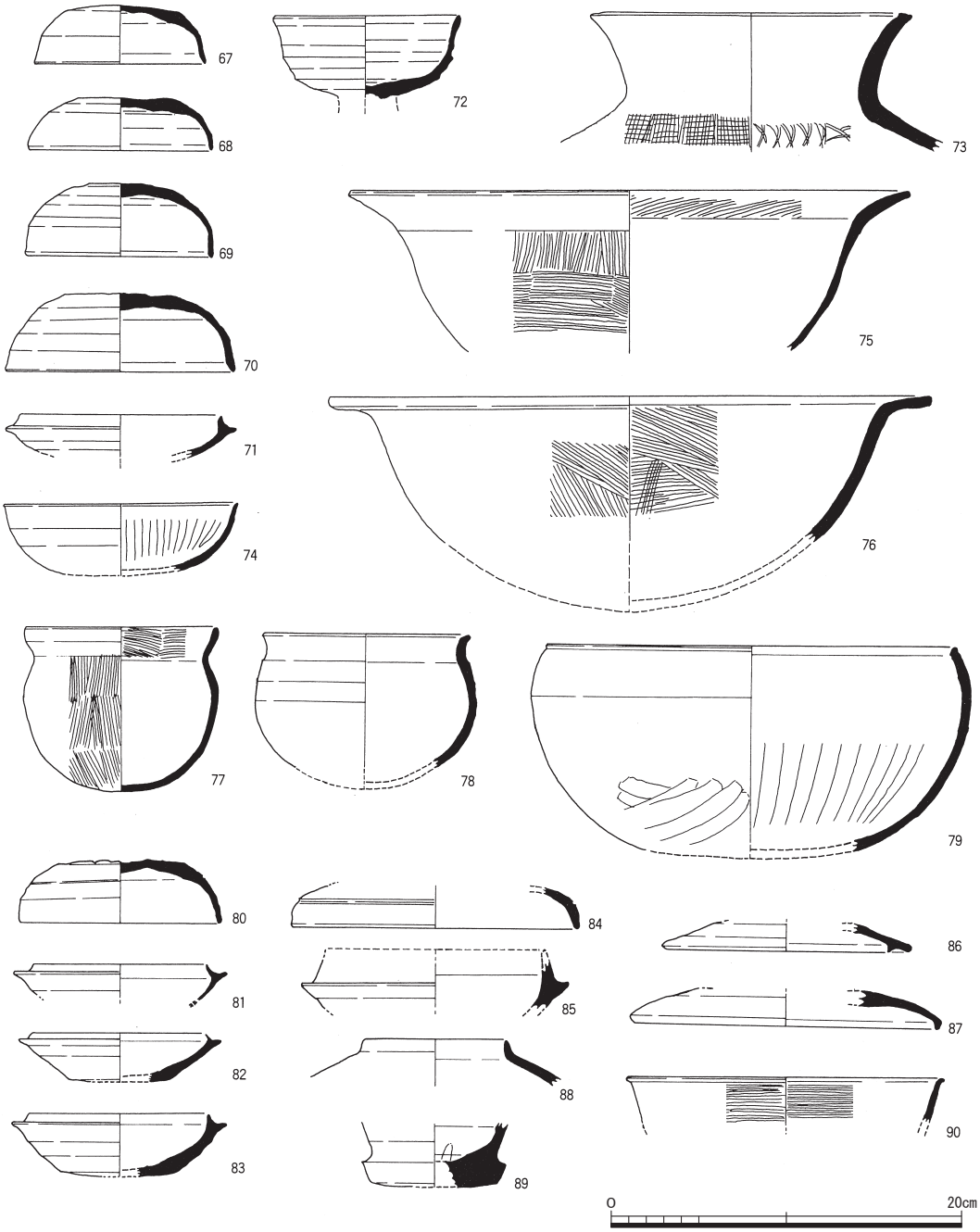

図 46　太秦 4 地区出土土器 1(1:4)

鉢 (79)　体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は上方に肥厚し、内側に傾斜する面を持つ。体部下半はヘラケズリ、上半はナデ調整し、内面には暗文を施す。胎土は精良で、明赤褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

杯蓋 (80・84)　80 は天井部と口縁部との境界は不明瞭で、全体的に丸味を持ち、天井部外面はヘラ切り痕が残り、口縁部内外面はヨコナデを施す。84 の天井部は扁平で、口縁部外面に凹線をめぐらし、内外面ともにナデを施す。

杯身 (81 ～ 83・85)　81・82 は口縁部の立ち上がりが大きく内傾し端部は鋭い。83 の器壁は厚く体部は内湾して立ち上がる。共に底部外面は回転ヘラ切りのまま未調整である。85 は口径

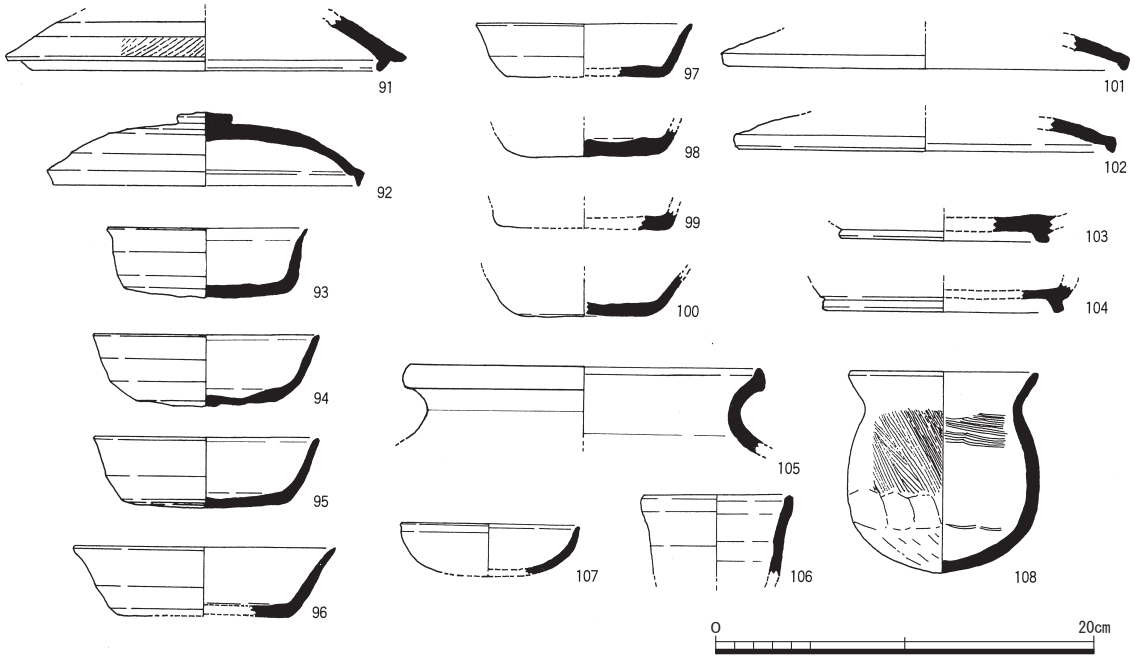

図 47　太秦 4 地区出土土器 2(1:4)

が大きく、口縁部の立ち上がりは上方にのびる。

蓋 (86・87)　共に天井部とつまみを欠くが、86 は内面に返りを持ち、返りの先端が突出する。87 は口縁部が強く下方に屈曲して端部が突出する。

壷 (88)　体部からやや内傾して立ち上がる短い口縁部を持つ。内外面ともにナデを施す。胎土は砂粒を含み、灰色を呈し、焼成は堅緻。

摺鉢 (89)　厚い底部から体部が立ち上がる。底部外面はヘラケズリ、体部はナデを施す。胎土は精良で、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。

鉢 (90)　体部は斜め外方に広がり、口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。内外面ともにカキメ調整を施す。口径に比して、器壁が薄い。胎土は精良で、灰色を呈し、焼成は堅緻。

蓋 (91・92・101・102)　92 は丸い天井部に低く平坦なつまみが付き、口縁部は下方に強く屈曲して端部が突出する。101・102 は口縁端部が下方に突出し、91 は内面に内傾する返りを持つ。いずれも内外面はナデを施す。

杯 (93 ～ 100・103・104)　平坦な底部と外傾して立ち上がる体部からなる。口縁端部は外反し丸くおさめる。口縁部内外面はナデ調整を施す。94 の底部中央はヘラキリ痕を残し未調整で、他は底部外面に粗いナデ調整を施す。103・104 は平坦な底部端に低い高台が付く。

甕 (105)　口縁部は短く外反し、端部で下方と上方に肥厚し、やや受け口状を呈する。焼成は軟質で調整は不明。胎土は精良で、灰白色を呈する。

壷 (106)　長頸壷の口縁部である。内外面ともにナデ調整を施す。胎土は精良で、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。

杯 (107)　体部はやや内湾し立ち上がり、口縁端部は内面に傾斜する面を持つ。口縁部内外面

はヨコナデ、内面には放射暗文を施す。明赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精良で白色の粘土が少量混じる。

甕（108）　小型で、丸い底部と肩の張りが弱い体部と、直線的に外反する口縁部からなる。底部外面から体部下半はケズリ、体部上半と内面はハケメ調整を施す。口縁部内面と体部外面に煤が付着する。胎土は細かい砂粒を含み、暗褐色を呈し、焼成は軟質。

太秦 5 地区（図版 34　図 48）

土師器（109 ～ 120）、須恵器（121 ～ 123）は西野町遺跡の発掘調査 15-21[文380] で出土した。121・122 は竪穴住居、123 は土壙から出土した。須恵器（124）、土師器（125）は多藪町遺跡の調査 16-67[文351] で、須恵器（126・127）は調査 15-27[文352] の蛇塚古墳下層の遺物包含層から出土した。109 ～ 120 は庄内式併行期にあたる。121・122・125 は 7 世紀前半に、123 は 7 世紀後半である。126・127 は蛇塚古墳築造の上限を示したものである。

高杯（109・112 ～ 115）　杯部にはいずれも、底部と口縁部を分ける稜が認められる。112・114 は口縁部がやや内湾気味に斜め上方に開き、端部は丸くおさめる。脚部 115 は内外面に絞り目が認められ、胎土の類似から 114 と同一個体の可能性がある。

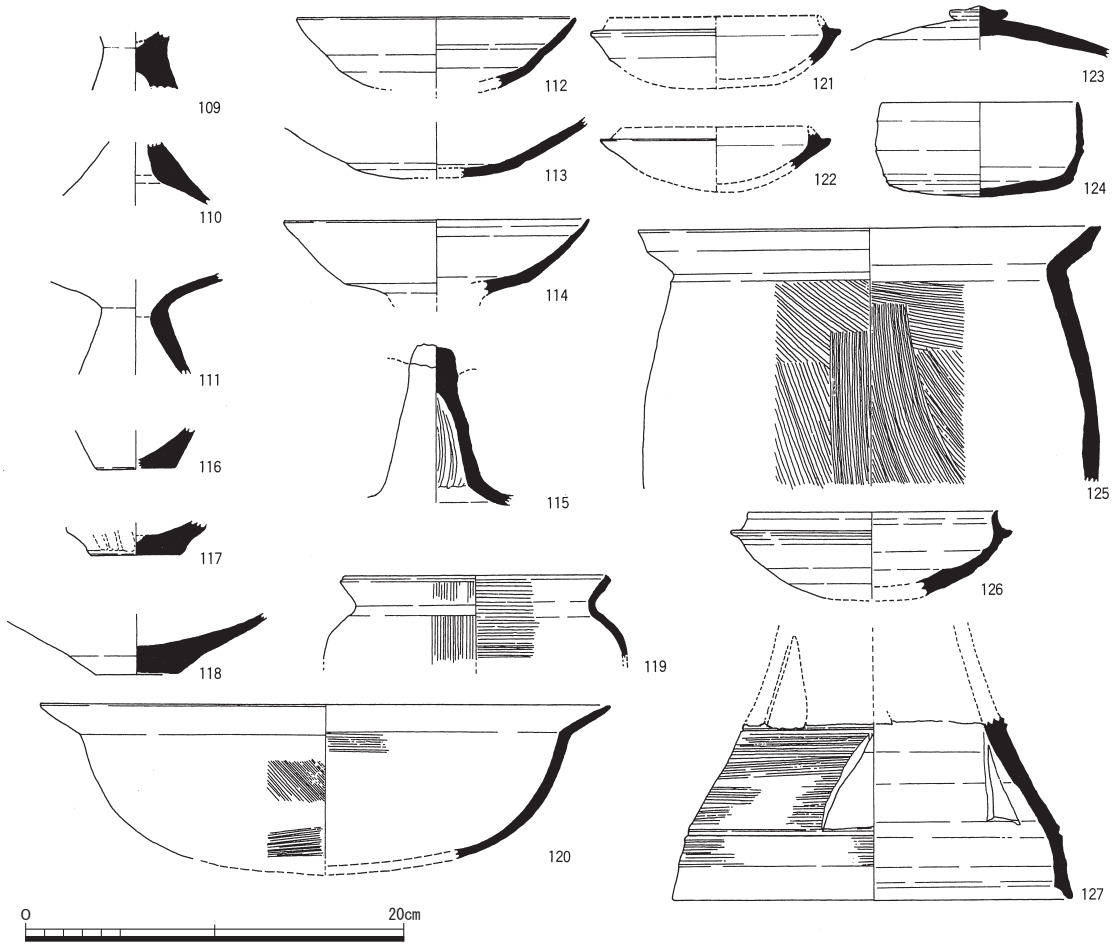

図 48　太秦 5 地区出土土器（1:4）

器台（110・111）　111 は「ハ」字状に広がる脚部と大きく外反する口縁部からなるが、共に両端部を欠く。110・111 ともに内外面は、ヨコナデで仕上げる。

壷（118）　底部のみであるが、体部は大きく外側上方に開く。胎土は砂粒を多く含み、赤褐色を呈し、焼成は良好である。

甕（116・117・119）　119 は器壁が薄く、丸みを帯びた体部と外反する口縁部からなる。端部は上方に摘みあげ、外方に傾斜する面を持つ。116・117 は共に平底で、器壁は厚い。

鍋（120）　やや平坦な底部から緩やかに内弯し立ち上がる体部と、大きく直線的に外反する口縁部からなる。内外面ともハケメ調整を施す。胎土は砂粒を含み、淡赤褐色を呈し、焼成はやや軟質。外面には煤が付着する。

杯身（121・122）　底部と端部を欠くが、121 の口縁部の立ち上がりは内傾し、122 は断面が三角形を呈する。121 の底部近くにはヘラケズリが認められる。

蓋（123）　やや丸い天井部に、低い宝珠つまみが付く。内外面ともに回転ナデを施す。胎土は良好で、灰色を呈し、焼成は堅緻。

杯（124）　平坦な底部と、外反したのち直立する体部を持つ。体部の下端と中位に凹線を施す。底部外面はヘラケズリ、他の部位は横ナデを施す。胎土は精良、暗青灰色を呈し、焼成は堅緻。

甕（125）　肩の張りが弱い体部と、「く」字状に外反する口縁部からなる。口縁部内外面はナデ、体部はハケメ調整を施す。胎土は精良で、淡橙色を呈し、焼成は良好。

杯身（126）　底部は丸みを持ち、口縁部の立ち上がりは上方にのび、端部は丸くおさめる。受け部は水平で、先端は丸い。内外面はナデ調整を施す。胎土は精良で、灰色を呈し、焼成は堅緻。

器台（127）　裾部は「ハ」字状に広がり、端部は内側に傾斜面を持つ。2 条の凹線の間に透かしを 2 段・三方に開ける。外面はカキメ、内面はナデ調整を施す。胎土は精良で、灰色を呈し、焼成は堅緻。

太秦 6 地区（図版 34　図 49）

調査 9-37 の土壙墓 27 から一括で出土した土師器（128 ～ 131）、白磁（132・133）である。128 ～ 131 は 11 世紀後半に属し、132・133 も同時期に比定できる。いずれも完形である。

皿（128 ～ 131）　128・129 は口縁部を強くヨコナデし、端部が内側に肥厚する。130・131 は口縁部を 2 段にヨコナデし、端部は丸くおさめる。底部には指頭痕を残す。

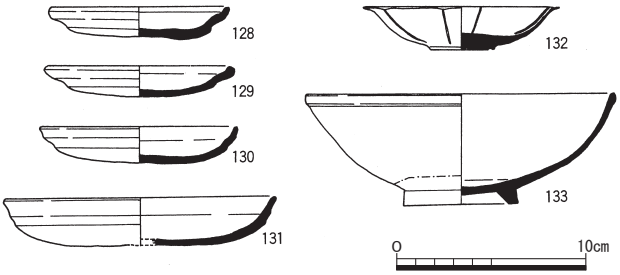

図 49　太秦 6 地区出土土器（1:4）

皿（132）　断面三角形の低い高台で、体部は外上方に低く開き、口縁部は外反し水平に開く。高台部以外に明青灰色の釉を施す。輪花皿である。

椀（133）　底部は削り出し高台で、体部は丸みを持って外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに内湾し、端部は玉縁状を

呈する。体部外面はケズリ、高台部以外に灰白色の釉を施す。

b　嵯峨・嵐山地域

鹿王院・車折地区（図版 35　図 50）

この地区からは土師器（134 ～ 137）、須恵器（138）が出土した。138 は 6 世紀末、135 ～ 137 が 7 世紀後半、134 は 8 世紀前半に属する。134 ～ 137 が鹿王院地区、138 は車折地区から出土している。

皿（134）　底部は平坦で体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部の内外面はヨコナデ調整し、底部外面には指痕を残す。内面には放射と螺旋の暗文を施す。胎土は精良で淡赤褐色を呈し、焼成は良好。土壙 111 から出土。

甕（135 ～ 137）　全形を知り得るものはないが、口縁部の形態が異なる。135 は外上方に直線的のび、136 は内湾し、137 は外反する。いずれも内外面にハケメ調整を施す。135 は遺物包含層 130、136 は遺物包含層 97、137 は遺物包含層 127 から出土。

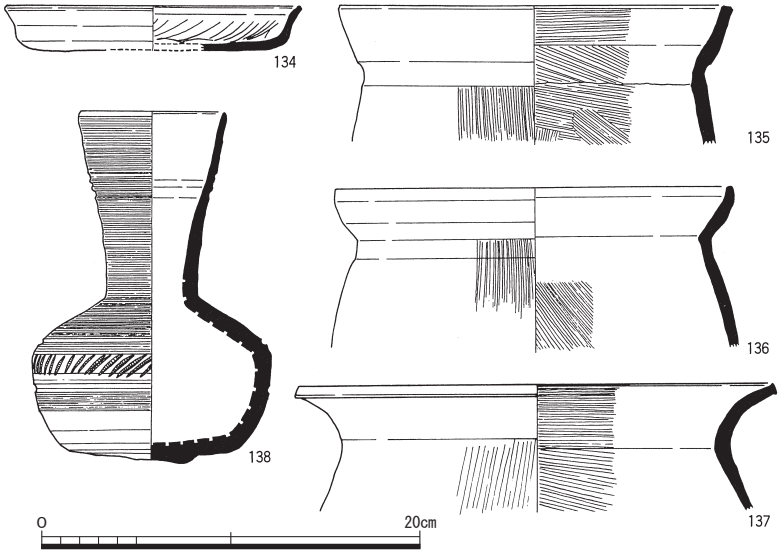

図 50　鹿王院・車折地区出土土器（1:4）

長頸壷（138）　ほぼ完形である。頸部は細く外上方へのびる。肩部に 2 条の凹線と櫛目刺突文、頸部上半部には 3 条の凹線を施し、口縁部から体部にかけてカキメ調整を施す。胎土は石英粒を含み、暗灰色を呈し、焼成は堅緻。流路 86 から出土。

天龍寺地区（図版 35　図 51）

史跡名勝嵐山内の天龍寺下層の土壙 100 からは、土師器（139 ～ 153）、須恵器（154 ～ 165）、黒色土器が一括出土した。杯・皿・椀などの供膳形態の土器が多くを占め、須恵器の出土量が多い。いずれも 9 世紀初頭[註1]に属する。

皿（139 ～ 141・143 ～ 146）　小型の 139 ～ 141 は内外面ともにナデにより調整する。139 は器壁が薄く、口縁部は外反し端部は鋭い。中型の 143 ～ 145 は口縁部外面の調整はヘラケズリによる。143 はナデが残り、口縁端部は小さく内側に巻き込む。大型の 146 は底部外面にヘラケズリを施す。

杯（142・147 ～ 151）　小型の 142 は丸い底部で、口縁部外面にはヘラミガキを施す。147 ～

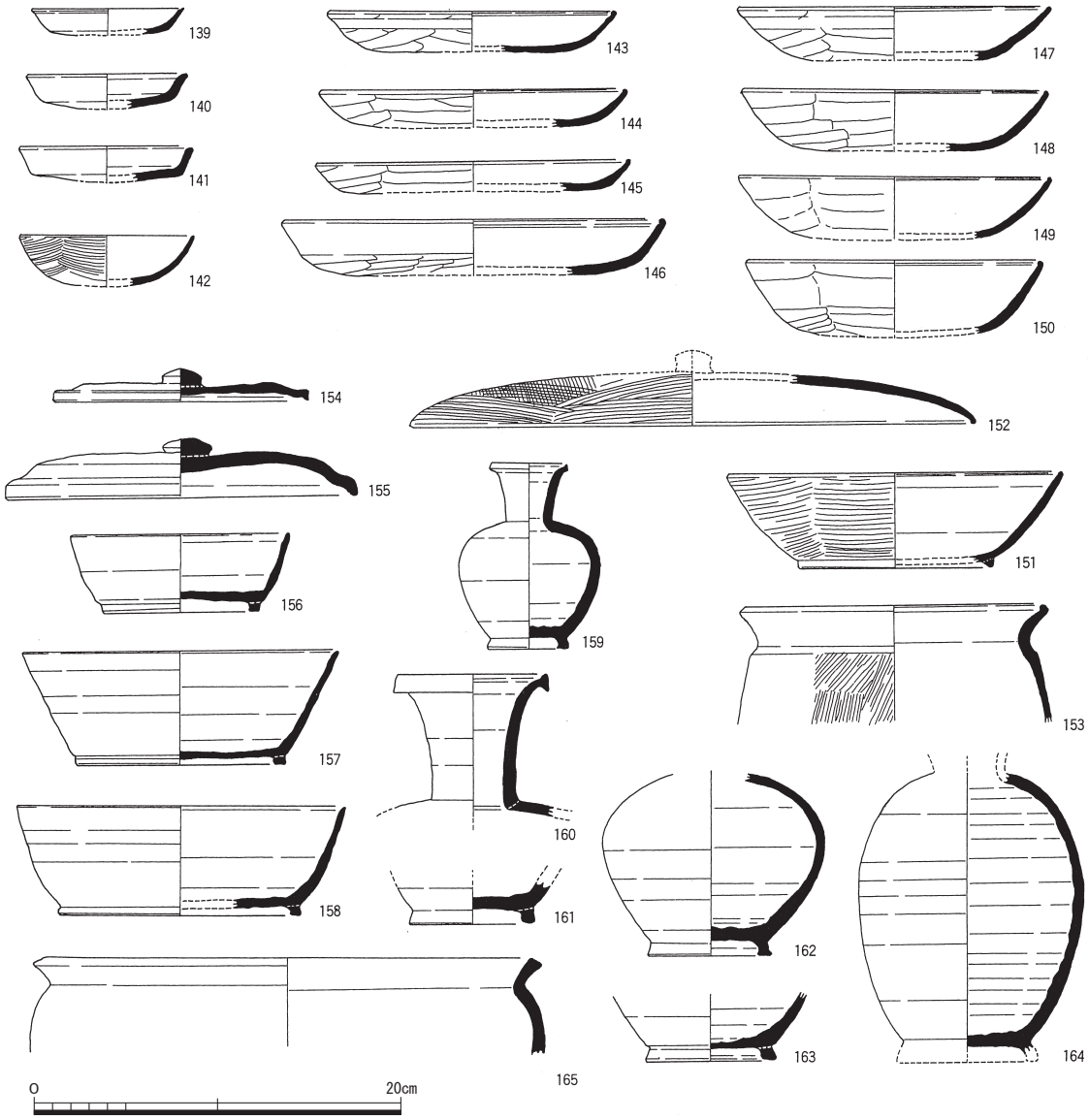

図 51　天竜寺地区出土土器 (1:4)

150 は口縁部外面の調整はヘラケズリによる。147 は口縁部外面にナデが残り、端部は小さく内側に巻き込む。高台の付く杯 151 は外面にヘラミガキを施す。

蓋 (152)　直径 30cm を越える大型の蓋で、つまみを欠く。天井部は平坦で、口縁端部は下に突出し丸くおさめる。外面はヘラミガキ、内面はナデを施す。

甕 (153)　「く」字状に外反した口縁部は端部を内上方へ少し突起させておさめる。体部外面はハケメ調整を施し、内面はナデで仕上げる。

杯 (156 ～ 158)　大小 2 種類があり、いずれも平坦な底部端に高台が付く。体部が直線的に外傾して上方にのびる 157 と、やや内湾しながら上方にのびる 156・158 がある。いずれも内外面ともにナデ調整を施す。

蓋 (154・155)　大小 2 種類があり、共にやや扁平なつまみを持つ。154 は平坦な天井部で、口縁端部を下方に突出させる。155 は口縁部を下方に屈曲させ、端部を丸くおさめる。内外面とも

にナデ調整を施す。

壷（159 ～ 164）　体部が球形に近いもの、卵形を呈するものがあり、いずれも高台が付く。体部外面の調整はナデによる。

鉢（165）　肩の張った体部から口縁部が「く」字状に外側に屈曲し、端部は外側に傾斜する面を持つ。内外面ともナデ調整を施す。焼成は軟質である。

北嵯峨地区（図版 36　図 52）

嵯峨院跡の土壙 137 からは土師器（166 ～ 183）、須恵器（184・185・203）、灰釉陶器（186 ～ 191）、緑釉陶器（192 ～ 198）、黒色土器（200 ～ 202）、輸入黄釉陶器（199）が一括で出土した。杯・皿・椀・高杯など供膳形態の土器がほとんどを占め、灰釉陶器や緑釉陶器の皿・椀の多いことが特徴である。いずれも 9 世紀前半[註2]に属する。

杯（166 ～ 169）　体部外面の調整は 166・169 がヘラケズリで、168 はナデが残る。166・167 はナデで調整する。いずれも口縁端部はわずかに肥厚する。

皿（170 ～ 174）　170 ～ 172 の体部外面はナデで調整する。173・174 の調整はヘラケズリで、174 はナデが残る。いずれも口縁端部はわずかに肥厚する。

椀（175 ～ 178）　体部外面の調整はヘラケズリである。175 は体部外面にナデが若干残り、口縁端部はわずかに肥厚する。

高杯（179 ～ 182）　179 の扁平な杯部は口縁部で緩やかに外反し、端部は内傾する面をなし、上端は丸く肥厚する。杯部と脚部との境は明瞭で、脚部は断面が七角形を呈する。杯部の口縁部外面から底部内面をナデ調整し、外面と脚部は上方に向けて削る。裾部外面はナデ調整を施す。

甕（183）「く」字状に外反した口縁部は、端部を内上方へ少し突起させて丸くおさめる。口縁部内側はハケメ、体部外面はナデ調整を施す。

杯（184・185）　184 は平坦な底部から体部が直線的に外上方に大きく開く。185 は底部端に高台が付く。内外面ともにナデで仕上げる。

鉢（203）　外側に開く体部から上半で内湾気味に立ち上がり、口縁部が「く」字状に外側に屈曲し、端部は外側に傾斜する面を持つ。内外面ともナデ調整を施す。焼成は軟質である。

皿（186・187）　187 は器高が浅く、口縁部は内側へわずかに折れ曲がったのち小さく外反し、端部は丸くおさめる。底部には断面が方形の高台が付く。外面下段はケズリのちナデ、他の部位はナデ調整を施し、内面のみ施釉する。

椀（188 ～ 191）　188 は断面が方形の貼り付けの輪高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。内面はナデ、外面下半はケズリのちナデ調整を施す。大半が内面のみ施釉し、釉調は灰オリーブ色である。

椀（192 ～ 194・196 ～ 198）　小型の 192 は底部に断面が方形の貼り付けの輪高台が付く。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反し、端部はやや尖り気味におさめる。内外面をナデ調整し、全面に施釉する。大型の 197 は蛇の目高台である。体部は比較的緩やかに外上方へ広がり、

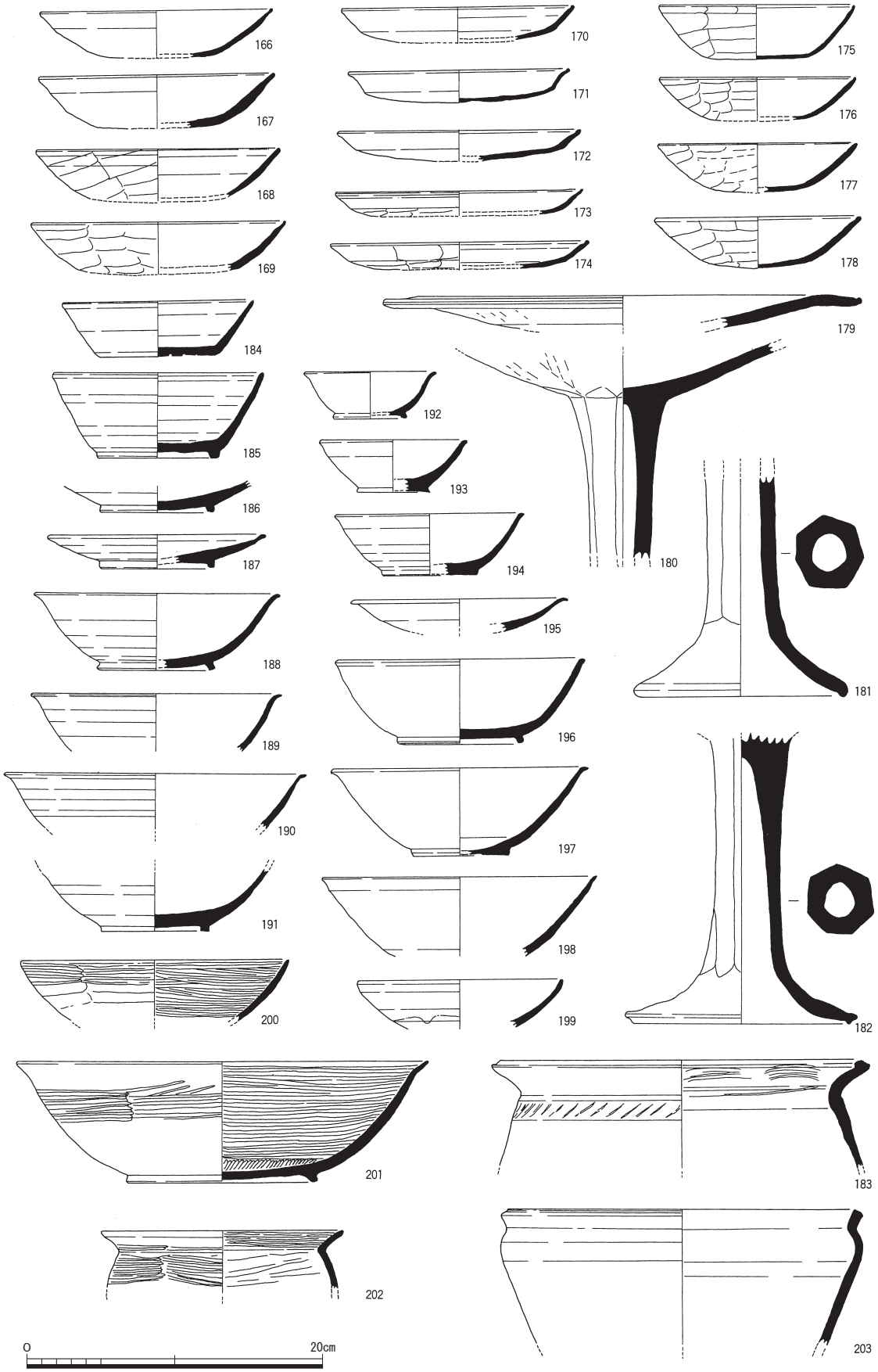

図 52　北嵯峨地区出土土器 (1:4)

口縁部はごくわずかに外反し、端部はやや尖り気味におさめる。内外面をミガキ調整し、刷毛で全面に施釉する。196 は底部に断面が方形の貼り付けの輪高台が付く。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部外面から体部外面はケズリのちミガキ調整し、全面に施釉する。素地は軟質のものとよく焼け締まったものがあり、釉調は淡緑色から緑色を呈する。

皿（195）　器高は浅く、口縁部は大きく外反し、端部を丸くおさめる。底部を欠く。

椀（200・201）　200 は体部がやや丸みを持って外上方へ開き、口縁端部は丸くおさめる。体部内面のみを黒色化し、ヘラミガキを施し、外面はケズリ、口縁部はナデのち上段にヘラミガキを施す。201 は体部がやや丸みを持って外上方へ開き、口縁部は外反する。内面のみを黒色化し、細かいヘラミガキを密に施し、外面はケズリ調整のちミガキを施す。

甕（202）　口縁部が「く」字状に外反し、端部はやや尖り気味におさめる。口縁部外面はナデ調整、他の部位にはヘラミガキを施す。

椀（199）　底部を欠く。外面下半にはケズリを施している。内面と外面上半にオリーブ黄色の釉を施し、胎土は細かい砂粒を含み、浅黄色を呈する。長沙窯系の製品とみられる。

化野地区（巻頭図版 2　図版 37　図 53 ～ 55）

史跡名勝嵐山内のこの地区では墓跡から褐釉陶器四耳壷（205）や副葬品の土器類が出土した。他に、採取した常滑壷（207）や個人所蔵の信楽壷（206）などがある。204 は金属製品であり、第 3 節で別に述べる。

壷（205）　樽型の形態で、口縁部は「く」字状に短く外反する。頸部下に 2 条の凹線を施し、その上に 4 個の横形の耳を貼り付けるが、うち 1 個は焼成時に欠落している。胴部下半はケズリ、口縁部内側と底部付近には目跡が残る。内外面とも浅黄色の釉を施し、さらに胴部上位から黒褐色の鉄釉を掛け流す。口縁部には金銅製蓋の緑青が付着する。口径 9.1 ㎝、器高 20.8 ㎝、胴部径 14.4 ㎝を測る。胎土は暗赤褐色の粒を多く含み、焼成は良好である。火葬墓 13 から出土した蔵骨器で、12 世紀後半の中国河南地方の製品。金銅製蓋（204）を伴う。

壷（207）　体部に浅い 3 条の凹線を施し、体部下半を縦方向のヘラケズリ、他はナデで仕上げる。胎土には砂粒を少量含み、焼成は良好で、灰色を呈し、

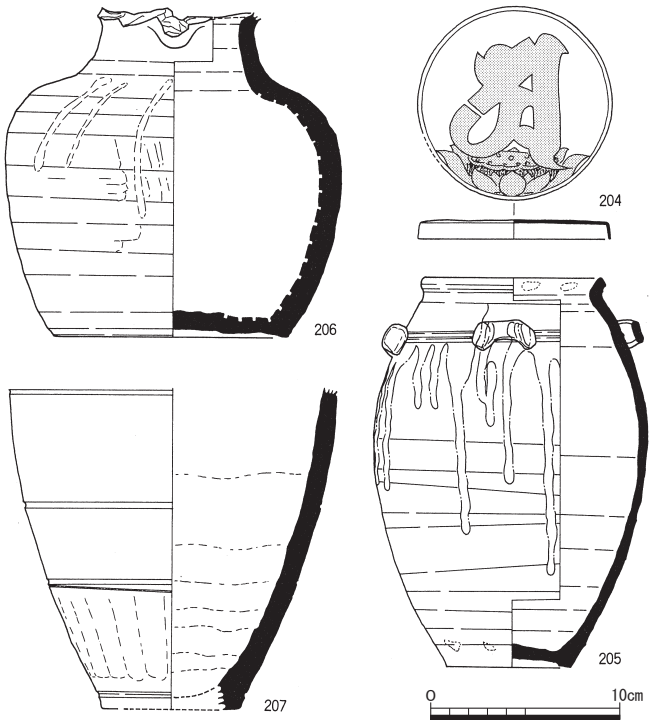

図 53　化野地区出土遺物 1(1:4)

灰オリーブ色の自然釉がみられる。残存高は17.0cm。13世紀の常滑窯の製品で、蔵骨器として出土例が多く、三筋壷と呼ばれる。化野念仏寺境内の隣接地の調査6-2で採取した。

壷(206)　広い底部から内湾しながら立ち上がる体部に、やや長めの頸部と受け口状の口縁を持つ片口壷である。体部外面は横方向のヘラケズリとナデで仕上げる。体部には梵字で経文が墨書される。残存高は17.0cm、胴部径17.7cm、底部径12.5cm。胎土には長石粒を多く含み、明褐色を呈し、焼成は良好である。14世紀頃の製品で、口縁端部は欠損し、蔵骨器として転用された。化野町内(図32、A地点)で開発工事中に出土[註3]した。

椀(208・209)　208・209ともに伊万里産の小椀である。209は口縁部に「雨降り文」と呼ばれる染付の鋸歯状文様が描かれている。口径7.9cm、器高3.9cmを測る。18世紀後半に属し、墓15の副葬品である。208は文様は描いていない。口径7.3cm、器高3.7cm、掘削排土からの採取であるが、副葬品とみられる。

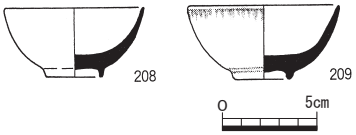

図54　化野地区出土遺物2(1:4)

甕(210)体部は倒卵形に近い形態を呈し、口縁部は短く上方に立ち上がり、折り曲げによる玉縁はやや扁平である。口縁部は、内外面ともに横ナデを施し、体部外面上半は、斜め方向のケズリ、下半は下方から上方に向けてケズリ、内面はケズリで調整する。胎土は粗く、焼成は良好である。色調は暗赤褐色を呈し、口縁部と肩部に浅黄色の自然釉が散点状に付着する。底部には直径20cmほどの欠損部があり、墓壙に据付け前に打ち欠いたとみられる。備前窯産の大甕で、15世紀に属し、墓5の甕棺として使用された。加工した石材(73)を蓋として使用していた。

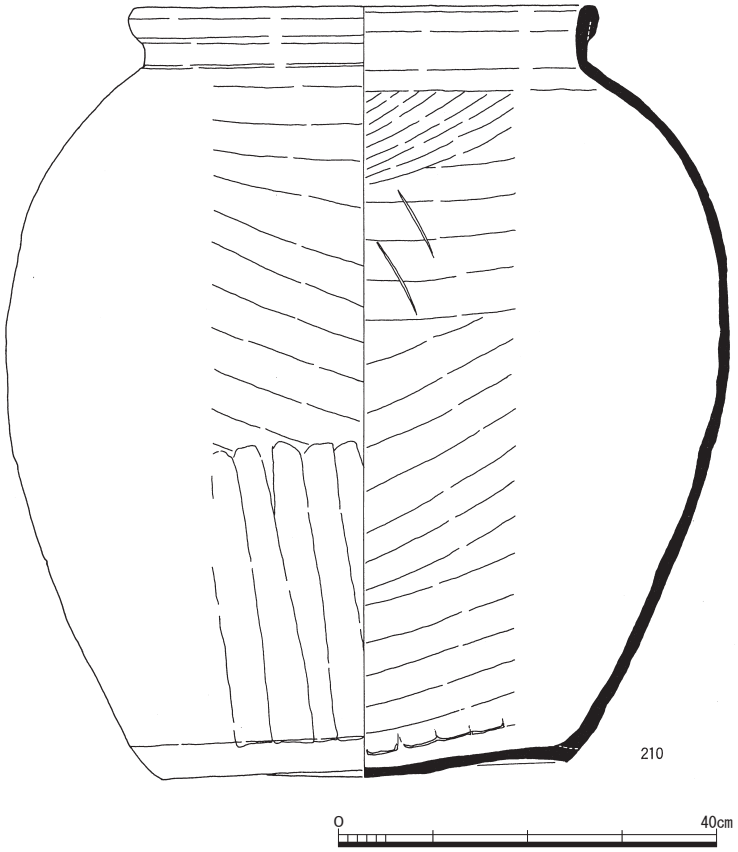

図55　化野地区出土遺物3(1:8)

嵐山南地区他（図版 37　図 56・57）

史跡名勝嵐山内の嵐山南地区では、土壙から備前窯産の壷（213）が出土した。また、鹿王院地区の井戸からは、室町時代の土器類と共に天目椀（211・212）が出土している。

椀（211）　高台径は狭く、高台内をやや内側に、高台脇は水平に削り込む。体部はやや丸みを持って立ち上がり、口唇部でわずかにくびれる。高台部周辺をやや広い露胎とし、暗褐色の鉄釉を施す。体部内外面には縦方向の暗赤褐色の細かい筋（禾目）が全面に認められる。底部外面には花押が墨書きされる。胎土は砂粒を少量含み、鈍い黄色を呈する。中国産で、14 世紀後半に比定できる。井戸 13 から出土。

椀（212）　高台径は狭く、高台端部は斜めに削りとる。高台脇を斜め方向に削り込み、体部はやや外反気味に立ち上がり、口唇部はくびれ、端部で外反する。高台付近に暗赤褐色の錆釉を施し、他の部分にはオリーブ黒色から黒色の鉄釉が施される。高台内と高台脇に目跡が認められる。胎土はやや粗く灰白色を呈する。瀬戸産で 15 世紀前半に属する。井戸 13 から出土。

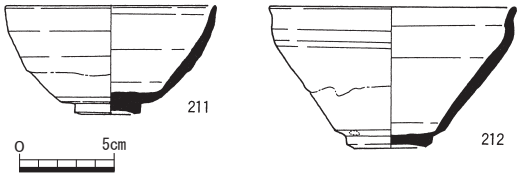

図 56　鹿王院地区出土遺物（1:4）

壷（213）　長胴形の体部と短く立ち上がる口縁部からなる。口縁端部はわずかに外反し、肩部には 2 段の櫛描波状文を施す。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は暗赤色を呈し、明黄褐色の自然釉が散点状に付着する。16 世紀の備前窯の製品。土壙 12 から出土。

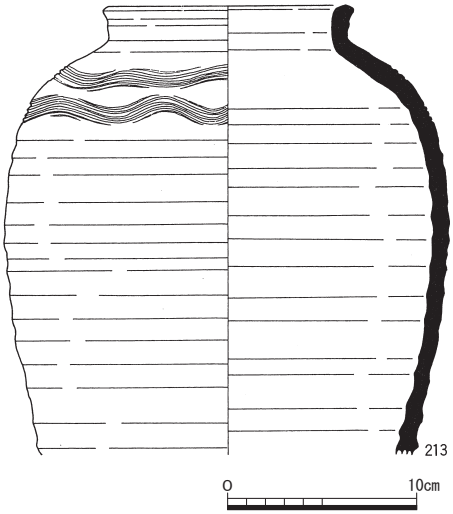

図 57　嵐山南地区出土遺物（1:4）

註

1　平安時代前期の土器類については文 337 の編年を基準とした。
2　註 1 に同じ。
3　化野町内に蔵骨器が保管されていることを化野念仏寺の執事長、原　彗氏に御教示していただき、壷の所蔵者である渡辺義和氏の御厚意により、ここに掲載することができた。

2　瓦甎類

出土した瓦甎類を双ヶ岡、太秦、嵯峨・嵐山の各地域の順に報告する。双ヶ岡地域は鳴滝、常盤1、御室、花園の4地区に分けてa項で、太秦地域は太秦4、太秦2、太秦5、その他の4地区に分けb項で、嵯峨・嵐山地域は、平安時代前期の軒瓦を天龍寺・嵐山・野々宮北・北嵯峨地区にまとめて、その他の瓦類は天龍寺・化野・鹿王院地区にまとめてc項で報告する。なお発掘調査で出土した軒瓦も各地域に分けて同様に扱った。

a　双ヶ岡地域

鳴滝地区（図版40　図58）

調査10-50（Ⅲ-1）で出土した軒瓦1がある。

剣巴文軒平瓦（1）　二巴文と剣頭文を配する。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。焼成はやや軟質で、灰黒色を呈する。遺物包含層44から出土。山城産。

常盤1地区（図版38・40　図58）

軒瓦2～7は調査10-123（Ⅲ-1）で出土した。軒瓦8～19は仁和寺院家跡の発掘調査10-78[文377]で検出された遺物包含層から出土した。時期は平安時代後期が多くを占めるが鎌倉時代のものも含まれる。

剣頭文軒平瓦（2）　瓦当右端部の破片で、同文の軒平瓦の中では小型品である。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。焼成は軟質で、灰色を呈する。溝1から出土。山城産。

剣頭文軒平瓦（3）　剣頭文に通常みられる鎬がみられない。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。焼成はやや軟質で、灰白色を呈する。遺物包含層10から出土。山城産。

均整唐草文軒平瓦（4）　中心飾りは舌状を呈し、太めの唐草が3反転する。焼成はやや軟質で、淡灰白色を呈する。遺物包含層10から出土。

三巴文軒丸瓦（5）　尾部の細い右巻き巴文で、外区に大粒の珠文を配す。焼成はやや軟質で、暗灰色を呈する。遺物包含層10から出土。

三巴文軒丸瓦（6）　尾部の細い巴文で、外区に小粒の珠文を配す。焼成は軟質で、淡橙色を呈する。溝1から出土。

均整宝相華文軒平瓦（7）　宝相華文を中心飾りとし、左右に唐草と花文が反転する。焼成は硬質で、灰色を呈する。遺物包含層10から出土。大和産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（8・10）　いずれも中房の蓮子は1＋6であるが、10の複弁間には隙間がみられず、瓦当の大きさも8より小さい。周縁幅は共に一定しない。焼成はやや軟質で、8は淡黒色、10は淡灰色を呈する。

三巴文軒丸瓦（9）　右巻きの巴文で、尾部は長くのび互いに接して界線となる。外区には大粒

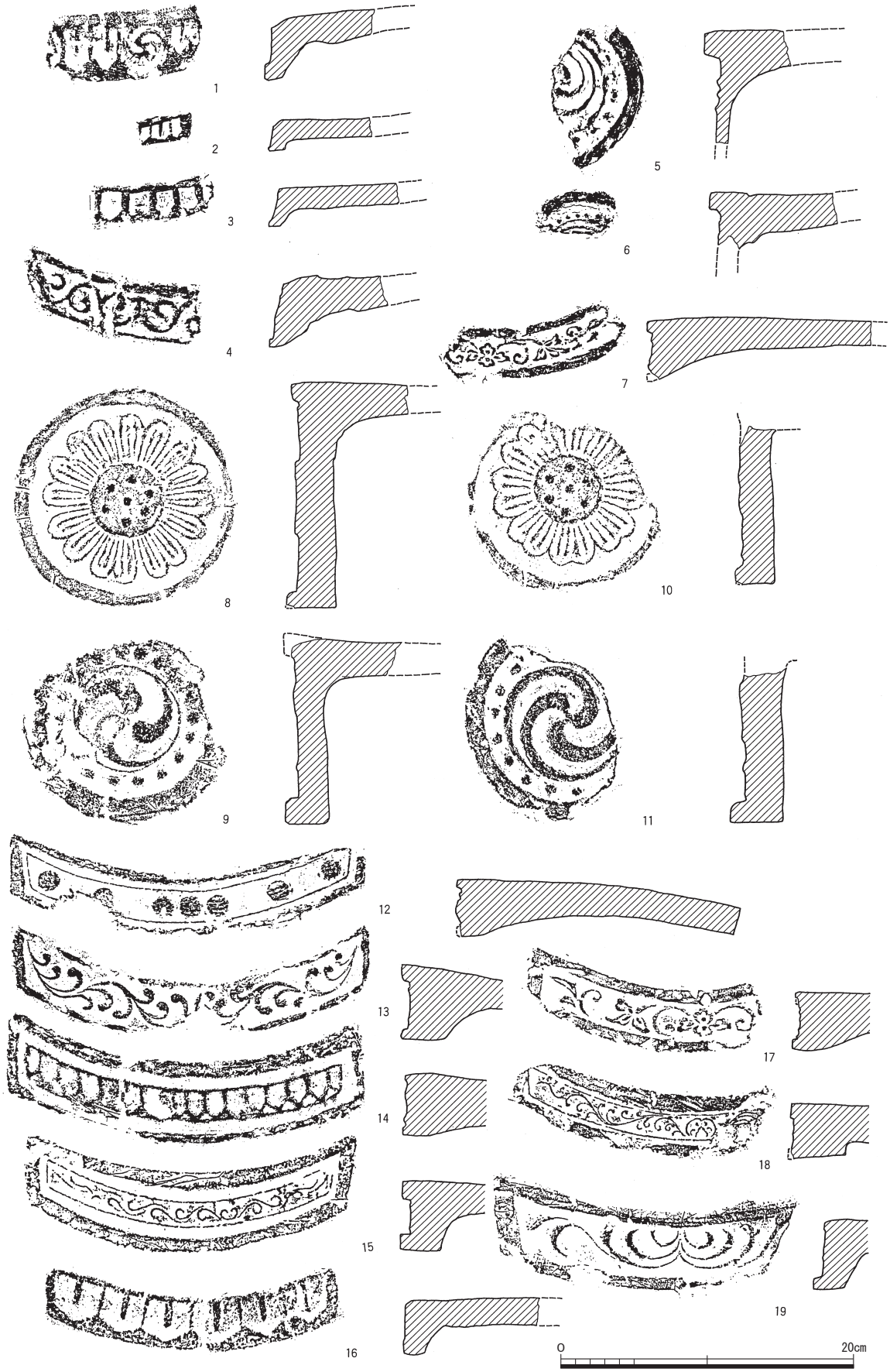

図 58　鳴滝・常盤 1 地区出土軒瓦（1:4）

の珠文を 18 個配する。

三巴文軒丸瓦 (11)　右巻きの巴文で、やや太めの尾部がのびて界線となる。外区に大粒の珠文を配する。

連珠文軒平瓦 (12)　中央に 3 個、左右に 2 個ずつの大粒の珠文を配す。焼成は硬質で、淡灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦 (13)　中央部を欠いているが均整唐草文とみられ、左右から子葉の多い唐草が中央に向かい大きく反転する。焼成は硬質で、淡青灰色を呈する。

剣頭文軒平瓦 (14)　鎬のない剣頭文を配し、界線がめぐる。焼成は硬質で、淡灰色を呈する。鎌倉時代のものである。

唐草文軒平瓦 (15)　C 字内向の中心飾りが右に偏り、細い唐草が左右に転開する。瓦当面には離れ砂が付着する。焼成は硬質で、淡青灰色を呈する。

剣頭文軒平瓦 (16)　大きめの剣頭文を配する。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。焼成はやや軟質で、灰白色を呈する。山城産。

宝相華文軒平瓦 (17)　宝相華文を中心飾りとし、左右に唐草が反転する。焼成は硬質で、淡灰色を呈する。大和産。

均整唐草文軒平瓦 (18)　瓦当部の右側を欠く。簡略化された唐草を中心飾りとする均整唐草文とみられる。焼成は硬質で、淡青灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦 (19)　簡略化された唐草が中心上部から、左右に 2 転する。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。焼成は硬質で、青灰色を呈する。

御室地区 (図版 38　図 59)

調査 4-12(Ⅲ -1) から出土した軒瓦 20 がある。

三巴文軒丸瓦 (20)　輪郭が明瞭な右巻きの巴文で、尾部は長くのび互いに接して界線となる。外区にはやや小粒の珠文を密に配す。焼成はやや軟質、灰白色を呈する。遺物包含層 17 から出土。

花園地区 (図版 38 ～ 41 図 59 ～ 63)

軒瓦 21 ～ 25 は調査 11-6(Ⅲ -1)、26 ～ 30 は調査 11-56(Ⅲ -1)、45 ～ 75 は調査 11-12(Ⅲ -1) で出土した。31 ～ 33、35 ～ 38 は史跡妙心寺境内・平安京右京北辺四坊の発掘調査 11-49[附12] で検出された平安時代後期の土壙、34 は江戸時代の土壙から出土した。39 ～ 41 は平安京右京一条四坊五町の発掘調査 11-84[文414] で検出された平安時代後期の井戸から、42 ～ 44 は円乗寺跡の発掘調査 11-26[文348] で検出された平安時代後期の土壙から出土した。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (21)　大きな中房の蓮子数は 1 ＋ 8 とみられる。瓦当面の全面には灰釉が被る。焼成は硬質で、淡灰色を呈する。溝 293 から出土。尾張産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (22)　花弁は丸く膨らみ、周縁に太い突帯がめぐる。焼成はやや軟質で、淡灰色を呈する。溝 293 から出土。

図 59　御室・花園地区出土軒瓦（1:4）

均整唐草文軒平瓦（23）　中心飾りは水滴状で、唐草文は小振りである。笵型のずれのため下方の周縁は幅が広い。焼成はやや軟質で、灰色を呈する。溝 293 から出土。

均整唐草文軒平瓦（24）　瓦当の大部分を欠いているが、均整唐草文とみられ、界線と珠文が認められる。焼成は軟質で、黄灰色を呈する。溝 293 から出土。

均整唐草文軒平瓦（25）　唐草文は子葉の先端の一方が界線に接し、飛雲文状を呈する。焼成は硬質で、淡黄灰色を呈する。溝 296 から出土。讃岐産。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（26）　中房は 1 ＋ 4 の蓮子、花弁間にはϒ形の弁間文を配する。焼成は硬質で、淡灰色を呈する。井戸 240 から出土。

単弁蓮華文軒丸瓦（27）　上半部を欠いているが、簡略化された花弁と、やや大粒の珠文を持つ。焼成は硬質で、灰白色を呈する。井戸 240 から出土。

唐草文軒平瓦（28）　小破片で、細い唐草文と珠文が認められる。焼成は硬質で、灰白色を呈する。井戸 240 から出土。

宝相華文軒平瓦（29）　文様は簡略化されており、瓦当部は薄い。焼成は硬質で、淡灰色を呈する。井戸 240 から出土した。

均整唐草文軒平瓦（30）　中心飾りは水滴状で、左右に細い唐草が反転する。瓦当部の接合は包込み技法で、断面の形状は撥形。焼成は硬質で、灰白色を呈する。井戸 240 から出土。播磨産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（31）　中房はやや大きく 1 ＋ 4 の蓮子を配する。花弁はかなり簡略化されている。丸瓦部凸面に縄目タタキを施す。焼成は硬質で、灰白色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（32）　中房は段状に突出し、1 ＋ 4 の蓮子の外側に二重界線がめぐる。外区の珠文は比較的大きい。焼成は硬質で、灰白色を呈する。

三巴文軒丸瓦（33）　左巻きの三巴文で、周縁はやや幅が広い。焼成は硬質、灰白色を呈する。

軒丸瓦（34）　中央は木葉状の家紋を配する。周縁は幅広である。焼成はやや軟質で、灰黒色を呈する。江戸時代のものである。

単弁十二葉蓮華文軒丸瓦（35）　弁間に小さな楔状の弁間文が認められる。焼成は硬質で、灰白色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（36）　25 と同様で、唐草は飛雲文状を呈する。周縁は笵がつぶれているためか、界線の下方にのみ珠文が認められる。焼成は硬質で、灰白色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（37）　中心飾りは背向 C 字形で、外区には小粒の珠文を密に配する。焼成は硬質で、灰白色を呈する。

偏行唐草文軒平瓦（38）　唐草は簡略化され大きく巻く。焼成は硬質で、灰色を呈する。

三巴文軒丸瓦（39）　左巻きの巴文である。瓦当面はやや楕円形を呈する。焼成は硬質で、灰白色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（40）　中房に 1 ＋ 5 の蓮子を配す。花弁の先端は角張り、弁間文は凸線で表す。周縁に沿い界線がめぐる。焼成は硬質で、青灰色を呈する。山城産。

均整唐草文軒平瓦（41）　中心飾りから太い唐草が 3 反転する。瓦当部の成形は折り曲げ技法

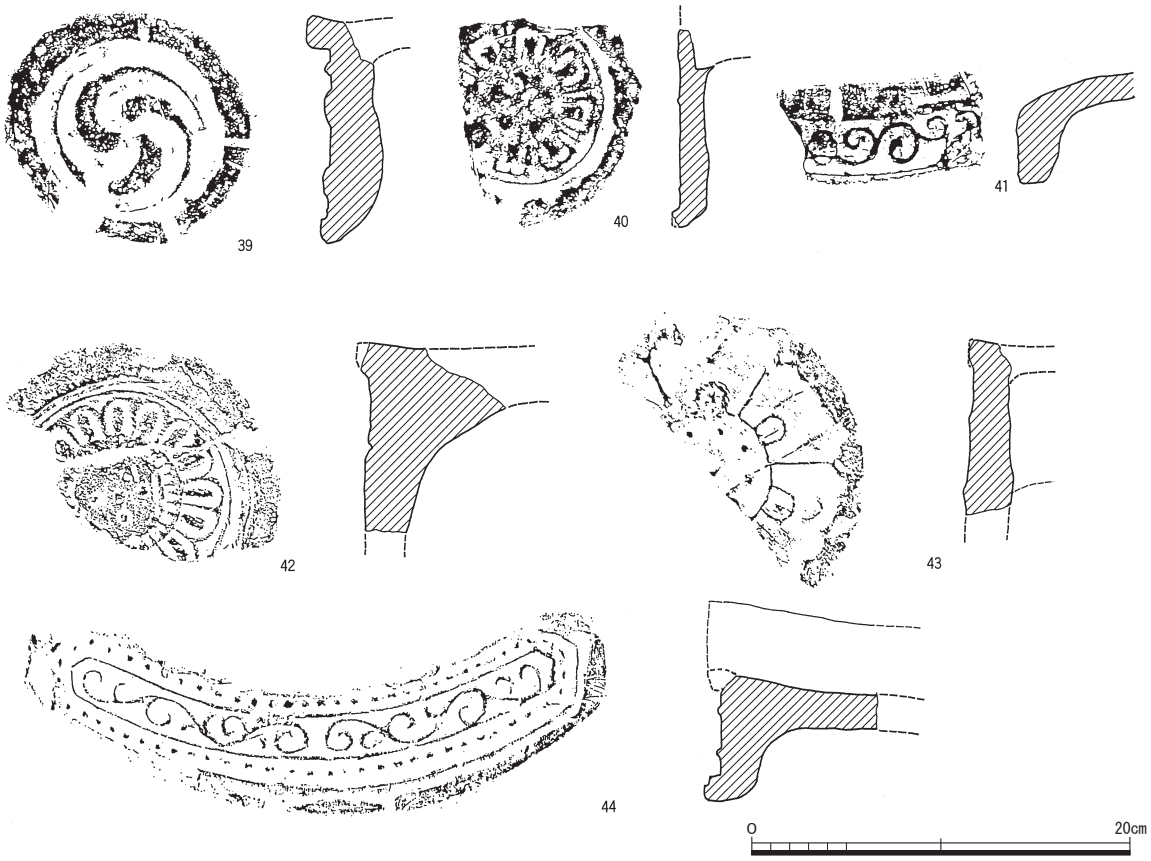

図 60　花園地区出土軒瓦 1(1:4)

による。焼成はやや軟質で、灰褐色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (42)　中房に 1 ＋ 8 の蓮子を配し、雄芯をめぐらす。焼成はやや軟質で、灰黒色を呈する。大和産。

単弁六葉蓮華文軒丸瓦 (43)　中房の蓮子は 1 ＋ 8 とみられる。花弁は比較的大きく周縁に接する。焼成はやや軟質で、淡灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦 (44)　唐草文は両側に 2 転し、中心では唐草が内側に巻く。外区に小粒の珠文を密に配す。両脇区は三角形に張りだす。焼成は硬質で、青灰色を呈する。播磨産。

緑釉単弁十葉蓮華文軒丸瓦 (45)　中房の蓮子は 1 ＋ 5。花弁の輪郭、界線は二重線で表す。下方の花弁に篆書で「左」字名を陽刻す。瓦当裏面に明瞭な布目痕を残す一本造りである。焼成はやや軟質で、淡黄灰色を呈する。流路 350 から出土。山城産。

緑釉単弁十葉蓮華文軒丸瓦 (46)　花弁の輪郭は二重線で表す。珠文はやや大粒である。焼成はやや軟質で、淡黄褐色を呈する。流路 350 から出土。山城産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (47)　花弁の周囲に輪郭線があり、珠文は大粒である。瓦当部裏面に布目痕が認められる。焼成は軟質で、淡黄灰色を呈する。流路 350 から出土。山城産。

緑釉均整唐草文軒平瓦 (48)　唐草文は複線で表されており、緑釉軒丸瓦 45 とセットになる[註2]。焼成はやや軟質で、淡黄灰色を呈する。流路 350 から出土。山城産。

均整唐草文軒平瓦 (49)　中心飾りは対向 C 字形で、唐草文の主葉・子葉は強く巻き込む。外

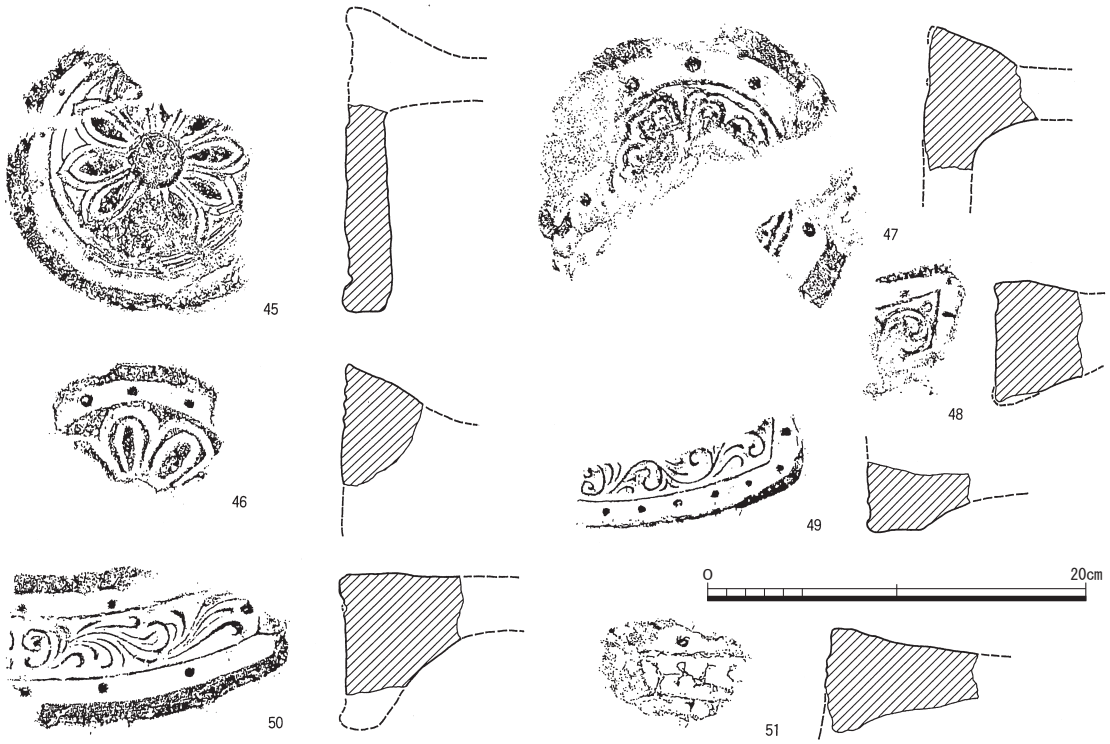

図 61　花園地区出土軒瓦 2(1:4)

区には珠文を密に配する。焼成はやや軟質で、灰黒色を呈する。流路 350 から出土。山城産。

均整唐草文軒平瓦 (50)　中心飾りは対向 C 字形で、唐草の主葉・子葉は強く巻き込む。珠文は大粒である。焼成は硬質で、黒灰色を呈する。流路 350 から出土。

均整唐草文軒平瓦 (51)　唐草はかなり簡略化されている。外区には大粒の珠文を配し、周縁は作らない。焼成は軟質で、灰黒色を呈する。流路 350 から出土。森ヶ東瓦窯産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (52)　中房に蓮子 1 ＋ 6 ＋ 2 ＋ 14 を配し、外側に雄芯がめぐる。花弁は幅広で、弁間は不明瞭である。花弁周囲には界線がみられる。焼成は硬質で、灰黒色を呈する。遺物包含層 365 から出土。丹波産。

単弁十一葉蓮華文軒丸瓦 (53)　中房に蓮子 1 ＋ 6 を配する。花弁は楕円形で、大粒の珠文は 25 個を配す。瓦当面に自然釉が被る。焼成は硬質で、灰白色を呈する。遺物包含層 365 から出土。播磨産。

三巴文軒丸瓦 (54)　小振りの右巻き巴文で、外側の二重の界線の中に 14 個の珠文を配す。周縁幅は広い。焼成は硬質で、青灰色を呈する。土壙 359 から出土。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (55)　中房は段をなして突出する。花弁の幅はやや広い。珠文は花弁、弁間文に対応して規則的に配する。遺物包含層 366 から出土。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦 (56)　花弁の輪郭線は細く明瞭。外区には、やや大粒の珠文を配す。焼成は軟質で、黒灰色を呈する。遺物包含層 367 から出土。山城産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (57)　細長い花弁間に丸みを持つ撥形の弁間文を配する。珠文はなく内区から周縁に移行する。焼成はやや軟質で、黒灰色を呈する。遺物包含層 367 から出土。

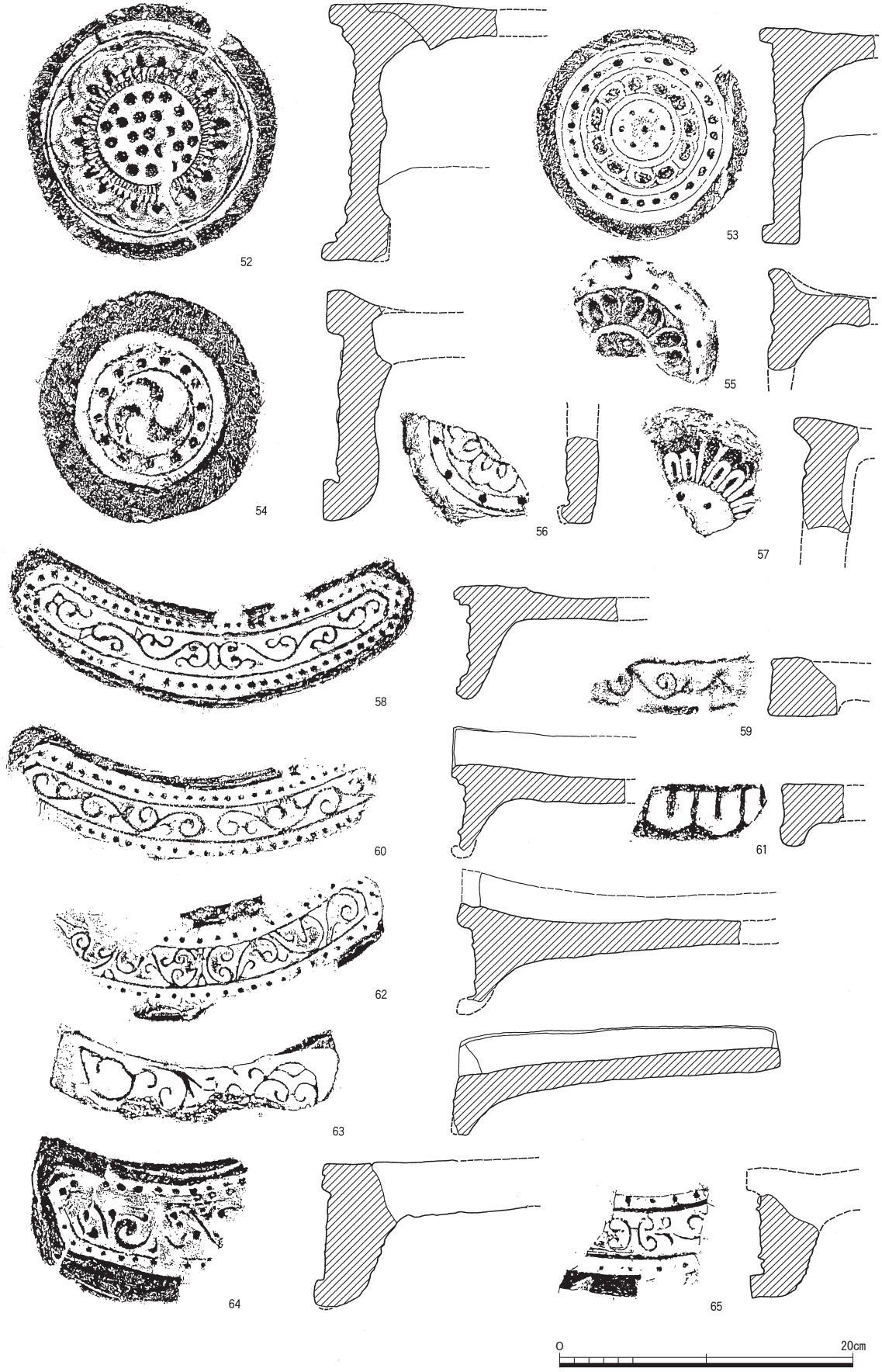

図 62　花園地区出土軒瓦 3(1:4)

均整唐草文軒平瓦（58）　中心飾りは2本の山形の線で結ばれた背向C字形で、その上端から唐草が左右に転開する。界線の外には珠文を密に配す。両脇区は三角形に張り出す。焼成は硬質で、青灰色を呈する。遺物包含層367から出土。播磨産。

唐草文軒平瓦（59）　唐草は細く巻きは強い。瓦当部上縁の布目痕は、明瞭に認められる。焼成はやや軟質で、黒灰色を呈する。遺物包含層366から出土。

均整唐草文軒平瓦（60）　唐草文は両側に2転し、中心では唐草が内側に巻く。珠文は小粒で密に配す。瓦当面の界線上には笵傷が認められる。瓦当部の接合は包込み式による。焼成は硬質で、青灰色を呈する。遺物包含層365から出土。播磨産。

剣頭文軒平瓦（61）　文様の輪郭は明瞭である。瓦当部上縁まで布目痕が認められる。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。焼成は軟質で、黒灰色を呈する。遺物包含層366から出土。山城産。

均整唐草文軒平瓦（62）　中心飾りは背向C字形で、唐草の主葉・子葉は強く巻き込む。珠文は小粒で密に配す。瓦当部の接合は包込み式による。焼成は硬質で、青灰色を呈する。遺物包含層365から出土。播磨産。

偏行唐草文軒平瓦（63）　ほぼ完形で小型の瓦である。細い唐草は左から右へ偏行する。主葉は大きく反転し、子葉は強く巻き込む。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。焼成は硬質で、黒灰色を呈する。遺物包含層367から出土した。栗栖野窯産。

均整唐草文軒平瓦（64）　中心飾りは背向C字形で上下を山形で結んだ文様とみられる。唐草は巻きが強く3転する。瓦当部裏面には横方向の縄目タタキが施されている。焼成はやや軟質で、黒灰色を呈する。土壙358から出土。丹波産。

均整唐草文軒平瓦（65）　中心飾りは横線で結ばれた背向C字形で、界線の外には小粒の珠文を配する。瓦当部裏面には縄目タタキが施されている。焼成は硬質で、灰色を呈する。遺物包含層366から出土。丹波産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（66）　中房には小粒の蓮子1＋4を配し、周囲に雄芯をめぐらす。花弁はやや細長く、先端は丸みを持つ。珠文はない。界線上に笵傷が認められる。焼成は硬質で、灰黒色を呈する。遺物包含層367から出土した。大和産。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（67）　中房には大粒の蓮子1＋4を配す。複弁間の区別は不明瞭。界線は二重で、珠文はなく、周縁は幅広である。瓦当部裏面に指圧痕が残る。焼成は硬質で、灰白色を呈する。遺物包含層367から出土。大和産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（68）　中房には大粒の蓮子1＋6を配す。花弁の輪郭はやや不明瞭で、弁間文は細線で表し、二重界線内に珠文を規則的に16個を配す。瓦当面下半に斜めの長い笵傷を有する。瓦当裏面に指圧痕が残る。焼成は硬質で、灰黒色を呈する。遺物包含層367から出土。栗栖野窯産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（69）　中房には1＋5の蓮子を配す。花弁の先端はやや角張り、外区の界線は花弁に対応してめぐり、曲線をなす。焼成は硬質で、灰色を呈する。遺物包含層367から出土。大和産。

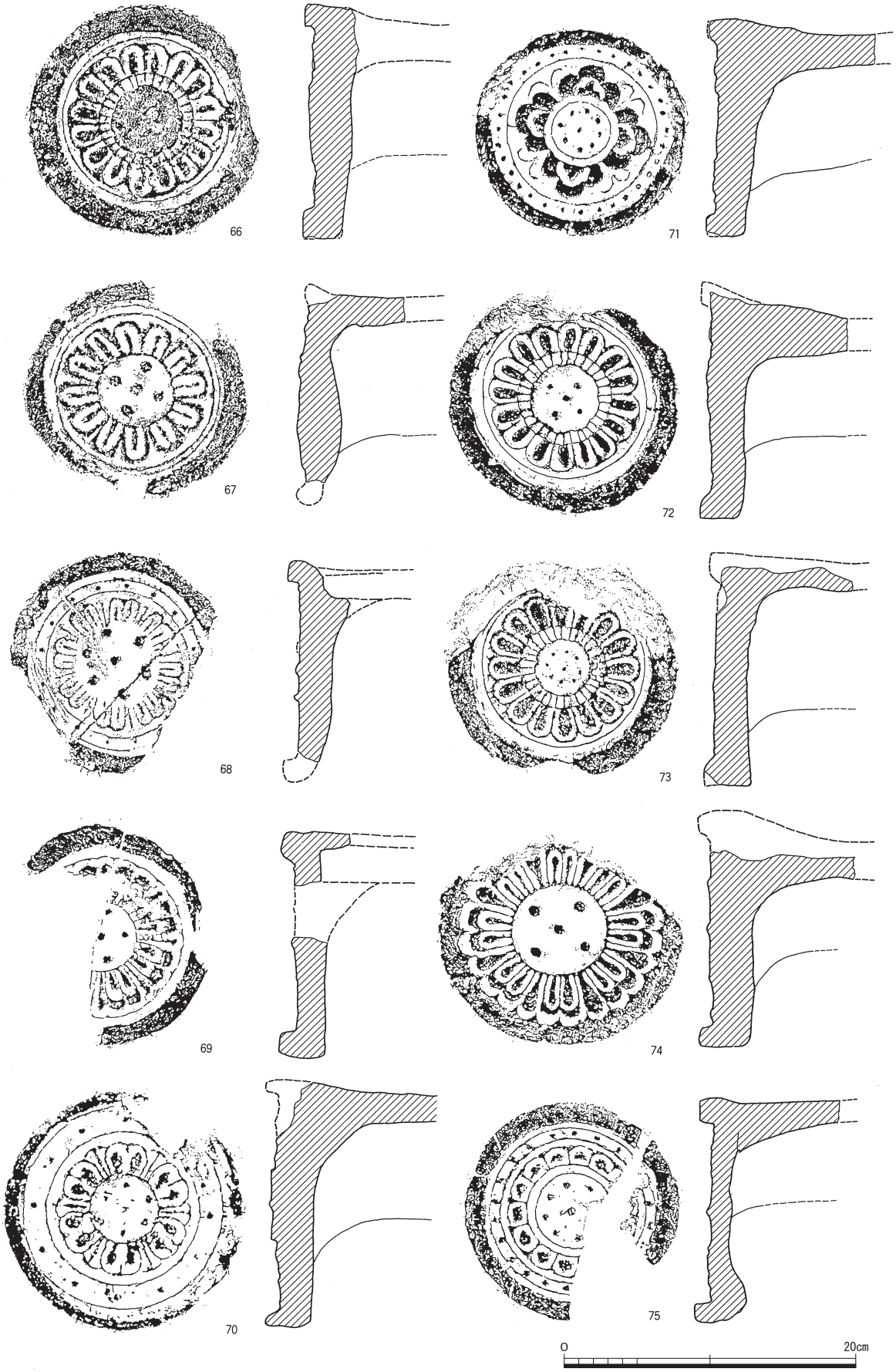

図 63　花園地区出土軒瓦 4(1:4)

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（70）　中房には１＋６の蓮子を配す。花弁は反りを持ち、T 形の弁間文が配されている。外区には花弁、弁間文に対応して規則的に珠文を 12 個配す。焼成はやや軟質で、黒灰色を呈する。遺物包含層 367 から出土。

四葉宝相華文軒丸瓦（71）　中房には１＋８の蓮子を配し、周囲に界線がめぐる。宝相華文間に細い花文状の弁間文がみられる。珠文は 32 個。焼成は硬質で、青灰色を呈する。遺物包含層 367 から出土。大和産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（72）　中房には１＋４の蓮子を配し、周囲に雄芯をめぐらす。花弁は 47 に類似する。外区は二重界線がめぐる。瓦当部裏面の下半はケズリを施す。焼成は硬質で、灰黒色を呈する。遺物包含層 367 から出土。大和産。

単弁十六葉蓮華文軒丸瓦（73）　中房には１＋８の蓮子を配し、周囲に雄芯をめぐらす。外区には界線がめぐる。花弁は 66、72 と類似する。瓦当部裏面の下半にケズリを施す。焼成は硬質で、灰黒色を呈する。遺物包含層 367 から出土。大和産。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（74）　中房には１＋４の蓮子を配す。外区はなく花弁の先端は周縁に重なる。焼成は硬質で、灰黒色を呈する。遺物包含層 367 から出土。

単弁十五葉蓮華文軒丸瓦（75）　中房には１＋８の蓮子を配す。花弁は楕円形である。界線は二重線で表し、外区に小粒の珠文を配する。瓦当面には自然釉が付着。焼成は硬質で、灰白色を呈する。遺物包含層 367 から出土。播磨産。

註

1　昭和 51 年（1976）、仁和寺境内の発掘調査 11-2（文 336）で出土した中央下の花弁に篆書で「左」字銘を陽刻した緑釉軒丸瓦と同文である。

2　註 1 と同調査で出土した中心に篆書で「左」字銘を陽刻した緑釉軒平瓦と同文である。

b　太秦地域

太秦 4 地区（図版 42 ～ 45　図 64 ～ 68）

主に、広隆寺旧境内の各調査で出土した。調査 16-46 で 111 が、調査 16-70 で 112 が、右京区役所 1 次発掘調査 16-83（附 1）で 76 ～ 104、広隆寺霊宝殿の発掘調査 16-52（附 7）で 105 ～ 110、右京消防署 1 次発掘調査 16-91（文 416）で 117 ～ 120・125 ～ 157、右京区役所 2 次発掘調査 16-82（文 417）で 121 ～ 124 、右京消防署 2 次発掘調査 16-85（文 433）で 113 ～ 116 が出土した。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（76）　中房は小さく突出する。花弁は丸みを帯びて稜線を持ち、先端で尖る。弁間文は中房から細くのび先端で菱形となる。周縁は高く盛り上がる。瓦当部は、瓦当裏面上端に粘土を補って成形する。胎土には砂粒を少量含む。焼成は硬質で灰色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（77）　中房は盛り上がり、中心に竹管で穴を開ける。花弁の稜は高く盛り上がり、弁間文は大きな楔形を呈する。外区には 1 条の圏線がめぐる。瓦当部側面はヘラケズリ。瓦当部は、瓦当裏面に浅い溝を付け丸瓦を差し込み、粘土を補って成形する。胎土は精良。焼成は軟質で淡黄色を呈する。

素弁八葉蓮華文軒丸瓦（78・79）　瓦当は全体に厚みがない。中房を欠く。78 の花弁は凹みで表し、弁端に珠点を付ける。弁間文は盛り上がった楔形を呈する。瓦当部側面と裏面端部に回転台による調整痕がみられる。胎土は小砂粒を含み、焼成は硬質で青灰色を呈する。79 の花弁は

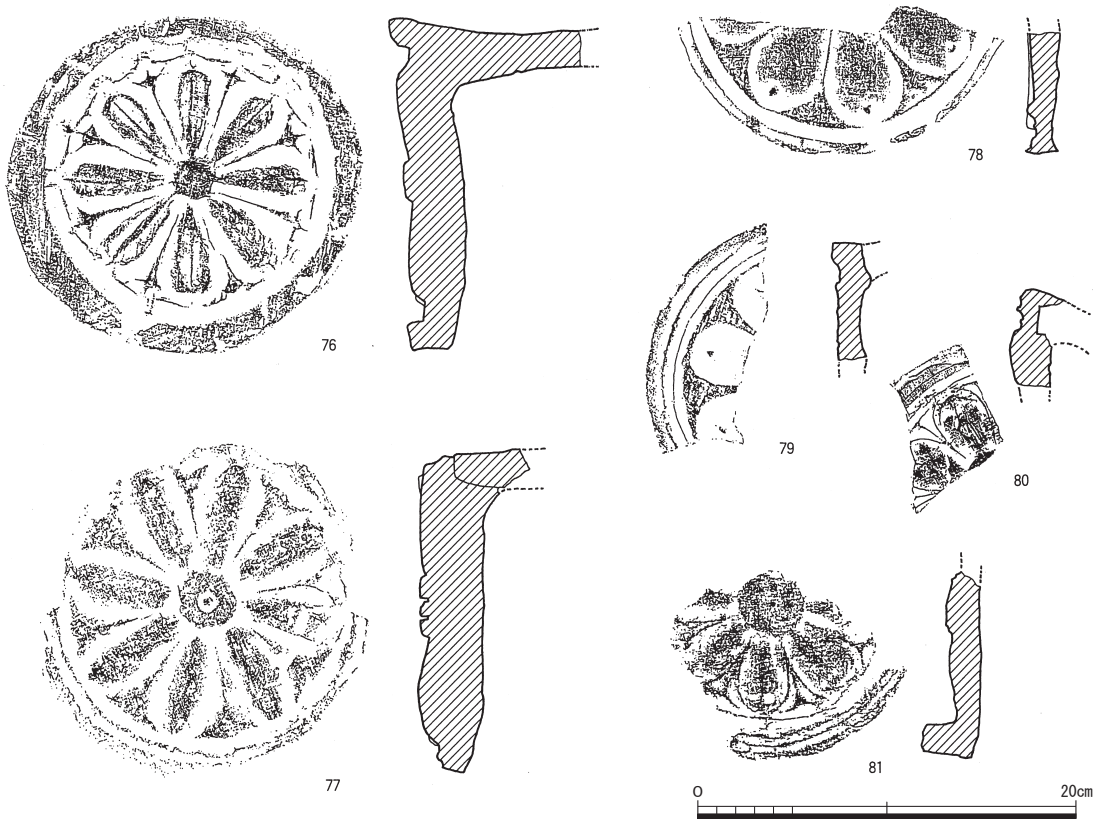

図 64　太秦 4 地区出土軒瓦 1(1:4)

平坦で肉付きがなく、弁端に珠点を施す。弁間文は肉厚の楔形で、外区に二重の細い界線がめぐる。瓦当部は、瓦当裏面に浅い溝を付け、丸瓦を差し込み、粘土を補って成形する。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で淡黄灰色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（80・81・86）　花弁に子葉が付き、弁端は反転気味に盛り上がる。細い凸線の弁間文は中房からのび、中途で分かれ、花弁の外に界線がめぐる。80 は文様が精緻である。焼成は硬質で、青灰色を呈する。81 は中房に 1 ＋ 8 の蓮子を配し、外区に 2 条の界線がめぐる。胎土は精良。焼成は軟質で淡赤色を呈する。86 は中房に 1 ＋ 8 の蓮子を配する。瓦当部は、丸瓦凹面端部に浅い溝を付け、瓦当を接合して成形する。瓦当部側面はヘラケズリ調整。胎土は精良。焼成は軟質で黄灰色を呈する。81 は火災による二次加熱を受けた可能性がある。いずれも山田寺式軒瓦である。

単弁六葉蓮華文軒丸瓦（82・83）　中房の蓮子は 4 で、不均等に配置する。花弁は中心が凹み、弁間文は大きい楔形を呈する。瓦当部は、瓦当裏面に浅い溝を付け、丸瓦を差し込み、粘土を補って成形する。瓦当部側面は全面をヘラケズリの後、ナデ調整。共に胎土は精良。焼成は軟質で淡黄色を呈する。

単弁六葉蓮華文軒丸瓦（84・85・90）　中房は小さく突出し、不鮮明な蓮子を配する。花弁は中央が凹む剣形で、先端は尖らない。弁間文は細くのび、先端で分かれ、花弁に接続する。界線が花弁の先端を繋ぐ。瓦当部は、瓦当裏面に浅い溝を付け、粘土を補って成形する。共に胎土は精良。84・90 の焼成は軟質で、淡黄灰色を呈する。85 の焼成は硬質で、灰白色を呈する。

単弁六葉蓮華文軒丸瓦（87・88 ～ 91）　中房は小さく突出する。87・88 は蓮子を配さず、89 は中心に竹管による穴を開け、91 は 4 個の不均等な小穴を開ける。瓦当面は平坦で、文様は断面三角形の細い凸線で表す。花弁は先端で尖り、弁間文は先端で分かれ、両側の花弁に接続する。外区には 1 条の界線がめぐり、各花弁の先端を繋ぐ。瓦当部は、浅い溝を瓦当に付けて丸瓦を差し込み粘土を補って成形する。胎土はいずれも精良。87・91 の焼成は軟質で、灰白色を呈する。88・89 の焼成は硬質で、青灰色を呈する。

平瓦（92 ～ 98）　92・93 は菱形を重ねた形状のタタキ文様を持つ。93 はやや不明瞭である。94 は放射状文様と斜格子文タタキが組み合わされている。95 は半楕円を重ねた文様と細かい格子文を組み合わせたタタキ文様を持つ。96、97 は楕円の中央に X 字を描くもので、96 は斜格子と組み合わされている。98 は平瓦凹面に顕著にみられる桶巻き痕跡である。ほぼ 4cm 幅の模骨が確認できる。

飛雲文軒平瓦（99）　中心に「修」の字を陽刻し、左右に飛雲文を配する。界線はやや太く、外区に珠文を配さない。胎土は緻密で精良。焼成は硬質で淡黄灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（100）　細い凸線による唐草文を配する。界線も細く、珠文を持たない。瓦当部凹面を大きくヘラケズリする。胎土は精良。焼成は硬質で淡青灰色を呈する。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（101）　花弁は子葉を持ち、先端で盛り上がる。先太りの Y 字状弁間文を配する。界線をめぐらせるが、珠文を有しない。胎土には小砂粒を含む。焼成は硬質で淡灰色

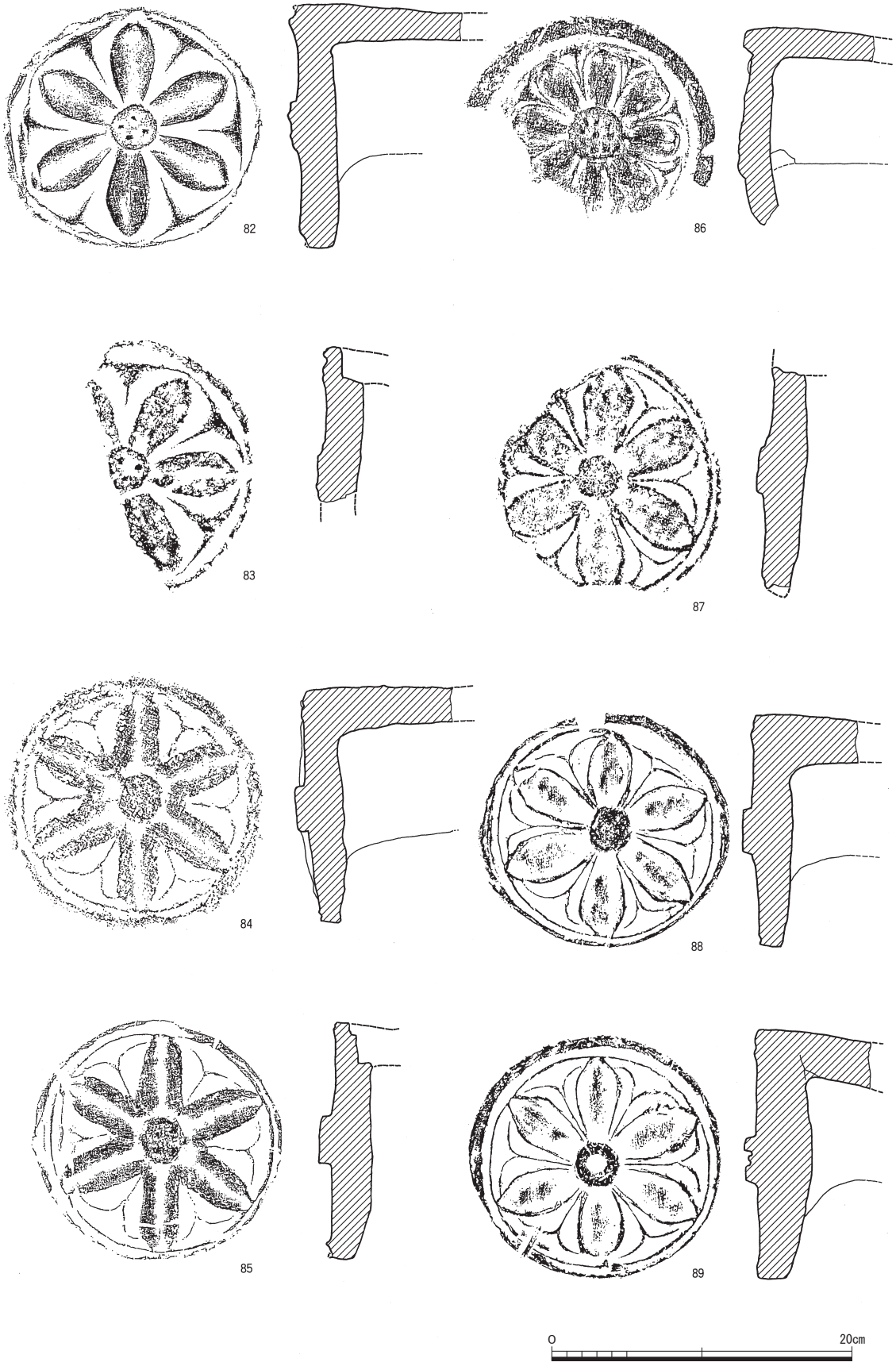

図 65　太秦 4 地区軒瓦 2(1:4)

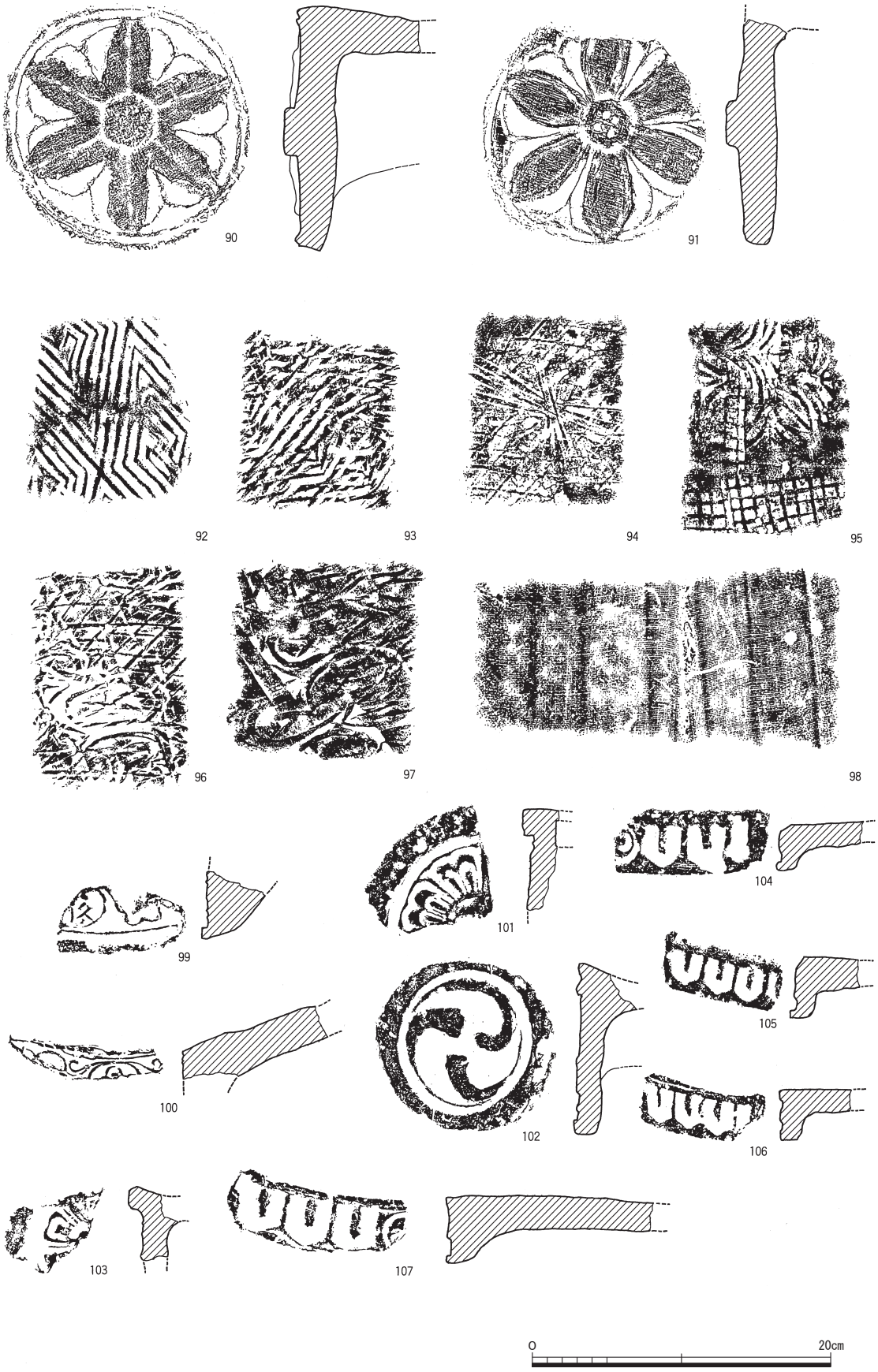

図 66　太秦 4 地区出土軒瓦 3(1:4)

を呈する。

三巴文軒丸瓦（102）　瓦当面は平坦である。巴の頭部は離れ、断面が台形を呈する。尾部は細く長い。珠文は持たない。胎土は精良。焼成は硬質で淡灰色を呈する。

単弁蓮華文軒丸瓦（103）　花弁先端中央が凹み、子葉は短冊形を呈する。外区に1条の界線を有する。胎土は緻密で精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

剣頭文軒平瓦（104 ～ 107）　104・107は瓦当中央に2巴を配する。文様は高く盛り上がり、剣の先端は鋭い。瓦当の成形は、107が平瓦の凸面端部に粘土を補充して瓦当面を作る。104・105・106が折り曲げ技法による。いずれも胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。

複弁蓮華文軒丸瓦（108）　瓦当は小形で、小さな楔形の弁間文を配する。外区に珠文帯を持ち、1条の界線を有する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は硬質で淡青灰色を呈する。

剣頭文軒平瓦（109）　細い凸線で表す三角形の剣先文を上下交互に配する。瓦当面は平坦である。平瓦凸面端部に粘土を補って、瓦当面を作る。胎土は精良。焼成は硬質で淡灰白色を呈する。

軒丸瓦（110）　瓦当面は大きく、幅広で高い周縁を持つ。瓦当面に「広隆寺」銘を細線で陽刻する。胎土は精良。焼成は硬質で、表面は黒く燻される。江戸時代以降の瓦と考えられる。

剣頭文軒平瓦（111・112）　角張った細い凸線で剣文様を表す。瓦当面は平坦である。狭い外区を有する。平瓦凸面端部に粘土を補って、瓦当面を作り出す。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（113）　外区に幅広の珠文帯を有する。平瓦凸面端部に粘土を補って瓦当面を作る。胎土は精良。焼成は軟質で灰白色を呈する。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（114）　雄蕊帯を持ち、やや横長の花弁を有する。瓦当文様は摩滅する。胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬質で灰白色を呈する。

巴文軒丸瓦（115・116）　115の文様は平坦で、大粒の珠文を密に配し、幅広の外縁を有する。胎土は精良。焼成は硬質で淡灰白色を呈する。116は巴の頭部は盛り上がり、小粒の珠文を疎らに配する。胎土は精良。焼成は硬質で、表面は黒色に燻される。

素弁八葉蓮華文軒丸瓦（117・118）　117は窪みで表された花弁の弁端に珠点を置き、楔形の弁間文を有する。瓦当面は平坦で、表面に赤色化した二次加熱の痕跡が認められる。瓦当部裏面端部に回転台による調整痕がみられる。118は凹みで表現されたやや小振りの花弁を持つが、端部に珠点を置かない。弁間文は太い楔形である。外区に2条の界線をめぐらす。瓦当は2cmの厚みを有する。胎土は精良。瓦当表面が黒灰色に燻される。焼成は硬質で、断面は黄灰色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（119・120）　花弁中央に稜を有し、弁間文は中房からのびて先端で菱形になる。119は砂粒を多く含む。焼成は硬質で淡青灰色を呈する。120の胎土は精良。焼成は軟質で黄灰色を呈する。

素弁八葉蓮華文軒丸瓦（121 ～ 123）　瓦当面は平坦で、弁端に珠点を配する。弁間文は楔形を呈する。121は瓦当部裏面端部に回転台による調整痕がみられる。122の瓦当部は、瓦当裏面に波状の凹凸を付けて丸瓦を接合し、粘土を補って成形する。両者共に胎土に小砂粒を含む。焼成

は硬質で青灰色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（124）　花弁は中央に稜を有し、先端が尖る。弁間文は中房から細くのび、先端で菱形に広がる。胎土は精良。焼成は軟質で淡黄色を呈する。

重弁八葉蓮華文軒丸瓦（125）　文様は平坦で、花弁内には大きな子葉を配し、弁間文は中房からのびて先端で雁行状に広がる。外区に疎らな珠文を配する。胎土は精良。焼成は硬質で黒色を呈する。

単弁十二葉蓮華文軒丸瓦（126・127）　中房の蓮子は4で、花弁中央に鈍い稜を持つ。外区に12個の珠文を配する。細く高い外区はヘラによるナデを施す。瓦当部は、瓦当裏面に浅い溝を付け、丸瓦を差し込み、粘土を補って丸瓦を成形する。胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（128・130）　128は花弁の先端が尖り、外区に幅の狭い珠文帯と、退化した唐草文をめぐらす。笵の文様は浅い。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で淡灰色を呈する。128は森ヶ東瓦窯産。130は中房に蓮子を配するが、欠けており判別できない。幅広の短い花弁は、短冊形の子葉を配し、二重界線の外に、疎らな珠文を配する。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で暗黄灰色を呈する。

複弁蓮華文軒丸瓦（129・131）　129は楕円形を二つ並べた花弁を持ち、弁間文は先端で左右に分かれる。界線の外側に大粒の珠文を配する。胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。131は先端がやや広がった花弁に2本の棒状の子葉が付く。弁間文は先端の太い棒状で、外区には狭い珠文帯をめぐらす。周縁は幅広である。胎土は砂粒を含む。焼成は硬質で灰白色を呈する。

単弁蓮華文軒丸瓦（132）　子葉を持つ花弁は盛り上がり、先端は鈍い剣先形を呈する。胎土は精良。焼成は硬質で淡灰色を呈する。

三巴文軒丸瓦（133）　小型の軒瓦で、頭部を離した巴文と、外区に15個の珠文を密に配する。周縁は狭い。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で暗灰色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒平瓦（134）　中房の蓮子は1＋6で、周囲に雄蕊帯をめぐらす。花弁は幅広で短く、先端は内側に浅く入り込む。珠文帯は持たない。胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。讃岐産。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（135・136）　135の中房の蓮子は1＋4で、横幅の広い複弁を配し、弁中央は内側に浅く入り込む。珠文帯には大粒の珠文を配し、周縁を有する。瓦当部は、瓦当裏面に浅い溝を付け、丸瓦を差し込み、粘土を補って成形する。胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。136の中房の蓮子は1＋4で、花弁の幅は広く弁中央が内側に浅く切れ込む。外区には2条の圏線で囲む珠文帯に、12個の珠文を配する。胎土は精良。焼成は硬質で灰色を呈する。

四葉花文軒丸瓦（137）　楕円状の花弁を四葉配する。弁間文は小さな中房から十文字にのび、先端は撥状に開く。外区には珠文を密に配する。文様は高く盛り上がり、凹凸が明瞭である。胎土に小砂粒と雲母を含む。焼成は硬質で黒灰色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（138・139）　中房の蓮子は1＋4で、先の尖った舌状の花弁とやや高い周縁を持つ。胎土には小砂粒を多く含む。焼成は硬質で淡灰色を呈する。

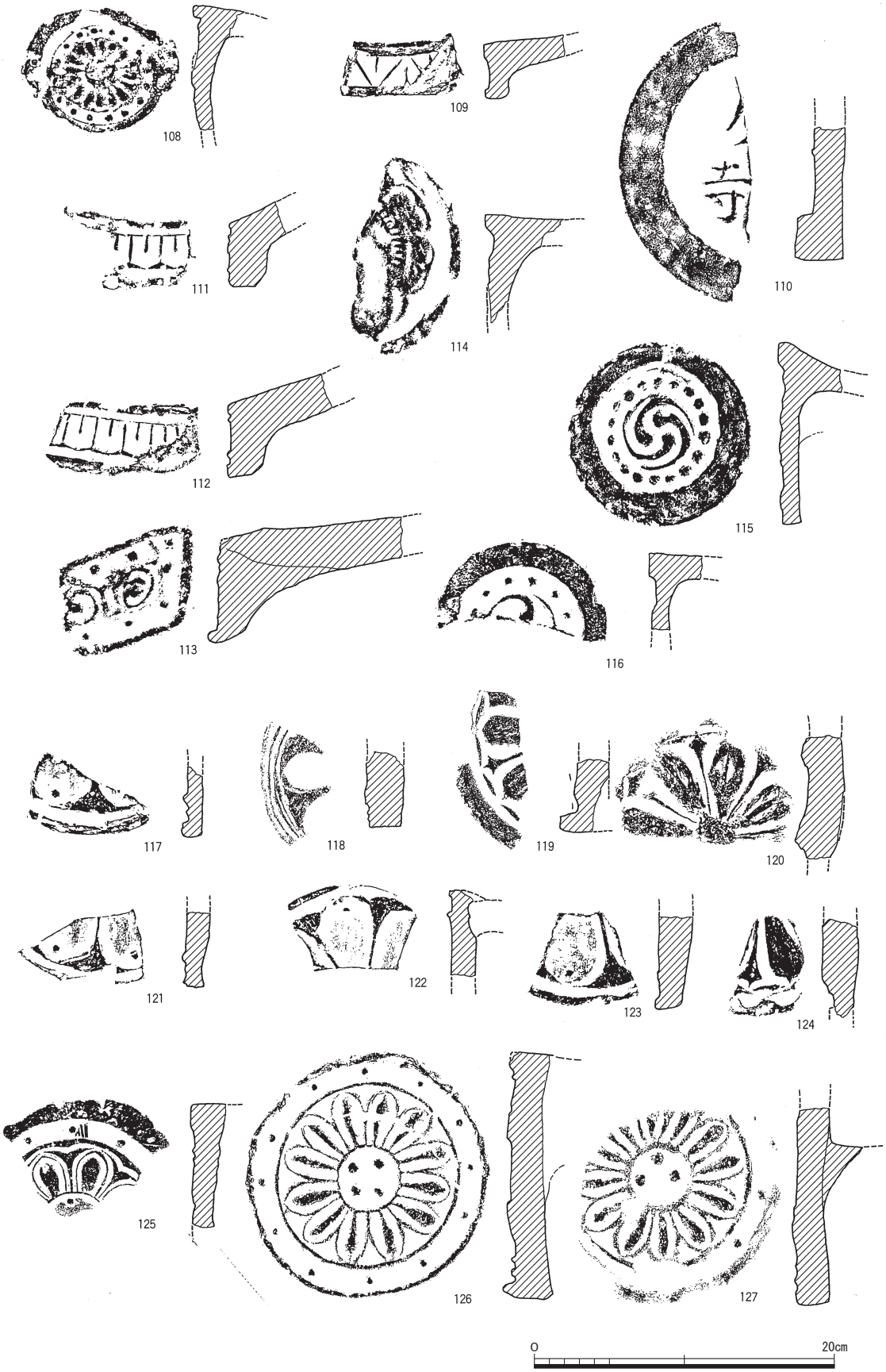

図 67　太秦 4 地区出土軒瓦 4(1:4)

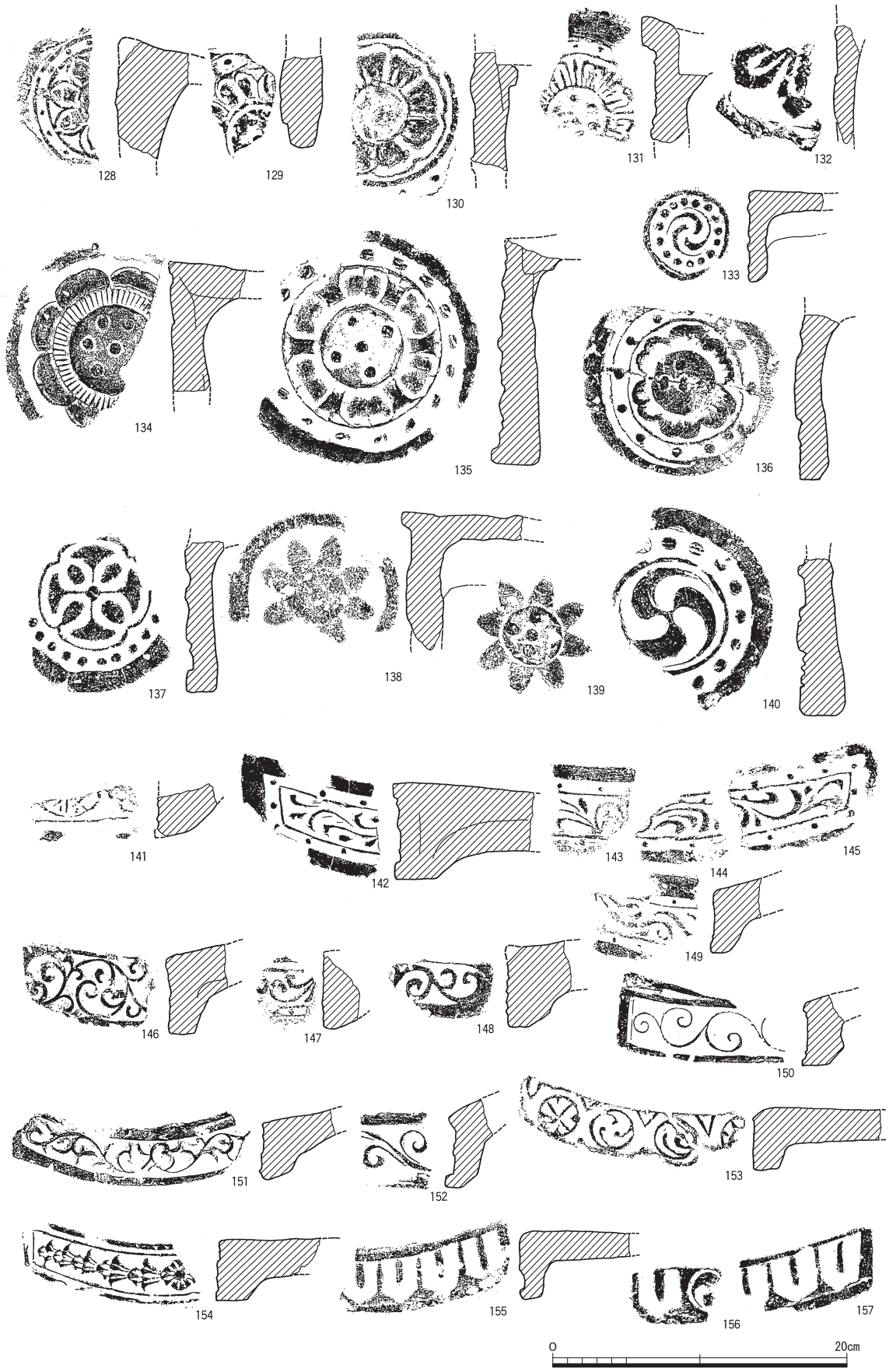

図 68　太秦 4 地区出土軒瓦 5(1:4)

三巴文軒丸瓦（140）　瓦当はやや厚みを持ち、文様は深く鮮明である。断面台形の巴の頭部は互いに接し、外区には大粒の珠文を配する。胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。

飛雲文軒平瓦（141）　中心に「修」の字を細線で陽刻し、内側へ向かう飛雲文を配する。界線を有するが珠文を持たない。胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（142 ～ 145）　中心に不鮮明な「言」の字を配し、巻きの小さな唐草が左右に転開する。界線で画した外に小粒の珠文を置く。顎にベンガラが付着する。胎土には砂粒が多い。焼成は硬質で青灰色を呈する。

偏向唐草文軒平瓦（146）　唐草は左右から中心に向け大きく反転する。珠文は持たない。外縁は瓦当部下面をヘラケズリする。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で青灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（147）　笵は浅く、文様は不鮮明である。外区に幅の狭い珠文帯を持つ。胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。

偏向唐草文軒平瓦（148）　退化した唐草が、左から中心に向け転開する。外区には珠文帯を有する。瓦当部凹面を大きくヘラケズリする。胎土には大粒の砂粒を含む。焼成は硬質で暗黄色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（149）　文様は浅く不鮮明で、やや太い唐草が 3 反転する。瓦当部の成形は折り曲げ技法。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で瓦当表面は暗灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（150）　細い凸線の主葉だけの唐草が 3 反転する。瓦当部の成形は折り曲げ技法。胎土は精良。焼成は硬質で暗灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（151）　中心飾りは乱れて、左に偏り、文様は不鮮明である。外縁をヘラケズリによって成形する。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で表面は灰色を呈する。

唐草文軒平瓦（152）　やや太い唐草文が大きく転開する。胎土は精良。焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。

連巴文軒平瓦（153）　細い凸線による巴文を並べ、左端には丸に X 字状の文様を配する。文様の間には上に三角文様を、下に珠文を配する 。胎土は精良 。焼成は硬質で、表面は灰色を呈する。

花弁文軒平瓦（154）　中心飾りに花菱を配し、左方へ向く 5 個の花弁の蕾文を繋げる。1 条の界線を持つ。胎土は精良。焼成は硬質で灰白色を呈する。

剣頭文軒平瓦（155 ～ 157）　156 は中央に 2 巴文を配する。瓦当面に布痕跡を明瞭に残す。瓦当の成形は折り曲げ技法。焼成は硬質で灰色を呈する。

太秦 2 地区（図版 43・45　図 69・70）

森ヶ東瓦窯に関係した遺構から出土したもので、調査 11-102 では 158 ～ 172、調査 10-199 では 173 ～ 186 がある 。185・186 は瓦窯産ではなく、西隣に位置する一ノ井遺跡に関係するものといえる。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（158・159）　中房に 1 ＋ 6 の蓮子を配し、中心の蓮子を圏線で囲む。界線の外には疎らな珠文を配する。瓦当の上方側面を大きく削り、瓦当形状をやや横長の楕円状

に仕上げる。159 は 158 の文様の反転したものである。胎土は小砂粒を多く含む。焼成は軟質で淡黄色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（160）　花菱形の中房を 4 分して 1 ＋ 4 の蓮子を配し、各蓮子を凸線で結ぶ。その周囲に短い花弁を配し、間に雁行状の弁間文を入れる。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（161 ～ 163）　161 は中房に「下」銘を配する。162・163 は中房に 1 ＋ 6 の蓮子を置く。花弁は輪郭線を有し、中央はやや盛り上がる。Y 字形の弁間文を配する。外区の珠文帯に、疎らで小粒の珠文を配する。文様はいずれも不鮮明である。胎土は精良。焼成は硬質で黄橙色を呈する。

無文軒丸瓦（164）　瓦当文様は認められない。瓦当側面をヘラケズリによって調整する。胎土は砂粒を多く含む。焼成は軟質で淡灰色を呈する。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（165）　複弁状の弁間文を持つ。小粒の珠文を疎らに配する。瓦当側面を大きく削る。胎土は精良。焼成は硬質で黄灰色を呈する。

偏向唐草文軒平瓦（166）　細線で唐草を表すが、文様は不鮮明である。珠文帯を有する。砂粒を多く含む。焼成は軟質で暗灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（167・168）　中心飾りは逆字の「下」が転倒した文字で、子葉を多く持ち、唐草は大きく巻く。外区には密に珠文を配する。胎土は精良。焼成は硬質で黄灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（169 ～ 172）　169 はやや唐草が退化する。170 は内区が広い。172 は内区が狭く、中心に逆転した「下」銘を持つ。いずれも外区に珠文帯を持ち、172 はやや広い周縁を有する。共に胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（173）　中房には蓮子を配するが、数は不明。短い花弁を配し、密に珠文を配し、その外側を圏線で画し、唐草文をめぐらせる。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦（174）　中房には蓮子を配するが、数量は確認できない。花弁は六葉の複弁で、弁間にも同様な花弁をのぞかせる。2 条の圏線で画した珠文帯を持つ。瓦当側面はヘラケズリによる調整を施す。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（175）　中房に「下」銘を持つ。弁間文は中房からのびて左右に分かれる。疎らに配した珠文を有する。瓦当面の離れ砂が明瞭である。胎土は砂粒を多く含む。焼成は軟質で黄灰色を呈する。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（176）　花弁は細い凸線で描かれ、弁の先端が尖る。界線の外に珠文帯はなく、広い周縁を有する。胎土は精良。焼成は硬質で暗灰色を呈する。

偏向唐草文軒平瓦（177）　蕾を持つ細い唐草文が大きく反転する。外区に珠文帯はなく、狭い周縁を有する。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

唐草文軒平瓦（178）　水滴状の中心飾りが付き、唐草は退化し、幅広の周縁を持つ。胎土は精良。焼成は硬質で灰色を呈する。

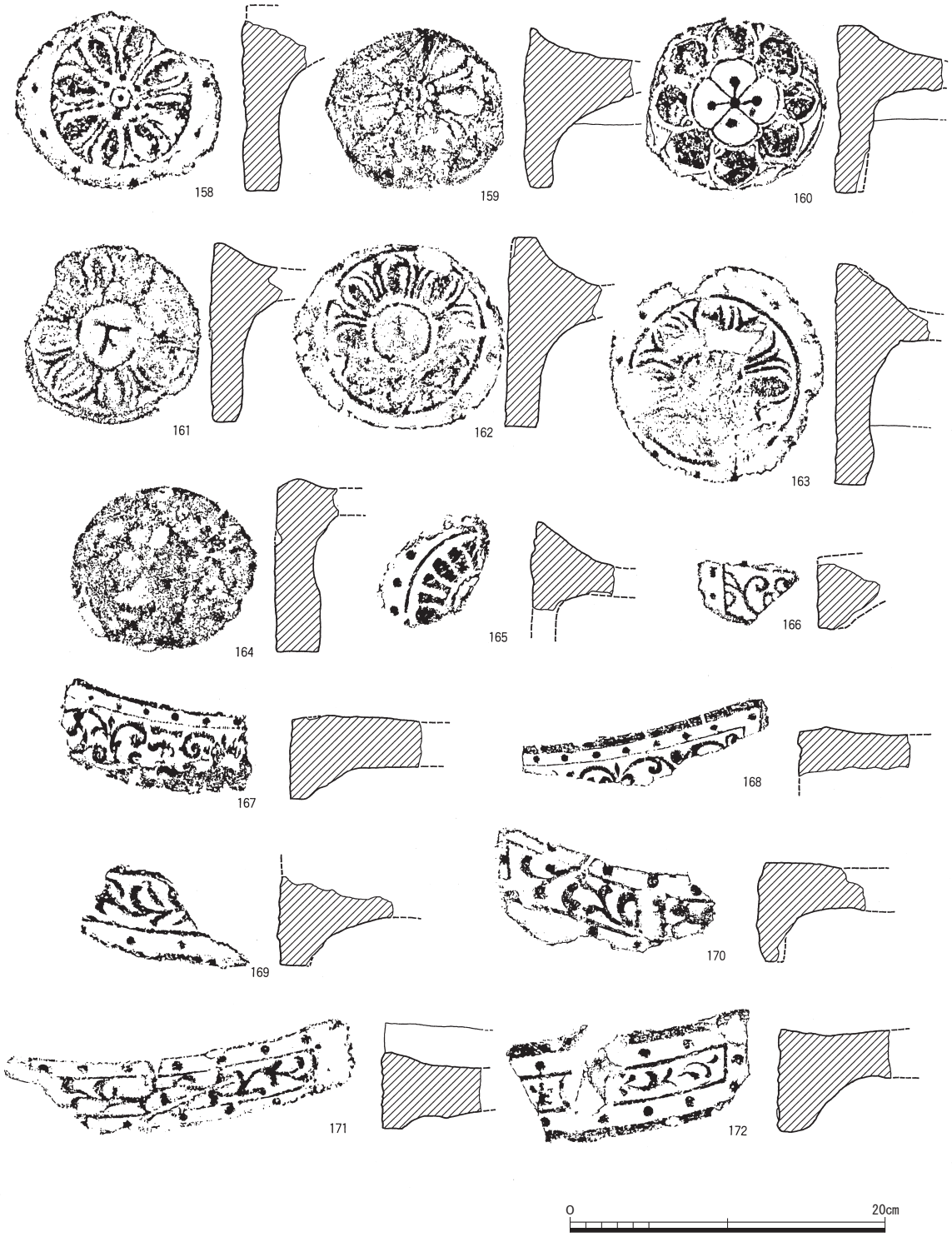

図 69　太秦 2 地区出土軒瓦 1(1:4)

唐草文軒平瓦（179 ～ 181）　唐草の主葉は大きく巻き、子葉は巴文状に巻き込む。外区には小粒の珠文を配する。瓦当外縁はヘラケズリによる調整を施す。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

唐草文軒平瓦（182 ～ 184）　中心飾りに倒立した「下」銘が入る。唐草は退化し、外区に大粒の珠文を配する。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

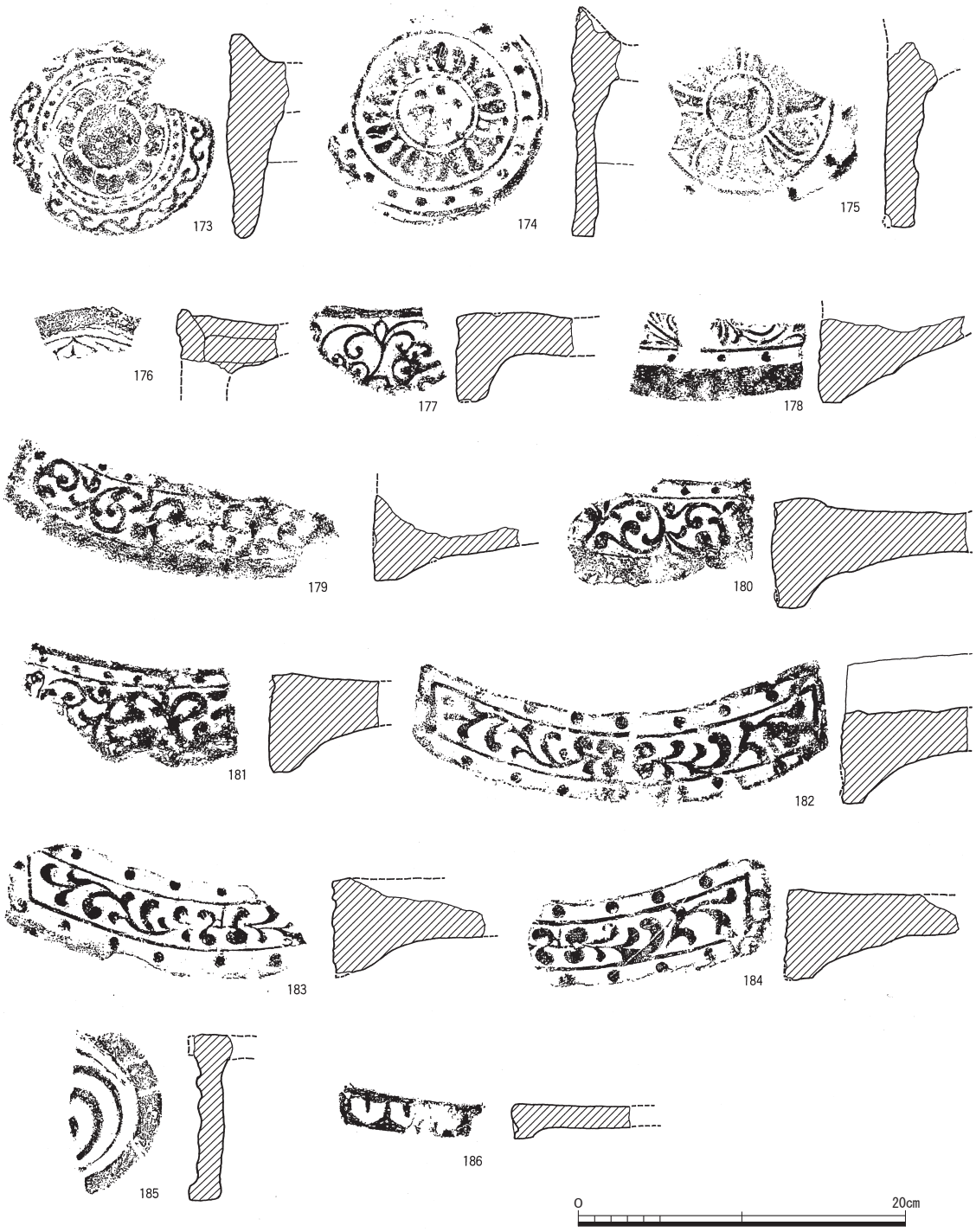

図 70　太秦 2 地区出土軒瓦 2

巴文軒丸瓦（185）　巴の尾部は長くのび、外区には珠文帯を持たない。胎土は砂粒を少量含む。焼成は軟質で暗灰色を呈する。栗栖野窯産。

剣頭文軒平瓦（186）　小型の軒瓦で、剣頭文はやや幅広である。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で暗灰色を呈する。栗栖野窯産。

太秦 5・その他地区（図版 44・45　図 71）

187・188 は西野町遺跡出土の軒瓦で集合住宅建設に伴う発掘調査 15-21[文380]、調査 15-22 で出土。189 ～ 193 は平岡八幡宮窯跡の調査 2-13 で表面採取したものである。194 は沢ノ池遺跡の分布調査[文366]で表面採取した。

単弁蓮華文軒丸瓦（187）　中房を有するが、蓮子の有無は不明である。花弁の先端は菱形に尖り、弁間文は楔形を呈する。界線はなく、外区には小粒の珠文を密に配する。瓦当部は瓦当裏面に浅い溝を付けて丸瓦を差し込み、粘土を補って成形する。胎土は精良。焼成は軟質で黄白色を呈する。

重弧文軒平瓦（188）　段顎を持つ。胎土は精良。焼成は硬質で灰色を呈する。

巴文軒丸瓦（189・190）　共に周縁に珠文帯を持つ。189 は大粒の珠文を配する。胎土は精良。焼成は硬質で黄灰色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（191）　対向 C 字形の中心飾りを持ち、幅広で退化した唐草が左右に 3 反転する。外区には大きい珠文を密に配し、狭い周縁を持つ。瓦当部は、瓦当裏面に溝を付け、丸瓦を差し込み、粘土を補って成形する。胎土は砂粒を少量含む。焼成は硬質で灰白色を呈する。

均整唐草文軒丸瓦（192・193）　退化した対向 C 字形の中心飾りを持ち、その中央に棒状の凸線を入れる。退化した唐草を配する。界線を有するが、珠文帯を設けない。周縁はやや広い。胎土は砂粒を多く含む。焼成は硬質で黄白色を呈する。

均整唐草文軒平瓦（194）　中心の対向 C 字形の中に、上下に 2 個の珠文を配する。唐草文は複線状で左右に3反転する。胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬質で灰色を呈する。嵯峨野以外では、平安宮蘭林坊、平安宮豊楽院、金閣寺裏山中腹などで出土している。平安時代前期。小野瓦窯産。

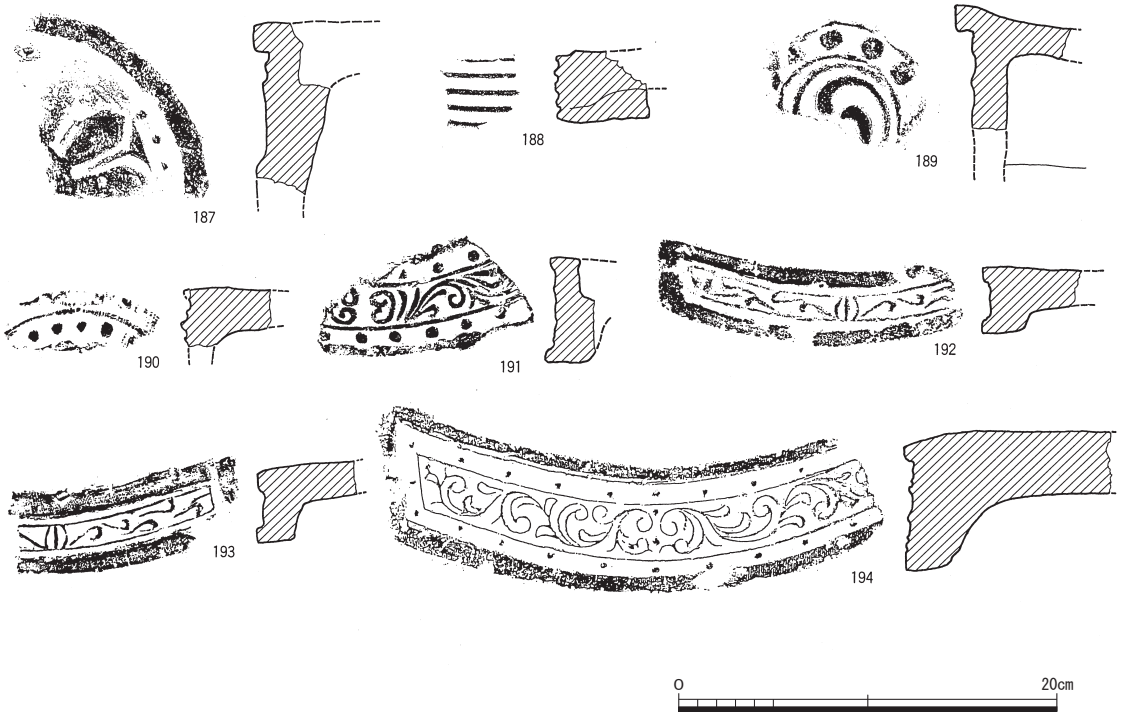

図 71　太秦 5・その他地区出土軒瓦（1:4）

c　嵯峨・嵐山地域

北嵯峨・野々宮北・天龍寺・嵐山南地区（図版 46・47　図 72）

平安時代前期の軒瓦には 195 ～ 199（天龍寺地区）、200 ～ 203（嵐山南地区）、204・205（野々宮北地区）、平瓦には 206（北嵯峨地区）がある。

単弁十一葉蓮華文軒丸瓦（195）　径が小さく平坦な中房に 1 ＋ 4 の蓮子を配し、花弁の先端はわずかに窪む。太めの界線の外側には珠文を配する。瓦当部裏面に布目痕を残す一本造りである。胎土は良好。焼成はやや軟質で鈍い黄橙色を呈する。土壙 88 から出土。

複弁四葉蓮華文軒丸瓦（196）　平坦な中房に 1 ＋ 5 の蓮子を配し、大きな花弁と撥形の弁間文を配する。界線は細く、外区に小粒の珠文を配する。瓦当部裏面に布目痕を残す一本造りである。胎土は良好。焼成はやや軟質で鈍い黄橙色を呈する。土壙 88 から出土。

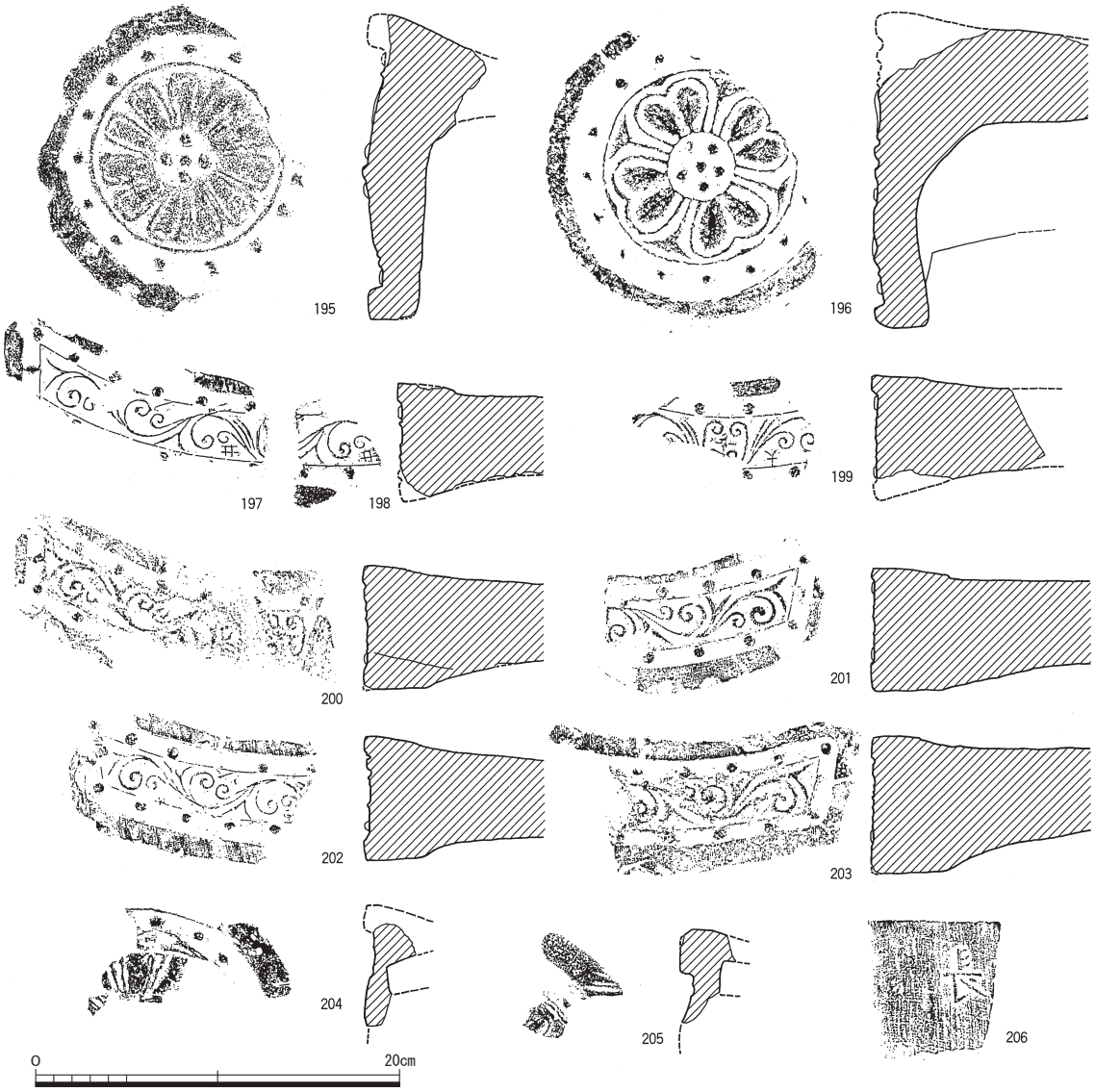

図 72　北嵯峨・野々宮北・天龍寺・嵐山南地区出土瓦（1:4）

均整唐草文軒平瓦（197 ～ 203）　同文瓦の各部で、瓦当面に倒立した文字を陽刻の細線で表現する。中心飾りは先端の巻き込みの強い対向「C」字形で、左右に 3 反転する唐草文を配する。中心飾りの中に「寺」、右側第 1 主葉の中に「大」、左側第 1 主葉の中に「井」字を置き、細い界線の外に珠文を配する。曲線顎で、瓦当部上端と顎部は横方向のヘラケズリ、顎後方から平瓦部凸面は縦方向のヘラケズリを施し、平瓦部凹面には布目痕を残す。胎土はいずれも精良な粘土で、焼成は硬質と軟質のものとがある。197・201 の顎後方にはベンガラが付着する。200 ～ 203 は平瓦部側面に粗い布目痕を残す（写真 9）。197 ～ 199 は土壙 78・88、200 ～ 203 は溝 43 から出土。

写真 9　軒平瓦側面部

単弁蓮華文軒丸瓦（204・205）　輪郭線を持つ花弁の先端はやや窪む。瓦当部の成形は接合式である。胎土は精良。焼成はやや軟質で灰色を呈する。遺物包含層 29・30 から出土。

文字瓦（206）　平瓦部凹面に「長」字を押印する。土壙 57 から出土。平安宮朝堂院跡、中務省跡などで出土している。

清涼寺西地区（図版 46・47　図 73）

右京区嵯峨釈迦堂藤ノ木町に所在する清涼寺境内で、昭和 26 年（1951）と 36 年（1961）に採取[註1]された瓦である。採取地点は 207・208・210 が図 34 の B 地点、209 は C 地点で、いずれも平安時代前期に属する。

単弁十六葉蓮華文軒丸瓦（207）　段状に突出した中房に蓮子 1 ＋ 5 を配する。花弁は輪郭線を持ち、二重の界線の間に小粒の珠文を配する。瓦当部の成形は接合式で、裏面はナデ調整。胎土は砂粒が少なく、焼成はやや軟質で暗灰色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（208）　段状に突出した中房に蓮子 1 ＋ 8 を配する。ϒ形の弁間文と複弁の先端は連結し、界線の外に小粒の珠文を配する。瓦当部の成形は接合式で、裏面はナデとユ

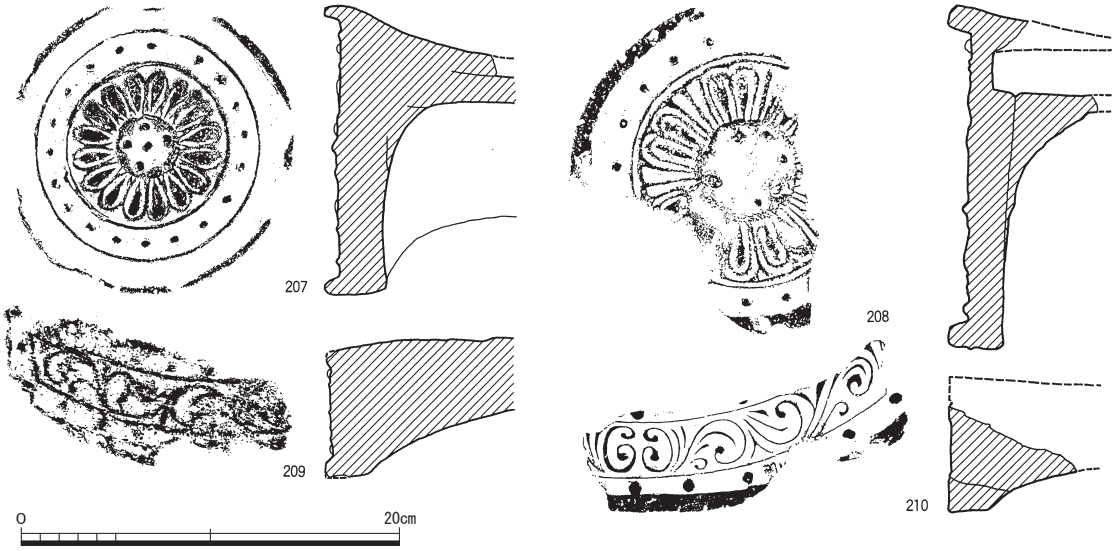

図 73　清涼寺西地区採取軒瓦（1:4）

ビオサエで調整する。笵型の痕跡が瓦当部外周にみられる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は軟質で淡灰白色を呈する。西賀茂角社西瓦窯の製品で、同文品は民部省跡[文191]で出土している。

均整唐草文軒平瓦（209）　中心飾りは「小」字形で、左に3反転する唐草文を配し、界線の外に小粒の珠文を配する。瓦当部上端は横方向、顎後方から平瓦部凸面は縦方向のヘラケズリを施し、平瓦部凹面には布目痕を残す。曲線顎で、顎後方にベンガラが付着する。胎土は砂粒を多く含み、灰白色を呈する。焼成は軟質で瓦当面の磨滅が激しい。西賀茂角社東瓦窯の製品である。

均整唐草文軒平瓦（210）　中心飾りは対向の「C」字形で、右に3反転する唐草文を配する。細い界線の外側に大粒の珠文を配し、右側第2子葉の右に「西」字が陽刻されている。曲線顎で、顎後方から平瓦部凸面は縦方向のヘラケズリを施す。胎土は良好。焼成は硬質で灰白色を呈する。同笵品が豊楽殿跡[文191]、西寺跡[文191]、嵯峨院跡で出土している。

天龍寺地区（図版46・47　図74）

右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町に所在する天龍寺境内で、昭和50年（1975）から54年（1979）にかけて採取[註2]された瓦である。採取地点は松厳院の北で、211は図38のD地点、他はE地点である。212～214・219は平安時代前期、211・216は平安時代中期、他は平安時代後期に属する。

複弁四葉蓮華文軒丸瓦（211）　膨らみを持つ中房に界線がめぐり、蓮子4を配するが中央は不明である。平坦で大きな花弁と撥形の弁間文を配し、太い界線は複弁先端にあわせて窪み、外区にやや小粒の珠文を配する。瓦当部裏面に布目痕を残す一本造りである。胎土は精良。焼成はやや軟質で暗灰色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（212）　緩やかに膨らむ中房に蓮子1＋6を配し、複弁の先端とϒ形の弁間文は連結する。界線の外に小粒の珠文を花弁と弁間文に対応する位置に配する。瓦当部の成形は接合式で、裏面は未調整。笵型の痕跡が瓦当部外周にみられる。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で淡黄灰色を呈する。同文品が西寺跡[文191]で多く出土している。

単弁蓮華文軒丸瓦（213）　やや小振りな瓦である。平坦な中房には蓮子を配し、界線がめぐる。花弁には輪郭線があり、太めの界線の外に珠文を配する。瓦当部裏面はオサエ調整である。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で淡黄灰色を呈する。西賀茂角社西瓦窯の製品である。

単弁蓮華文軒丸瓦（214）　輪郭線を持つ花弁の先端がやや窪む。瓦当部裏面はオサエ調整で、笵型の痕跡が瓦当部外周にみられる。胎土は精良。焼成はやや軟質で淡黄灰色を呈する。

単弁蓮華文軒丸瓦（215）　先端の窪む細い花弁と弁間文を持ち、界線の外に珠文を配する。瓦当部裏面はオサエ調整で、笵型の痕跡が瓦当部外周にみられる。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟質で淡黄灰色を呈する。

単弁蓮華文軒丸瓦（216）　界線の外の輪郭線を持つ花弁は平坦で幅が広く、太い二重の界線がめぐる。瓦当部の成形は接合式で、瓦当上部には補充粘土を多く使用し、ナデ調整を施す。胎土は精良。焼成は硬質で青灰色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦（217）　一段と高い中房に「卍」字を陽刻し、内区には小振りの複弁を

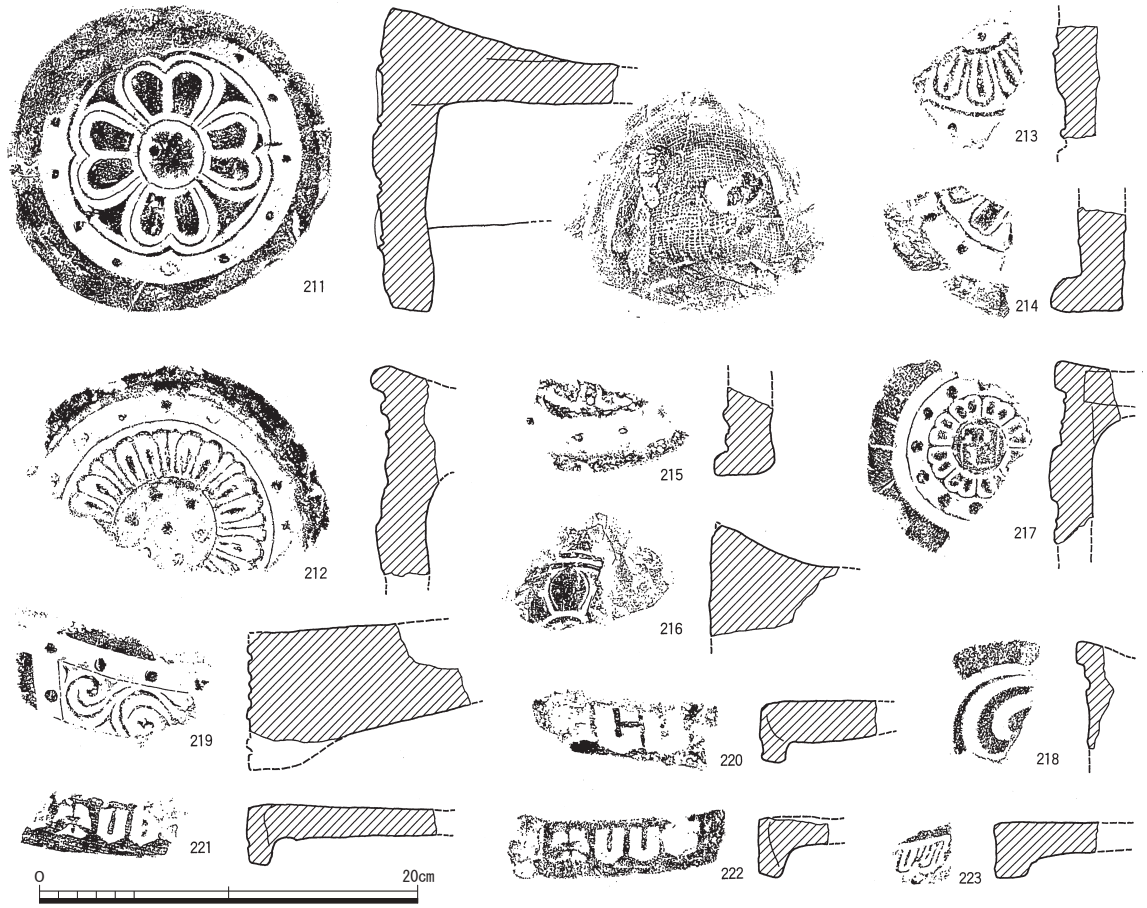

図 74　天龍寺地区採取軒瓦（1:4）

配する。花弁の輪郭線は互いに連結し、細い界線の内側にやや大粒の珠文を配する。瓦当部の成形は接合式で、裏面はオサエ調整である。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で青灰色を呈する。同文品が広隆寺旧境内で出土している。

三巴文軒丸瓦（218）　内区に左巻きの巴文を配する。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で灰色を呈する。

唐草文軒平瓦（219）　内区に巻き込みの強い唐草文、細い界線の外には大粒の珠文を配する。瓦当部上端は横方向のナデ、平瓦部凸面は縦方向のヘラケズリ、凹面は縦方向のナデを施す。平瓦部凸面にベンガラが付着する。胎土は精良。焼成はやや軟質で淡青灰色を呈する。

剣頭文軒平瓦（220）　左端から 2 番目の剣頭文の鎬には横方向の凸線が認められる。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟質で淡灰色を呈する。

剣頭文軒平瓦（221・222）　中央にカタバミ状文を置き、左右に剣頭文を配する。瓦当部の成形は折り曲げ技法による。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟質で淡灰色を呈する。

剣頭文軒平瓦（223）　剣頭文を細線で表した小振りの瓦である。平瓦部凹面に布目痕を残す。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟質で淡灰色を呈する。

化野・天龍寺・鹿王院地区（図版 46・47　図 75）

鎌倉時代から室町時代の軒瓦類には 224 ～ 236（天龍寺地区）、237・238（化野地区）、239（鹿王院地区）がある。天龍寺地区では、二次加熱を受けた瓦類が多量に出土している。225・235・239 は平安時代後期から鎌倉時代に属する。

天龍寺銘軒丸瓦（224）　内区の上部に「天」字を置き、細い界線の外に小粒の珠文を密に配する。文字は「天龍寺」であろう。瓦当面には砂粒が付着し、瓦当部上面と裏面はナデを施す。土壙 90 から出土。

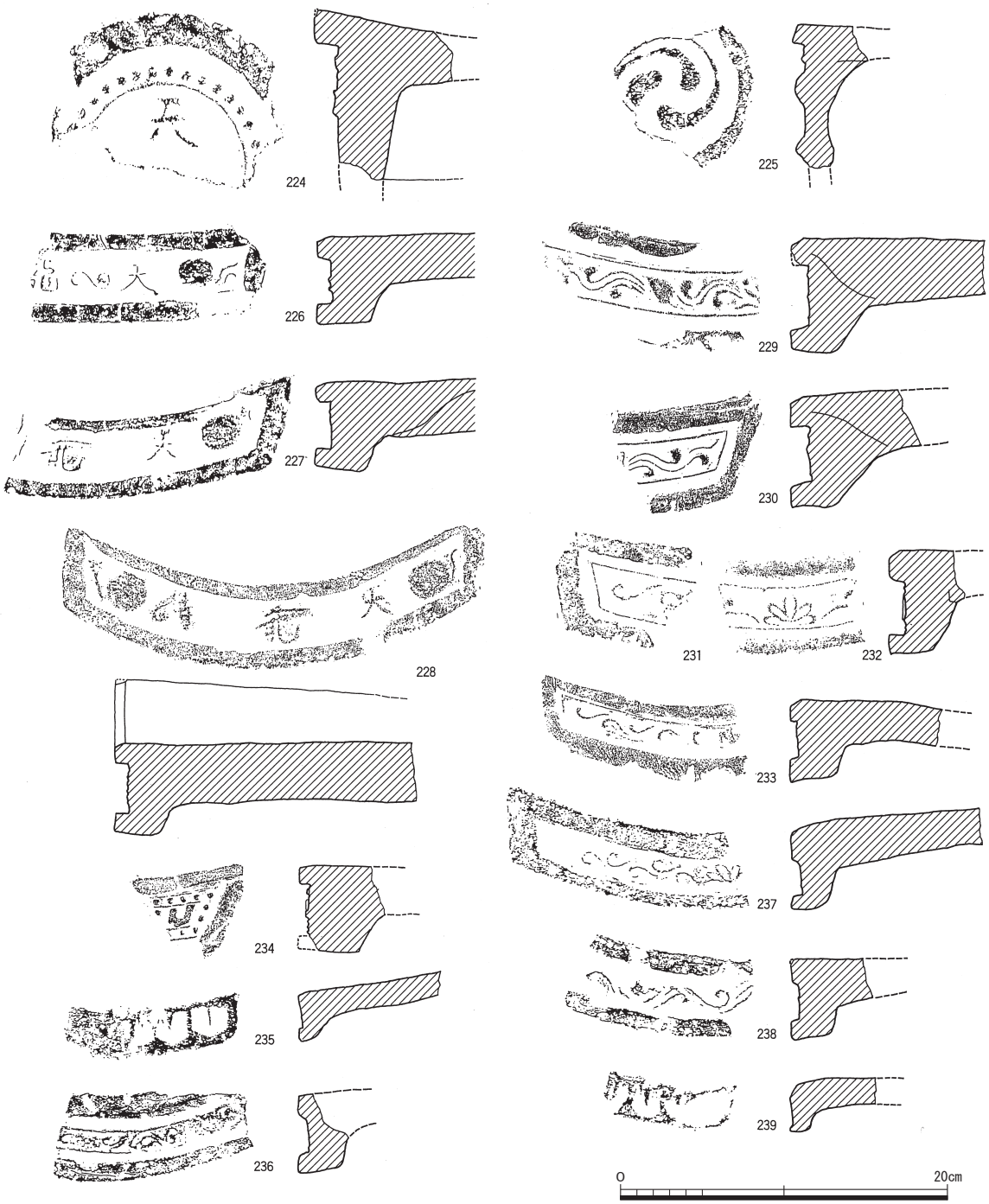

図 75　化野・天龍寺・鹿王院地区出土軒瓦（1:4）

三巴文軒丸瓦（225）　内区に右巻きの巴文を配する。瓦当部上面と裏面はナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は軟質で黒色を呈する。遺物包含層 88 から出土。

天龍寺銘軒平瓦（226 ～ 228）　内区に、右から「天」、「龍」、「寺」の文字を配し、両端に雲文を伴った日輪・月輪を置く。226 は文字間に雲文を配しており、227・228 は「龍」字が退化している。共に瓦当面には砂粒が付着する。土壙 90 から出土。

唐草文軒平瓦（229 ～ 233）　229・230 は内区に左右に反転する唐草文を配する。平瓦部両面にナデを施し、凹面には細かい布目痕が残る。231・232 の中心飾りは 5 弁の半截菊文で、左右に反転する唐草文を配する。瓦当面には砂粒が付着し、瓦当部上面と顎部はナデを施す。233 は内区に唐草文を配し、平瓦部両面にナデを施す。226 ～ 228・231・232 は土壙 90、229・230・233 は遺物包含層 74 から出土。

剣頭文軒平瓦（234）　内区に陽出した剣頭文を、二重の界線の間には珠文を配する。瓦当部上面には細かい布目痕が残り、瓦当部の裏面には砂粒が付着する。遺物包含層 99 から出土。

剣頭文軒平瓦（235・239）　瓦当部の成形は折り曲げ技法で、平瓦部凹面には布目痕が残る。胎土には砂粒を多く含み、焼成は軟質で黒色を呈する。239 は遺物包含層 119 から出土。

唐草文軒平瓦（236 ～ 238）　236 は狭い内区に唐草文を、237 は半截菊文の中心飾りから左右に反転する唐草文を配する。238 の中心飾りは宝珠文である。237・238 は土壙 20 から出土。

天龍寺地区（図 76）

天龍寺境内から出土した室町時代の丸瓦や平瓦には、端面や凹面などに押印を持つものが多くある。押印された瓦は総数 97 点で、内訳は丸瓦 38 点、平瓦 59 点である。押印は 24 種類を認め、菊花文、亀甲文、杵文、割菱文などがあり、1 個体に複数施される例もある。丸瓦のうち玉縁側の端面に押印される例が 7 割を越える。

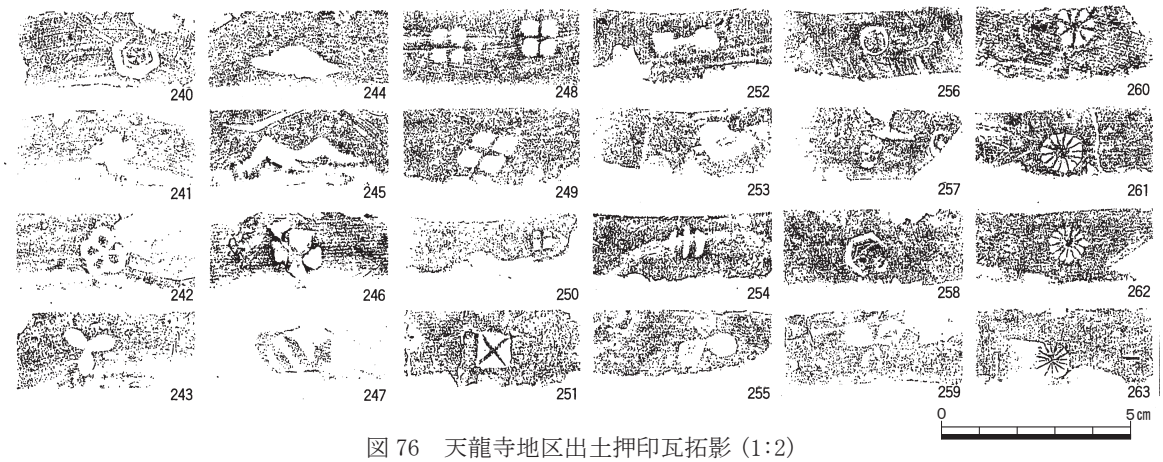

図 76　天龍寺地区出土押印瓦拓影（1:2）

註

1　これらの軒瓦は清涼寺（嵯峨釈迦堂）総代、小松敏男氏が実測・写真撮影を快諾され、ここに掲載することができた。現在も清涼寺境内釈迦堂で公開されている。

2　服部政義氏によって採取された軒瓦である。掲載を快諾していただき、また採取時の状況も詳細に御教示していただいた。

3　その他の遺物

土器、瓦甎類以外では、金属製品（金具・仏像・蓋・銭貨）、石製品・石造物（石器・五輪塔・石仏）、鋳型片、円筒埴輪、土製品がある。他に縄文土器の出土が3例ある。本節では、遺物を常盤地区、太秦4地区、北嵯峨地区、化野地区、天龍寺地区に分け、地区ごとに一部発掘調査分も含めて報告する。

常盤1地区（図43）

発掘調査10-78[文377]で常盤御池古墳の床面から、須恵器と共に鉄製金具（図43-14）が出土した。

鉄製金具（図43-14）「U」字形に曲げた捧の両端を平たく成形し、そこに横棒を取り付け、刺金を付ける。帯金具とみられるが、馬具（駮具）の可能性もある。

太秦4地区（図版37・48・49　図77・78）

広隆寺旧境内の発掘調査16-52[附7]・83[附1]で円筒埴輪（3～10）が、発掘調査16-91[文416]で鋳型（11～20）、仏像、土製品が出土した。縄文土器（2）、石器（1）は発掘調査9-44[附13]で出土した。

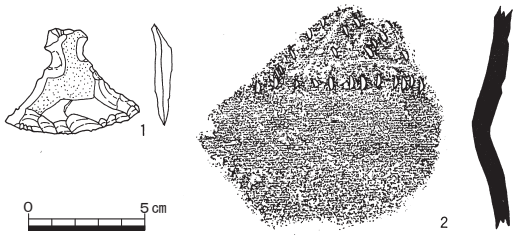

図77　太秦4地区出土縄文土器・石器（1:3）

縄文土器（2）　深鉢頸部で、1条の横位の爪形文、その上部に斜めの爪形文が施される。胎土は粗く、繊維の混入はない。色調は褐色を呈し、器壁は厚い。文様のモチーフは早期貝殻条痕系の粕畑式に類似するが、器形からは田戸上層式に近い。

石器（1）　サヌカイト製の横型石匙で、刃部は両面共に細かく調整され鋭い。ほぼ正三角形を呈し、縄文時代前期の石匙の特徴を持つ。古墳時代の遺構ベースである暗黄褐色砂泥層から出土した。

円筒埴輪（3～10）　破片で全容を知り得るものはない。幅1～2.0cmの低いタガを持ち（3・5・7・10）、円形の透かし穴を有するもの（3）が認められる。厚さは1.5～2.0cmである。いずれも外面調整はタテハケで、内面調整はやや斜めのタテハケを施す。色調は3～8･10が黄橙色、9が青灰色を呈する。9の焼成は極めて硬質である。8は内外に黒斑を有する。時期は6世紀代に属すると考えられるが、一部の埴輪は5世紀後半に遡る可能性がある[註1]。

鋳型（11～20）　胎土はスサを混ぜた粘土で、表面には真土が塗られる。ほとんどが内型である。平面や曲面を持ち、指頭痕を残すものもある。赤褐色に変色しているものが多くみられる。鋳造品は特定できないが、仏具製造に関係した鋳型とみられる。9世紀前半の土器と共伴して出土した。

仏像（図版49）　金銅製の釈迦如来立像で、高さ5.6cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmである。前面のみを表現し、背面を鋳出さない。台座の一部に金箔が付着する。木材か布材に付ける懸仏と考

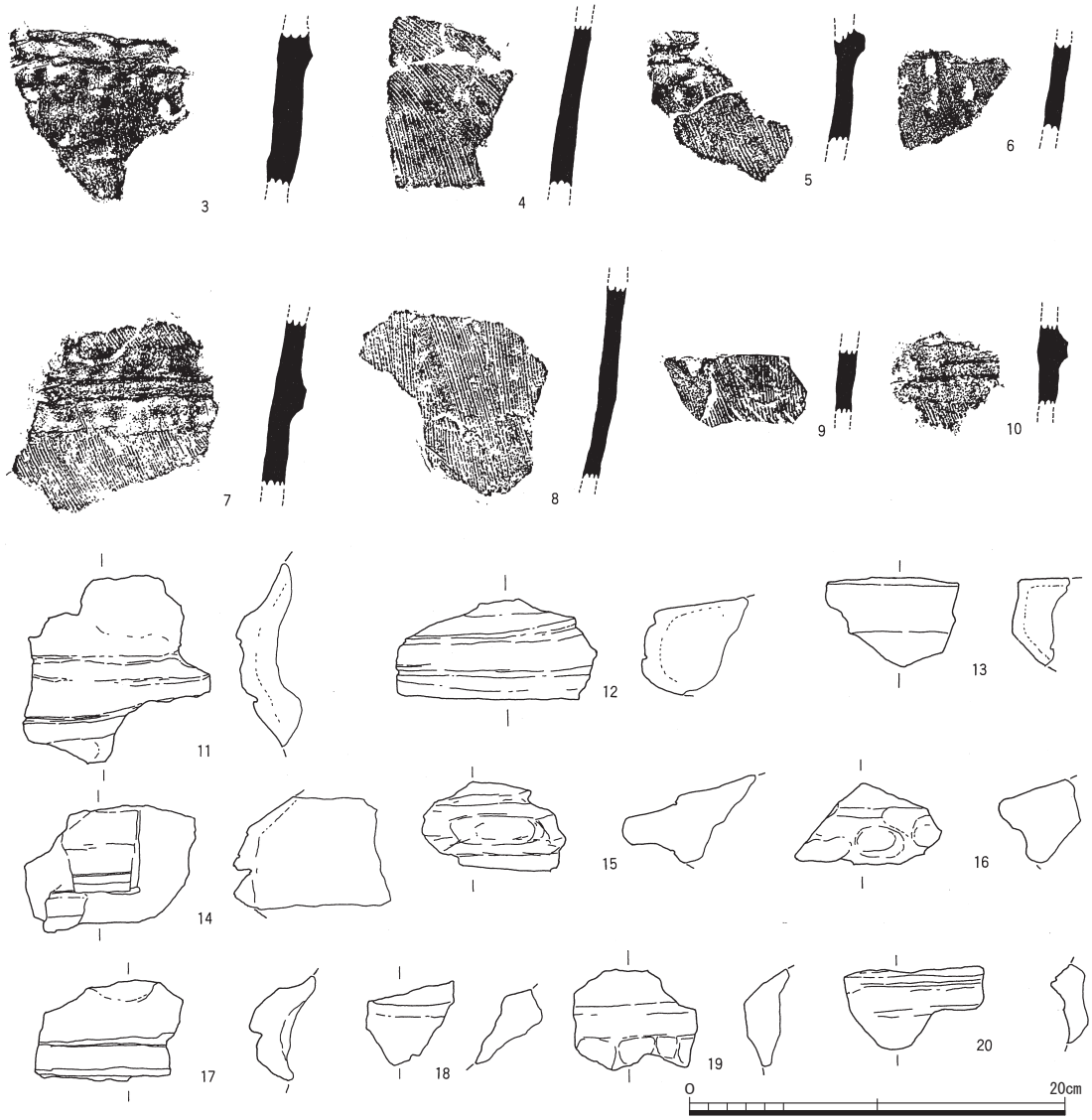

図 78　太秦 4 地区出土円筒埴輪・鋳型（1:4）

えられる。平安時代後期。

土製品（写真 10）　玉、巻物をくわえて四角の台座に座る狐と、布袋をかたどった土製品が土壙から多量に出土した。型造りで製作され、彩色が施されている。それぞれ大小があり、高さ 15cm、奥行 8.0cm、横幅 4.5cm 前後を中心にして、高さが 25cm を越えるものから 10cm 以下のものがある。「火防眷属」と呼ばれるもので、江戸時代の稲荷信仰に伴う祭祀品である。[註2]

写真 10　太秦 4 地区出土土製品

北嵯峨地区（図版 36　図 79・81）

嵯峨院下層の土壙から縄文土器（21）が出土した。積み上げ式五輪塔（57・67）は、嵯峨院跡と長刀坂古墳群で採取した。

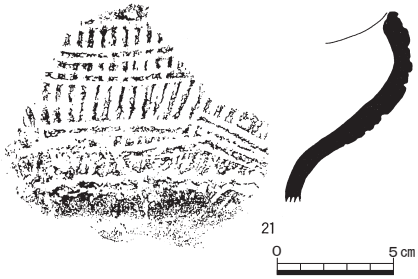

図 79　北嵯峨地区出土縄文土器（1:3）

縄文土器（21）　深鉢口縁部片。縄捲縄文地で半截竹管による沈線が 2 条、波状に 2 段施される。頸部には半截竹管によるコンパス文が付けられる。中期船元式。土壙 103 から出土。

積み上げ式五輪塔（57・67）　57 は空風輪である。下端部に組み合せ突起を持つ。水輪 67 には梵字「ᮃ」を刻んでいる。上面は、わずかに凹面をなす。共に石材は花崗岩。67 は嵯峨院跡の調査 1-4、57 は長刀坂古墳群の調査 2-18 で採取した。

化野地区（巻頭図版 2　図版 49　図 53・80・81）

化野念仏寺の南側で埋葬に関連する遺物が、墓跡と整地土層から出土した。墓跡から出土したものには、蔵骨器の蓋と銭貨がある。銭貨には、中国から渡来したものと国産のものがある。整地層からは、積み上げ式五輪塔の各部、一石五輪塔、石仏などの石造物が出土している。

金銅製蓋（図 53-204）　銅製の蓋上面に、蓮華座上に梵字の「ᮃ」を乗せた図案を線彫りで表して、後に鍍金している。直径 10.1cm、高さ 1.0cm、厚さ 0.1cm である。蔵骨器として転用された褐釉陶器四耳壷（図 53-205）の口径と一致し、蓋として口径に合わせて製作されたものである。12 世紀末の火葬墓 13 から出土。

渡来銭貨（22 ～ 51）　唐銭と明銭を少量含むが、ほとんどが北宋銭である。初鋳造年が、621 年の「開元通寶」から、1408 年の「永楽通寶」までが認められ、初鋳造年が 1039 年の「皇宋通寶」、

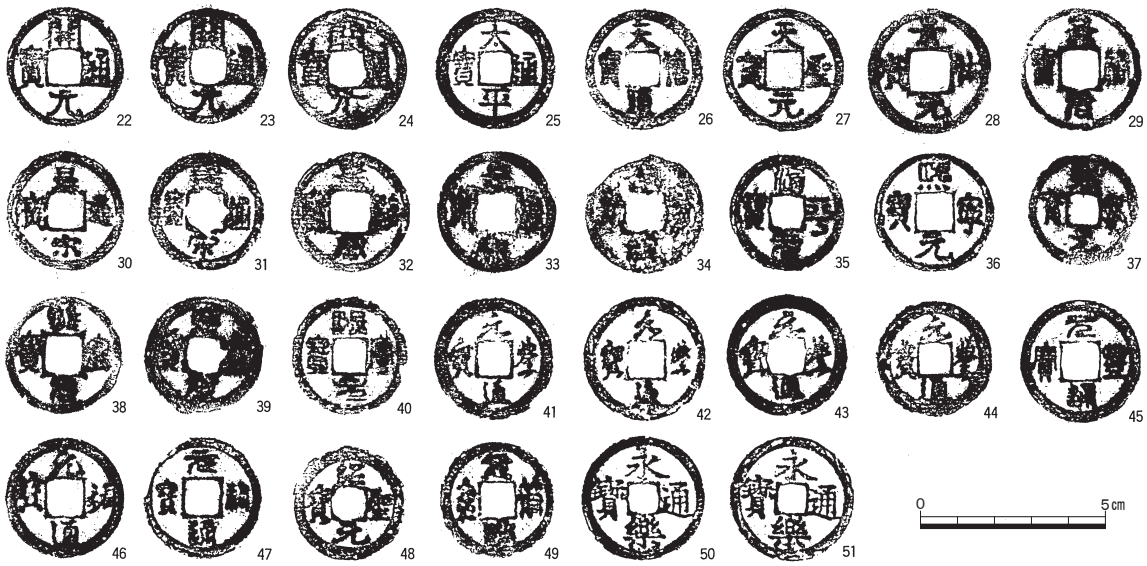

図 80　化野地区墓 5 出土銭貨拓影（1:2）

No.	種　類　（初鋳年代）	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	重量
22	開元通寶（唐　621）	24.17	20.22	7.67	6.71	1.19	3.12
23	開元通寶（唐　621）	23.47	19.66	7.52	6.55	1.11	3.06
24	開元通寶（唐　621）	24.67	20.05	7.67	6.75	1.03	2.51
25	太平通寶（北宋 968）	24.56	18.88	7.19	5.91	1.20	3.16
26	天禧通寶（北宋 1017）	24.67	19.28	7.28	6.15	1.38	3.65
27	天聖元寶（北宋 1023）	24.92	20.30	8.05	6.85	1.17	3.09
28	景祐元寶（北宋 1034）	25.24	20.63	9.57	7.86	1.44	2.76
29	景祐元寶（北宋 1034）	24.96	21.64	8.65	7.05	1.29	3.30
30	皇宋通寶（北宋 1039）	24.34	19.22	7.84	6.58	1.14	2.97
31	皇宋通寶（北宋 1039）	24.06	19.06	7.94	6.32	1.15	2.89
32	皇宋通寶（北宋 1039）	24.42	20.37	9.17	7.53	1.40	2.94
33	皇宋通寶（北宋 1039）	24.42	20.38	8.76	7.34	1.11	2.33
34	皇宋通寶（北宋 1039）	24.55	20.04	9.16	7.47	1.35	(2.92)
35	治平元寶（北宋 1064）	23.47	19.06	7.39	6.04	1.46	3.42
36	熙寧元寶（北宋 1068）	24.21	20.84	8.25	6.99	1.56	3.74
37	熙寧元寶（北宋 1068）	23.27	18.43	7.10	5.61	1.27	2.77
38	熙寧元寶（北宋 1068）	23.86	20.35	8.83	7.13	1.48	3.52
39	熙寧元寶（北宋 1068）	23.78	19.78	7.43	6.46	1.33	3.09
40	熙寧元寶（北宋 1068）	24.04	18.43	7.93	6.49	1.32	3.30
41	元豊通寶（北宋 1078）	24.57	18.97	7.35	6.16	1.15	3.32
42	元豊通寶（北宋 1078）	25.43	19.69	8.22	6.63	1.43	4.75
43	元豊通寶（北宋 1078）	24.56	18.63	7.33	6.43	1.21	3.54
44	元豊通寶（北宋 1078）	23.62	17.21	7.42	5.66	1.12	3.05
45	元豊通寶（北宋 1078）	24.90	19.78	8.30	6.87	1.32	3.78
46	元祐通寶（北宋 1086）	24.47	19.17	8.27	6.94	1.29	3.61
47	元祐通寶（北宋 1086）	24.85	19.88	8.71	6.43	1.46	(3.70)
48	紹聖元寶（北宋 1094）	23.14	17.26	6.96	5.47	1.22	2.15
49	元符通寶（北宋 1098）	23.62	18.86	7.84	6.55	1.25	3.05
50	永楽通寶（明 1408）	25.44	20.40	6.40	5.38	1.44	3.73
51	永楽通寶（明 1408）	25.01	20.96	6.76	5.53	1.24	3.30

化野地区墓 5 出土銭貨　　重量は g　その他は mm　（　）内は残存値

1068 年の「熙寧元寶」、1078 年の「元豊通寶」がそれぞれ 5 枚と多い。これらは副葬品であり、すべて室町時代中期の墓 5 の甕棺内から出土した。

国産銭貨（図版 49）　染付小椀（図 54-209）の中から「寛永通寶」が 6 枚出土した。いずれも「新寛永」に分類される[註3]。六道銭で、布片・紐と共に出土し、袋状のものに納められていたことが考えられる。江戸時代の土壙墓 15 から出土。

一石五輪塔（52 ～ 55）　全体を一石で作る。52 ～ 54 の断面はほぼ正方形を呈し、52・53 は各輪に梵字を刻み、52 ～ 54 の地輪にはさらに法名や年号を刻んでいる。53 には梵字「𑖭」の下に「祐珎禅尼」、右下に「永正十年」、左下に「四月十九日」を刻み、「尼」字には金箔を朱漆で貼っている。小型の 52 は、梵字「𑖭」の下に「妙久禅尼」を刻んでいる。54 には梵字がなく中央に「正随禅門」、右下に「十月」、左下に「四日」を刻む。また、55 の断面は長辺 15cm、短辺 11cm の長方形を呈し、前述の 52 ～ 54 と比べ、かなり扁平である。梵字・法名などは刻んでいない。石材は 55 が花崗岩で、他は安山岩である。形態から室町時代中期から後期に比定できる。52・55 は整地土層 14、53 は整地層 36、54 は整地層 39 から出土。

積み上げ式五輪塔（56・58 ～ 66・68 ～ 70）　56・58 は空風輪で、56 は特に表面の風化が激しい。59 ～ 63 は火輪で、ほとんどのものが軒反り部が欠損している。いずれも頂部上面には組み合せ孔を持つ。65・66・68 ～ 70 は水輪である。肩の張ったものと、丸いものがある。70 の上下の面

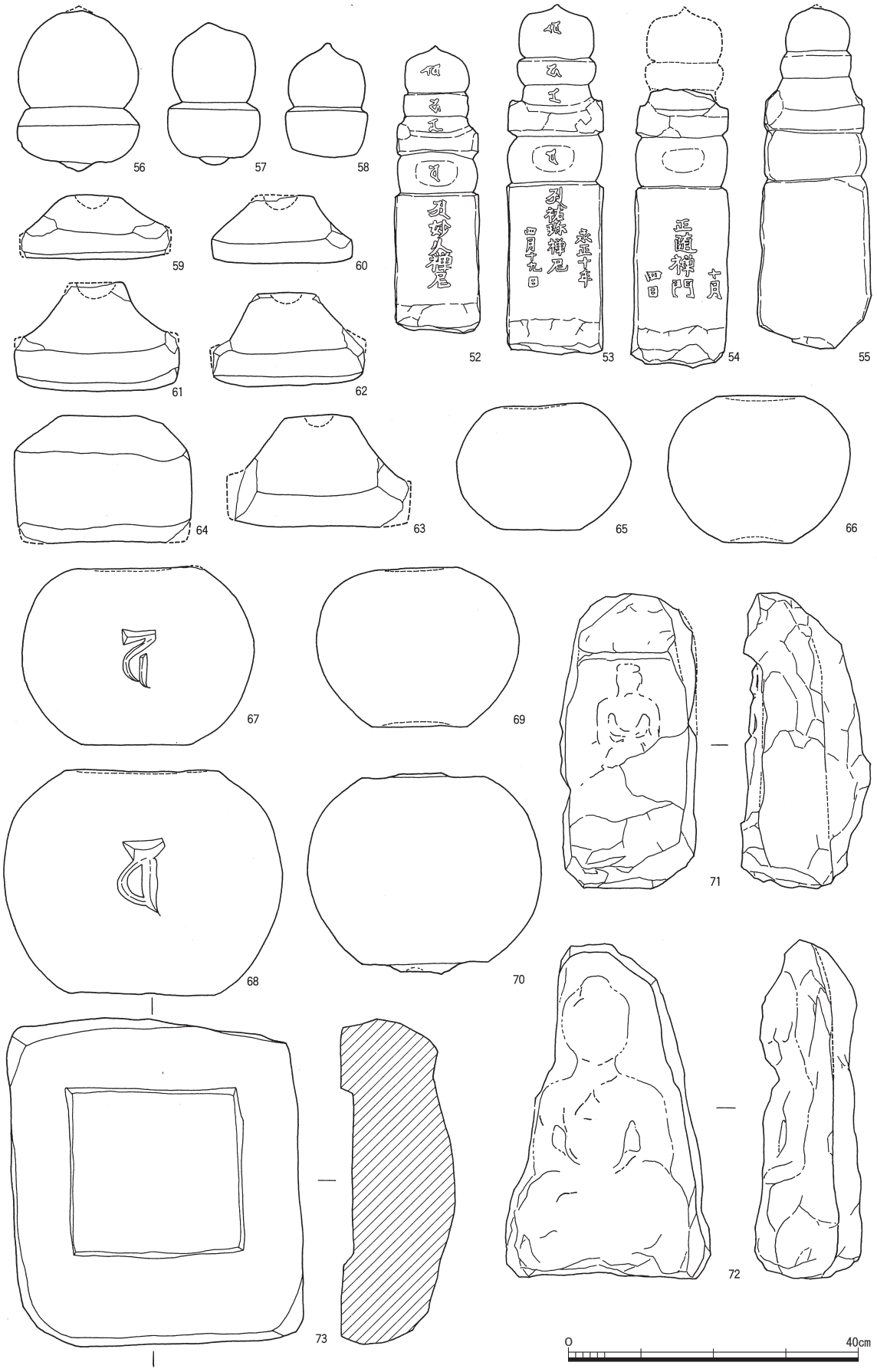

図 81　北嵯峨・化野地区の石造物（1:8）

には組み合せ突起を持ち、68 には梵字「ᳵ」を刻んでいる。64 は台座とみられる。表面の風化が激しく、上半部の傾斜面に蓮弁は確認できない。地輪の可能性もある。いずれも石材は花崗岩である。室町時代中期から後期に比定できる。64 は土壙 37、56・62 は整地土層 29、68・69 は整地層 14、70 は整地層 33、他は整地層 36 から出土。

石仏（71・72）　72 の像容は阿弥陀如来とみられる。光背部から如来像を立体的に彫り出している。71 は上端に山形を作り出した単尊座像仏である。共に表面の風化が激しく、頭部や衲衣の表現などの詳細は観察できない。共に石材は花崗岩である。形態から室町時代中期から後期に比定できる。71 は土壙 37、72 は整地土層 36 から出土。

台石（73）　平面が方形の石材上面に方形の浅い窪みを作り、下面は未調整である。甕棺（図 55-210）の蓋に転用されていた。石材は花崗岩である。室町時代中期の墓 5 から出土。

天龍寺地区（図版 37　図 82）

天龍寺隣接地の発掘調査 13-6[文379] で縄文土器（74 ～ 76）が出土した。

縄文土器（74 ～ 76）　74・75 ともに沈線による曲線を施す。器壁は薄く、磨滅も著しい。76 は半截竹管をランダムに刺突する。胎土には石英・雲母粒を多く含み、色調は明るい橙灰色を呈する。旧河道の凹地に堆積する土層から出土した。中期後半北白川 C 式と思われる。

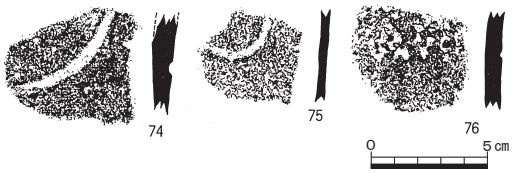

図 82　天龍寺地区出土縄文土器（1:3）

註

1　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2　昭和 53 年（1978）
2　塩見青嵐『伏見人形』河原書店　昭和 42 年（1967）
　奥村寛純「伏見人形と俗信」『摂河泉文化資料』8 号　北村文庫会　昭和 52 年（1977）
3　永井久美男『日本出土銭総覧』1996 年版　兵庫埋蔵銭調査会　平成 8 年（1996）

第Ⅴ章　考　　察

第Ⅲ・Ⅳ章で記述したとおり、嵯峨野では多数の遺構・遺物を検出した。以下、双ヶ岡、太秦、嵯峨・嵐山の各地域の順で、研究所の発掘、試掘、立会調査や他機関の調査成果も含め、各遺跡について詳述する。

双ヶ岡地域の遺跡

当域でこれまで実施された発掘、試掘、立会調査で検出された遺構も含め、平安時代の遺構分布図（図 83 ～ 85）を作成した。ここでは分布図を基に、平安京右京の北西域の様相、四円寺・仁和寺院家の各寺域の位置について考察する。さらに当域の旧地形を復原し、四円寺・仁和寺院家などの遺跡立地の状況を明らかにしたい。

平安京右京の北西域（図 83）

北辺四坊　三町と四町間で正親町小路の北・南側溝、三・四町内では宅地の一部を示す柱穴、土壙、溝、整地層、池の遺構群を検出しており、当地における 10 世紀の土地利用状況の一端が判明した。また 6 町南端で検出した東西方向の溝は、土御門大路北側溝と平行しており、建物などの区画を示す濠と考えられる。

一条四坊　当坊内では平安京造営時に北は土御門大路、南は近衛大路、西は斎宮大路（無差小路）、東は紙屋川（宇多川）を限った方 4 町に天皇が耕す田である「籍田」があったとされ、後に「花園離宮」が営まれた。また 12 世紀に至り、左大臣源　有仁は白河天皇からこの離宮を下賜されて「池館」と名付けたが、治承・寿永の乱の際、兵火で焼失している。[註1]

七町北から八町にまたがって検出した池からは、10 世紀から 12 世紀後半の遺物が出土している。この池は縮小しながらも「蓮池」という名で現在も残っており、池の時期が平安時代中期まで遡ることが明らかになった。

七町から十町では「池館」の廃絶時期にあたる 12 世紀後半の柱穴、土壙、井戸、整地層などの遺構が集中することから、この地区に「池館」を構成した建物の存在が推定できる。さらに北辺四坊で検出した東西濠は北限を画し、池は当館の南に築造されたとみられる。

濠の南では、発掘調査が 2 件実施されている。発掘調査 11-48[附5] では、平安時代前期の土御門大路の北側溝が検出されているが、路面推定地では 11 世紀前半の柱穴、土壙が検出され「池館」の前身である「花園離宮」に関わる遺構とみられる。また発掘調査 11-49[附12] では、「池館」廃絶時期にあたる平安時代後期の土壙が同大路の路面推定地で検出されている。調査 11-43（Ⅲ-1）では、10 世紀代の北側溝（53）、南側溝（112）を検出しており、土御門大路は当時期までは、機能していたことが推測できる。

十一町から十四町では、11 世紀後半から 12 世紀後半の井戸、土壙を、立会調査 11-65[文247]・72[文333] では、

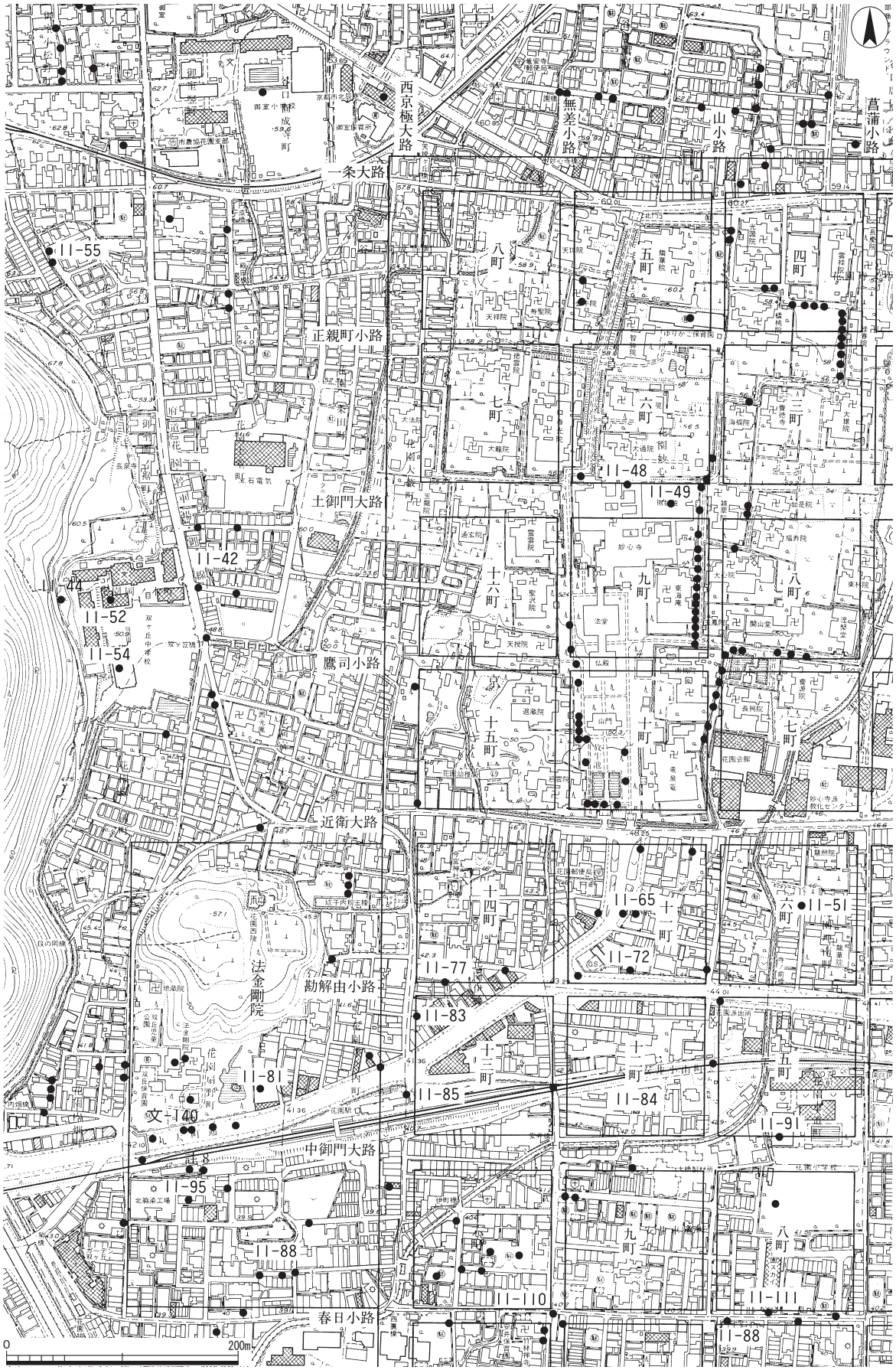

図 83　平安京北西域・法金剛院境内周辺の遺構分布（1:5,000）

平安時代後期から末期の土壙が検出されており、「池館」との関連が考えられる。十二・十三町の発掘調査 11-84[文414] では、山小路と無差小路の西側溝推定地で、いずれも平安時代後期の幅 10m 以上の南北溝が検出されている。また十三町の発掘調査 11-85[文401]、試掘調査 11-83[文310] では、西京極大路の東側溝推定地で平安時代後期の南北溝が、十四町の立会調査 11-77[文297] では平安時代後期の勘解由小路北側溝、路面が検出されており、「池館」周辺は平安時代後期まで条坊に規制されていたことがうかがわれる。

二条四坊　春日小路路面を立会調査 11-97[附9]・110[文436]、北側溝を発掘調査 11-111[文259]、立会調査 11-97 で、南側溝は立会調査 11-88・97[附9] で検出されている。北側溝からは平安時代前期から室町時代の遺物が出土しており、室町時代まで機能していたことが判る。

発掘調査 11-91[文424] では平安時代後期の中御門大路北側溝が検出されており、「池館」周辺と同様のことがいえる。

京域外　京域外の北にあたる宇多川以西では、平安時代中期から後期の土壙、溝などの遺構群が分布することから平安時代中期には人が住み始め、条坊による宅地の規制がこの時期からゆるむことを示している。西側の双ヶ岡の一ノ丘と二ノ丘間の東麓一帯では、立会調査 11-52[文239] で平安時代中期の土壙が、立会調査 11-54[文375] では焼土壙が、また発掘調査 11-44[文313] で室町時代の墓が検出されており、平安時代中期から室町時代中期にかけて、当地は墓域として利用されていたとみられる。その東での立会調査 11-55[文247] では、南北方向の流路が確認されており、さらに流路の東側で平安時代後期の溝が、また立会調査 11-42[文257] では、平安時代後期の土壙が検出されている。

四円寺（図 84）

四円寺とは、天皇の御願による寺名の頭に「円」の字を冠した寺の総称で、永観元年（983）円融天皇建立の円融寺、長徳 4 年（998）に一条天皇による円教寺、後朱雀天皇が発願し後冷泉天皇により天喜 3 年（1055）に完成をみた円乗寺、延久 2 年（1070）後三条天皇の御願により建立し供養された円宗寺の四箇寺である。応安 2 年（1369）の大風で円宗寺が全壊したのを最後に、四円寺は再建されることなく廃絶した[註2]。また、それぞれの寺域を示す絵図などは残存せず、わずかに文献資料、現地名から比定地の検討が行われてきた。四円寺跡の調査は、昭和 48 年（1973）に円乗寺跡の発掘調査[文168]が御室堅町で行われたのが最初である。その後、数例の調査が実施されたが、明確な成果は得られなかった。ここでは平安時代中期から後期の明確な遺構・遺物を検出した円教寺、円宗寺の寺域について述べる。

円教寺　昭和 49 年（1974）の発掘調査[文192]で、平安時代後期の溝、土壙、墓などが検出されたが、直接当寺に関連する遺構、遺物の検出はなかった。

調査 11-6（Ⅲ-1）で、平安時代中期から後期の寺域の西辺を画する南北溝、南辺を画した東西溝、寺域内の遺構とみられる柱穴、土壙、溝、井戸の遺構群を検出した。寺域内の柱穴、土壙、井戸などの遺物は、11 世紀前半から 12 紀後半と時期幅はあるが、10 世紀末に建立の円教寺と時期的に矛盾しない。また立会調査 11-8[文375] で検出された平安時代中期の瓦を多量に含む焼土壙・基壇は、

図 84　四円寺・北院周辺の遺構分布（1:5,000）

寛仁2年（1018）に円教寺が焼亡し、その後再興されることから、これに関連する遺構とみられる。

南北の区画溝の方位は西に傾いており、現状でその傾きは仁和寺東限の南北道路の傾きと一致する。南北道路は平安時代以前に当地一帯に設定された「葛野郡条里」を踏襲していると考えられ[註3]、寺域設定に規制があったとみられる。寺域は区画溝の位置関係から一辺90m四方の規模を持つと推定でき、その位置は花園天授ヶ岡町北半に収まる。

円宗寺　調査はこれまでに5件実施されているが、昭和55年（1980）の立会調査11-28[文230]で平安時代後期の南北溝が検出されている。

寺域は、西辺・北辺を画する溝については調査11-12・10-57（Ⅲ-1）、東辺については立会調査11-28[文230]で検出された南北溝を比定した。その規模は南北約240m、東西約220mとなる。円宗寺の規模は四円寺の中では最大で、六勝寺の先例となったとされている[註4]。また寺域の方位については円教寺と同様、現在の仁和寺の東辺の南北道と同一の傾きを持つことから条里による規制があったことがうかがわれる。

寺域内の東で検出した平安時代後期の溝、井戸、土壙、整地土とみられる遺物包含層からは、いずれも軒瓦を含む多量の瓦類、土師器皿が出土しており、当地に瓦葺きの堂舎が存在していたことを示している。また出土した軒瓦には大和、播磨、丹波、山城産のものが認められ、京周辺での造寺、造御所活動が活発となる院政期を支えていた、受領層の当寺への関与があったとみられる。

また平安時代中期の南北流路は、円宗寺が造立される以前の遺構で、円宗寺南の立会調査11-55[文247]では同一の流路が南北350m以上にわたり確認されている。流路から出土した平安時代中期の軒瓦、緑釉軒瓦を含む多量の瓦、甎、凝灰岩は、仁和寺の円堂院に関連する遺物とみられる。

仁和寺院家（図83～85）

法金剛院　天長7年（830）に清原夏野の山荘がこの地に営まれ、後に山荘は双丘寺と称せられて寺院となり、天安元年（857）に定額寺となり天安寺の号を給う[註5]。平安時代後期にいたり鳥羽天皇の中宮待賢門院がこの地に法金剛院を建立する。建立は大治5年（1130）に始まり、久安元年（1145）までにすべての堂舎が完成する[註6]。

寺域は花園寺ノ内町、花園扇野町に及び、現法金剛院境内、五位山、統子内親王花園東陵を含む東西2町、南北3町の方6町と推定されている。『中右記』の大治5年（1130）10月29日条に境内の中心から南東にかけて池を掘り、その西に御堂を、東に御所を造ったとある[註7]。寺域の方位、範囲などについては隣接する平安京の条坊に準拠し、寺域の基線は東を西京極大路、北を近衛大路末、南を春日小路末として寺域設定が行われたと考えられる。

平安時代後期の溝、土壙、井戸を寺域内の北東で、その南では平安時代後期の井戸を検出しており、境内の北東にも堂舎が存在していたことが明らかになった。

寺域中央から南にかけて立会調査11-88[附9]で確認された泥土層の堆積は、池の存在を示すもので、寺域西辺では昭和44年（1969）の発掘調査[文140]で平安時代後期の池の汀線が、中央では平安時代後期

図 85　仁和寺院家周辺の遺構分布（1:5,000）

から江戸時代の池の汀線とそれに伴う杭列を試掘調査 11-81[文298] で検出しており、寺域内の中心から南東に掘られたとされる池の範囲が明確になった。

池の西にあったとされる御堂は、昭和 44 年（1969）の発掘調査[文140]で検出された平安時代後期の建物、立会調査 11-88[附9]・95[文412] で検出された土壙がその存在を示している。また平成 7 年（1995）10 月の発掘調査[註8]では平安時代後期の塔、先述した同一の池の西側汀線が検出されている。

以上の建物配置、池との関係は、法金剛院に現在所蔵されている『五位山法金剛院古伽藍之図』に記述されている様子とも符合する。

なお寺域外の西で検出した平安時代中期の土壙、溝、池は、寺域内の西で 1969 年の発掘調査[文140]により検出された建物、築地と共に前身である天安寺に関連するものと考えられる。

また寺域外の北の立会調査 11-42[文257] で検出された中期から後期にかけての池は、平安時代中期に双ヶ岡三ノ丘の東麓にあったとされる双ノ池[註9]とみられる。また同調査では、当池に流れこむ幅 15m ～ 40m の流路が南北 40m にわたり検出されており、池の築造との関連が考えられる。

北院　寛和元年（985）に左大臣源雅信が仁和寺西に造営した御堂とその附属房のことだとされている。推定地は仁和寺西の宇多野北ノ院町である。この北院は康和 5 年（1103）に焼亡したが、長治 2 年（1105）に再建され、その後幾度かの改造がなされたが、室町時代後期に廃絶した。また北院が焼亡した康和 5 年には南に同じ子院である成就院が存在した[註10]。

調査 4-12（Ⅲ -1）で寺域を区画する溝を検出した。区画溝から寺域の南北は約 109m、東西は約 95m の規模となる。溝はいずれも平安時代後期で、北院再建直後の時期にあたる。寺域の方位は円教寺、円宗寺と同じく西に傾くことから、前者の二箇寺と同様、条里の規制があったとみられる。

なお、寺域外の南で検出した平安時代後期の溝、土壙は、北院の南にあったとされる成就院に関連する遺構と考えられる。

南院　11 世紀前半に造営された成就院の住房で、南泉屋とも呼ばれた。その位置は宇多野御池町、宇多野長尾町、宇多野御屋敷町に比定されている。北院に対する南院として造営され、堂舎の南には池が存在していたことも知られる。この南院も鎌倉時代末には廃絶し、室町時代には跡地に常瑜伽院が造立されるが、応仁の乱で焼亡する[註11]。

昭和 41 年（1966）、宇多野御池町の発掘調査[文112]で平安時代末期の 1 間 4 面の建物が検出され、南院の御堂の一つに確定された。また昭和 57 年（1982）、宇多野御屋敷町の試掘調査 10-68[文247] では池跡の一部が検出され、池内から平安時代中期の多量の土器、木製品が出土しており、堂舎の南にあったとされる池の存在を裏付けている。

調査 10-58（Ⅲ -1）では宇多野御池町の東半部に、平安時代後期の遺構が集中していた。特に石列で護岸された溝は御堂跡などの堂舎を画していたと考えられる 。また南半部で検出した池の肩部と、試掘調査 10-67[文239]・68[文247] で確認された池の堆積土の範囲などから、池は宇多野御池町の東南部と常盤御池町の北西部に広がるとみられる。

大聖院　久安 2 年（1146）以前には存在しており、永和 4 年（1378）には焼亡し、以後再興され

ず廃絶している。位置については南院の西で、熊野若王子から勧請した鎮守が大聖院内に鎮座していたとされる。鎮守は神殿と号されていたことから、現地名の宇多野神田町、常盤御池町西半地区に「神殿」を含む大聖院があったとされている。[註12]

このことを裏付ける発掘調査 10-78[文377] が平成 5 年 (1993) に常盤御池町で実施され、東西 5 間、南北 4 間の 2 面廂付き瓦葺きの建物が検出された。この建物は仁和寺所蔵『宮御出家記』大聖院指図にある 5 間 4 面で、北面する孫廂をもつ「寝殿」に比定された。

調査 10-76(Ⅲ-1) で検出した平安時代の井戸 8 は、時期、位置関係などから大聖院の寝殿に関連する井戸と考えられる。また寝殿の南東に堆積する遺物包含層 10 から、12 世紀後半の土師器、軒瓦と共に出土した鋳型片は、仏具生産に関係するとみられ、近辺に工房の存在をうかがわせる遺物として興味深い。さらに同調査では寝殿の北東にあたる宇多野御屋敷町で検出した焼土壙 5 からは平安時代後期、焼土壙 6 からは室町時代の土師器皿が多量に出土したが、両者共に焼け土・焼け石・炭片などを共伴しており、土師器窯に関係したものと考えられる。近接地の常盤山下町の発掘調査[文184]と、宇多野御屋敷町の立会調査 10-65[文230] では、いずれも焼土壙 6 と同様の室町時代の土師器窯が検出されているが、平安時代の土師器窯は未発見であり貴重な資料といえる。

平安時代の工房、窯の製品は時期、位置関係などから大聖院を含む院家への貢納品と考えられ、貢納品である土器・仏具などの生産地区が、宇多野御屋敷町の一画に営まれていたとみられる。

蓮華心院　承安 4 年 (1174) 八条院暲子内親王により常盤の辺りに建立され、建暦元年 (1211) 八条院崩御の後、院内に墓塔が造られた。廃絶時期については不明である。[註13]

調査 10-74(Ⅲ-1) で検出した平安時代後期の溝群から、寺域は東西が約 90m、南北は約 150m の規模で、方位はやや西に振れる。現状でその範囲は鳴滝中道町の北半部にあたる。寺域内では平安時代後期の井戸、瓦窯を検出している。瓦窯は北の高所にも存在するとみられる。また寺域内のほぼ中央の北寄りに八条院暲子内親王の墳墓が現在も残っている。検出した遺構群は、時期的に建立当初のものとみられ、その後に続く時期の遺構を検出していないことから、女院の墓所として成立した以後、寺院は廃絶したものと考えられる。

その他の遺跡 (図 85)

鳴滝安井殿町遺跡　鳴滝藤ノ木町、鳴滝安井殿町にあたり、調査 10-49・50(Ⅲ-1) により平安時代前期から中期の土壙、溝、遺物包含層などを検出した。遺構の時期が仁和寺建立以前のものであり、院家とは関連しないことから、遺跡名を遺構が分布する当地の現町名から鳴滝安井殿町遺跡と呼称する。遺跡の性格については、当地の地名で残る「安井殿」が、比定のきっかけになるが、承和 14 年 (847)、常盤に存在したとされる、平安時代前期の左大臣源 常の山荘[註14]に関わっている可能性もある。

旧地形の復原と遺跡の立地 (図 86)

双ヶ岡地域で研究所が行った発掘・試掘・立会調査の件数は約 300 件に及ぶ。調査では既往の

調査成果を踏まえ、平安京右京西北域の様相、四円寺、各院家の位置比定、実態の解明を主要な課題とした。それとともに旧地形を復原することもその一つであった。そのため旧地形復原のため等高線図（図 86）を作成した。この等高線図は調査による断面測点から、地山上面の標高数値によって等高線を作図した。また調査が実施できなかった宅地、道路部については既調査のデータに、また山麓、双ヶ岡などについては都市計画基本図（1/2,500）の標高数値に拠っている。作成した等高線図に四円寺、仁和寺院家の推定した寺域を重ねあわせ、古墳の分布、平安京の境界、旧流路、池跡などについても図示した。ここでは旧地形等高線図を検討することにより当域の遺跡立地の状況を明らかにしたい。

双ヶ岡地域の旧地形は、旧御室川と旧西ノ川に挟まれた中央の段丘、旧西ノ川の東に広がる緩扇状地、御室川から西の扇状地の三つの地形により形成されている。中央部は北の御室大内の山地から幾つかの丘陵が舌状に南へ張りだし、細長い丘陵の間に谷状の地形が形成されている。旧流路は、谷状の地形や双ヶ岡の東西の裾部に沿い、双ヶ岡先端の南で旧御室川に合流する。東部は北から南に緩やかに傾斜し、中央部とは対照的に平坦である。その平坦地に、龍安寺内の鏡容池からの旧流路が南流している。西部は、南西に緩やかに下がる丘陵状の地形を呈しているが、その丘陵が形成される以前の一時期、御室川の旧流路が南西方向に流れていた。

上述した地形が反映されている等高線図に、先に位置比定した四円寺、仁和寺院家を重ねあわせ、それぞれの立地を述べる。なお、南院、大聖院については、等高線図の旧地形から位置比定を試みた。

円教寺は東西を流路に挟まれ、住吉山から南に張りだす丘陵先端の東側の平坦地に立地している。また西接地も同様の平担地で、西隣に位置したとされる円乗寺[註15]の寺域の比定が可能である。円教寺東の旧西ノ川については平安京の造営時に、現西ノ川に付け替えられたと考えられる。

円宗寺は仁和寺南の標高 60 ～ 72m に立地する。北と南の比高差が 12m と大きい。また当寺域を縦断する平安時代中期の南北流路は、上流では現仁和寺境内の南西を、下流は双ヶ岡の東裾に沿って南流し、旧御室川と合流する。

北院は院家のなかではもっとも高所の標高 79 ～ 84m に立地する。寺域の東と西には旧流路が認められるが、現在は両流路とも規模は縮小し、現仁和寺の西築地の外溝、岡の裾川として残る。

南院は北院の南約 500m の低地に立地している。南北流路の合流地点にあたるが、南に張り出す丘陵の東側の裾に位置しており、造営にあたり地形を造作したと考えられる。南の池跡は南院に伴うもので、流路合流地の利点を利用した意図的な設定がうかがわれる。

大聖院は御室大内から南にのびる丘陵先端部の平坦な台地上に立地している。台地東端では古墳時代後期の円墳が発見されており[文377]、安定した台地であり、また周辺との比高差などから墓域として利用されていたことが理解できる。

なお、大聖院と南院の間の丘陵東斜面と、双ヶ岡一ノ丘と二ノ丘間の西麓地にあたる標高 59 ～ 60m に、平安時代後期と室町時代の土師器窯が立地しており、近辺の同標高地に新たな土師器窯の存在も考えられる。

双ヶ岡南東に位置する法金剛院は、院家ではもっとも低地にあたる標高 38 ～ 47m に立地する。また他の院家とは異なり東側は平安京の西限である西京極大路と接し、北、南側についても条坊を基準に寺域の占地がなされている。五位山南は旧流路の合流地点で、南院と同様にその利点を利用して池がつくられたことが読みとれ、建物は池の東と西の平坦部に立地する。

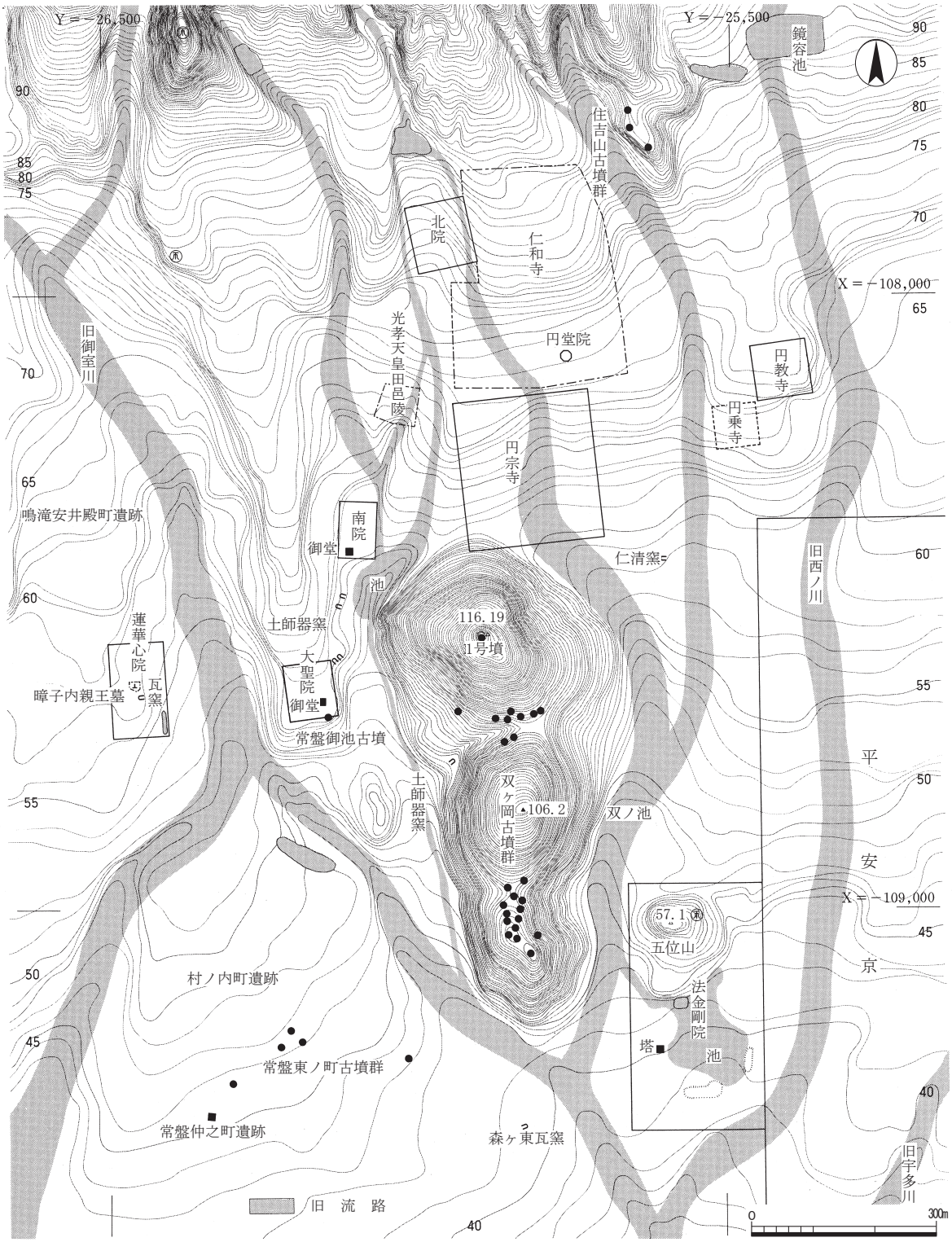

図 36　双ヶ岡地域の旧地形等高線図（1:10,000）

現御室川と重複して北西から南東にかけて旧流路がみられるが、大聖院西では西南方向にも流れていたことが等高線から判読でき、調査で確認した砂礫層の堆積範囲とも一致している（第Ⅲ章の 1)。この旧御室川により形成された扇状地には、弥生時代の常盤村ノ内町遺跡、その南東約 500m に弥生時代から古墳時代の和泉式部町遺跡、標高 45 ～ 46m に古墳時代の常盤仲之町遺跡の各集落跡が、その北東には古墳時代後期の常盤東ノ町古墳群が立地している。

新たに発見した蓮華心院は御室川右岸の低位段丘の東斜面寄りに立地しており、推定した他の寺域に比べ、平坦地がやや少ない。寺域内で検出した平安時代後期の瓦窯は、等高線 54 ～ 56m 間の丘陵東斜面に立地し、同斜面に新たな窯の存在も予想される。蓮華心院の北西には、平安時代前期の遺構群が分布する鳴滝安井殿町遺跡が立地している。北西から南東に張り出す丘陵で、比較的平坦地が多く、建物の存在が推定できる。

結　語

平安京の造営により双ヶ岡の東部は、右京北西域として京内に取り込まれ、造営に際しては流路の付け替え、道路の新設、整地などの土地の改変がなされ宅地化される。双ヶ岡の西部は都市西郊地として、貴族の別業、山荘、寺社などが造営されはじめる。西部の御室川右岸で検出した平安時代前期の遺構群は別業、山荘の存在を示している。北西部の京外、特に平安京北辺以北の京域外にあたる宇多川以西においては、平安時代中期の遺構分布状況から、条坊の規制が緩和され、人が住み始めたとみられる。また京外の双ヶ岡の一ノ丘と二ノ丘間の東麓一帯も、平安時代中期には墓域として利用されている。

双ヶ岡の北に仁和 4 年 (888) 宇多天皇により仁和寺が創立される。当初の寺域は不明な点が多く確定されていない。9 世紀末から 10 世紀初頭、寺域の南東に円堂院、僧坊が造立されたこと[文336]で寺域が拡大されている。現伽藍に近い状況が成立したのは、応仁の乱や戦国時代を経過した後の江戸時代始めであり[註16]、仁和寺南大門前で検出した平安時代中期の南北流路（Ⅲ -1）は、上流が創建時の寺域の西限であった可能性もあり、当初の寺域を確定する一資料となろう。

永観元年 (983) 四円寺の一箇寺・円融寺が建立される。以後四円寺をはじめとして、仁和寺院家が仁和寺の南から双ヶ岡の周辺一帯にかけて次々と建立され、平安時代後期の院政期には最盛期をむかえる[註17]。建立された各院の寺域方位は、仁和寺に準拠していたとみられる。仁和寺の寺域方位は、創建当初は葛野郡条里を基線にしたといわれている。当域の旧地形等高線図から谷地形の多い状況をみれば、条里は当地の状況に適合して施工されたとみられる。平安京に西接する法金剛院は、条坊に規制されているため方位は他の院家とは異なるが、寺域の東西規模は条里の単位に依っており、院家造営の基準の変則性を示している。

仁和寺は御室大内山の山麓に位置し、立地からみれば高所にあたる。南面する仁和寺はその南の広域に、造営後配置された院家を統合、管理していく位置にある。院家の各寺院は谷筋を避け、丘陵の先端部などの平坦地に建立される。院家の最盛期には、双ヶ岡先端の南を東西に通る古道[註18]からその景観をみれば、その比高差から山岳寺院の様相を呈していたことがうかがわれよう。

註

1　雪江宗深「正法山妙心禅寺記」『正法山大祖伝』（萩原純道『正法山大祖伝訓註』京都、思文閣出版 1976 年）による。
2　『院家建築の研究』（文 228）所収の第 1 編、第 3 章の 2-4 四円寺で、詳しく述べられている。
3　『奈良国立文化財研究所学報第 11 冊』（文 112）所収の付図「仁和寺周辺院家位置推定図」杉山信三氏により復原された葛野郡条里の地割りが仁和寺の東限の南北道路と一致する。
4　『院家建築の研究』（文 228）所収の第 1 編、第 3 章の 2-4 円宗寺では、円宗寺は他の三円寺と比較して規模が大きく、本寺の仁和寺に対する子院の規模をはるかに超え、白川に造営された六勝寺の先例になったと述べられている。
5　『類聚国史』天長 7 年（830）閏 12 月 2 日条、天皇、北野に幸し、更に大納言清原真人夏野の双岡宅に幸したとあるのが初見。
6　『三代実録』天安 2 年（858）10 月 17 日条、文徳天皇の追福のため、田邑陵に三昧を修すにあたり、沙弥 10 人を双丘寺に住まわす。元右大臣清原真人夏野の山荘、今は天安寺というなりと記される。
7　『院家建築の研究』（文 228）所収の第 1 編、第 3 章の 4-4 法金剛院では、院内には東御所、北斗堂、塔、経蔵、南御堂、三昧堂が、久安元年（1145）までには完成していたとされる。
8　当研究所が行った都市計画道路花園停車場広隆寺線建設工事に伴う発掘調査の報道発表資料（1995 年 10 月 17 日）による。
9　『続日本後紀』承和 14 年 10 月 20 日条に、双丘の下に大池有り池中に水鳥が群れをなすとあり、『山州名跡志』には、三ノ丘東にあったが今は田となって池の痕跡をなすとある。
10　『院家建築の研究』（文 228）所収の第 1 編、第 3 章の 3-1 北院による。
11　『院家建築の研究』（文 228）所収の第 1 編、第 3 章の 3-2 成就院と南院による。
12　『院家建築の研究』（文 228）所収の第 1 編、第 3 章の 3-3 大聖院による。
13　『院家建築の研究』（文 228）所収の第 1 編、第 3 章の 4-6 蓮華心院による。
14　『続日本後紀』承和 14 年（847）10 月 20 日条、左大臣源朝臣常の山庄、丘南に在りとある。
15　『院家建築の研究』（文 228）所収の第 1 編、第 3 章の 2-3 円乗寺による。
16　「仁和寺の創立」『日本古代学論集』（文 212）において、福山敏男氏は創立期の仁和寺の位置が正確には判っていないとし、初期の仁和寺本寺や円堂院が双ヶ岡東の池上（池尻）にあった可能性を追求している。
17　『仁和寺諸院家記』に 78 院の寺名が記される。
18　本文第Ⅴ章の 2「古道の成立と変遷」を参照。

2　太秦地域の遺跡

遺跡の範囲と概要（図 87）

村ノ内町遺跡　この遺跡の発見は、昭和 52 年（1977）度の常盤東ノ町古墳群の発掘調査 10-186[文197] で、墳丘封土からの弥生土器（畿内第Ⅳ様式期）が出土したことによる。その後の立会調査 10-132[文230] で、弥生時代中期の土壙と土器が検出されたが、遺跡の範囲確定には至らなかった。昭和 61 年（1986）度の試掘調査 10-117[文298] では、弥生時代中期の土壙、溝などの遺構が検出されており、遺跡の中心地区の比定が可能となった。また、仁和寺子院跡の発掘調査 10-192[文206] では、弥生土器と共に土師器（庄内式併行期）の壷頸部が出土していたが、遺跡南西部の調査 10-196[文351] で、同期の土壙、遺物包含層を検出したことにより、遺跡の中心と範囲をほぼ確定することができた。弥生時代の遺跡範囲は、常盤村ノ内町を中心として、常盤北裏町、常盤西町、常盤仲之町、常盤東ノ町、常盤出口町に及ぶと推定される。古墳時代前期の遺跡は、常盤村ノ内町からやや南西に中心地を移し、常盤西町、常盤仲之町を中心として常盤東ノ町の南半から常盤窪町東半に及んでいるものと推定できる。この遺跡からは、弥生土器（畿内第Ⅳ様式期）と土師器（庄内式併行期）が出土するが、畿内第Ⅴ様式期の土器が出土していない。このため弥生時代中期に集落が成立したが、後期直前に廃絶したものといえる。しかし古墳時代前期に再び集落を形成するが、まもなく廃村を迎えている。

常盤地区で発見した弥生時代中期と古墳時代前期の遺跡を、「村ノ内町遺跡」と呼称する。

常盤東ノ町古墳群　昭和 52 年（1977）度の発掘調査 10-186[文197] で発見された古墳群で、古墳時代後期の円墳 3 基を調査している。さらに同年、東隣の発掘調査 10-187[文205] でも古墳 1 基が確認されている。調査では、古墳時代後期の土師器が出土している他、古道と考えられる路面の堆積を確認している。昭和 54 年（1979）度の発掘調査 10-169[附11] では古墳の周溝が検出され、古墳時代後期の土器が出土している。古墳は、古道と推定する道の北側にあり、古墳群の中で最も南に位置した古墳とみられる。古墳群は、常盤一ノ井町、常盤東ノ町、常盤仲之町一帯に 10 数基が分布すると推定される。これらは 6 世紀後半に築造が始まり、追葬を含めて 7 世紀前半まで維持されていた古墳群であろう。なおこの古墳群は、弥生時代の集落遺跡と重なっており、各古墳の墳丘から弥生土器（畿内第Ⅳ様式期）の出土がある。また、平成元年（1989）度の調査 10-112 では、約 3m の間隔で平行する 2 条の南北溝を検出している。土器が出土せず時期を確定できないが、堆積土層から平安時代と考えられ、条里の地割りに関係した溝の可能性がある。

草木町遺跡　調査 9-19、調査 10-49・74・96・101・139 で、平安時代前期の土壙、溝、柱穴、遺物包含層を検出した。また遺構分布の西辺には旧河川である流路跡を検出している。遺構・遺物が分布する範囲は、常盤野小学校東側、常盤草木町を中心にして半径 200m に及ぶ。立地条件や遺構の時期から、山荘跡と推定される。『続日本後紀』承和 14 年条に記される左大臣源　常の山荘である可能性を指摘できる。またこの遺構群の北東域でも、平安時代前期にさかのぼる遺構群の検出があり、同様な山荘跡の可能性がある。[註1]

巽古墳　昭和 61 年（1986）度に試掘調査 9-18[文295・329] が実施され、両袖式の、全長 10.1m の石室をもつ古墳が検出された。須恵器蓋・杯・高杯・装飾付器台、鉄鏃、金銅製の馬具、凝灰岩製の石棺

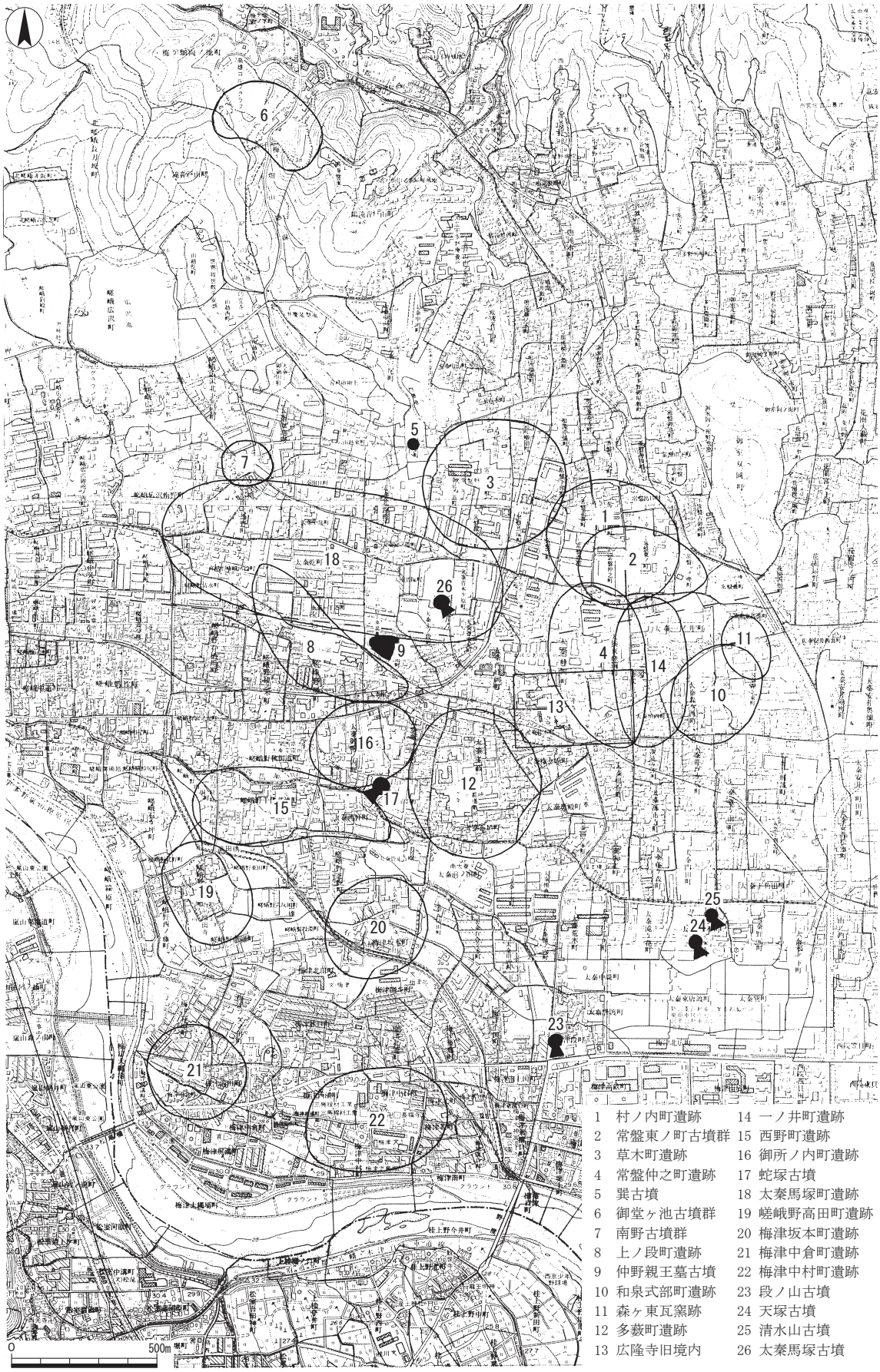

図 87　太秦地域の遺跡配置（1:20,000）

片などが出土し、有力者を被葬者と考えることができる。また調査 9-19 では、同古墳の周溝と考えられる溝状遺構を検出している。

御堂ヶ池古墳群　1 号墳の発掘調査 3-4[文249] が、昭和 57 年（1982）度に実施されている。調査では、6 世紀末に築造され、7 世紀前半にかけて順次追葬が行われたことを明らかにしている。昭和 59 年（1984）度には21 号墳、26 号墳の発掘調査3-6[文281]が実施されている。21 号墳は両袖式の石室をもち、7 世紀前半に位置づけられる。26 号墳は山上の東西尾根のくびれ部に位置している。21 号墳と同じ 7 世紀前半の築造と考えられている。また平成 4 年（1992）度の調査 3-3 では、すでに消滅したとされていた 2 号墳を検出している 。公共下水道に伴う広域立会調査が、古墳の再発見に繋がったといえよう。

南野古墳群　調査 9-14・21・61 で、古墳の周溝と考えられる溝状遺構を検出した。道路端に石室と墳丘が一部残存しており、この古墳の周溝を検出したものと考えられる。太秦掘池町に所在する。また、古墳時代に推定できる古道の路面を数地点で確認した。嵯峨野の丘陵に点在している古墳の多くが、この古道沿いに立地することを指摘できる。

上ノ段町遺跡　昭和 55 年（1980）度の市立蜂ヶ岡中学校の発掘調査 9-44[附13] で、古墳時代後期の竪穴住居、建物が検出されている。また下層の遺物包含層から、縄文時代早期・前期の土器・石器が出土した。嵯峨野の平地部で、この時期の遺跡を発見した初めての調査であった。昭和 63 年（1988）度には、同中学校屋内体操場改築に伴う発掘調査 9-42[文378] が実施された。古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居、建物、溝、土壙などが検出されている 。これらに加えて、昭和 63 年度と平成元年（1989）度の調査 9-38・39 では、古墳時代後期の遺構を遺跡の南辺で検出している。また遺跡の北西丘陵部にあたる調査 9-33 では、同時期の遺構群を検出しており、遺跡範囲はさらに北西に広がることが確認できた。遺跡の中心は嵯峨野開町にあり、太秦帷子ヶ辻町西半、嵯峨野清水町、嵯峨野神ノ木町の一部に広がる。

仲野親王墓古墳　太秦段丘の南西縁辺に築造された前方後円墳である。この古墳は、周堤と周濠をもっている。仲野親王墓に治定されているため、墳丘部は未調査である。調査 9-45 では、後円部先端付近で溝を検出している。築造時に、丘陵から切り離した堀り切り跡と考えられる。なお、この溝の斜面で、縦方向の帯状をなす噴砂痕跡を確認した。噴出面が、地山である黄色粘土面上で、墳丘の崩落土に達していない。このため噴砂発生時期の下限を、古墳築造以前とすることができる。

和泉式部町遺跡　この遺跡は、昭和 60 年（1985）度の調査 11-102・112 で発見したもので、竪穴住居、土壙、溝、柱穴、遺物包含層などから、弥生土器、庄内式併行期の土師器が出土している。その後、昭和 62 年（1987）度に発掘調査 16-65[文349] が実施され、弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代前期の竪穴住居 14 戸、同中期の竪穴住居 7 戸が検出された。出土遺物は、弥生土器、鉄製品、土師器、韓式系土器、須恵器、砥石などがある。同年度の調査 10-191・199 では、遺跡北側の太秦和泉式部町西辺で、古墳時代前期の土器が出土した。

遺跡範囲は、太秦和泉式部町、太秦一ノ井町、太秦森ヶ西町、太秦森ヶ東町、太秦井戸ヶ尻町北辺、太秦森ヶ前町北辺に広がる。

森ヶ東瓦窯跡　昭和 60 年（1985）度の調査 11-102 で、瓦窯に関係した土壙、遺物包含層から

平安時代中期に属する多量の瓦類が出土した。昭和 61 年（1986）度の立会調査 11-108[文296] では、ロストル式の瓦窯が発見され、多数の瓦類が出土した。昭和 62 年（1987）度の調査 10-199 でも、道路の盛土から平安時代中期の瓦類を多量に採取している。瓦窯の分布範囲は、これらの調査から太秦森ヶ東町北部にほぼ限定できる。

多藪町遺跡　この遺跡は昭和 62 年（1987）度の調査 16-67・70 で発見した。この遺跡は古墳時代後期から始まり、飛鳥時代、平安時代、室町時代中期・後期から江戸時代の遺跡が重複する。調査では、各時代の土壙、溝、柱穴多数が検出され、多量の土師器・須恵器などが出土した。遺跡は、太秦多藪町を中心として、太秦掘ヶ内町、太秦石垣町、太秦奥殿町北西部、太秦桂ヶ原町西半に広がる。この遺跡は、広隆寺の創建と深く関係する集落遺跡とみられる。この集落遺跡を「多藪町遺跡」と呼称する。

広隆寺旧境内　昭和 52 年（1977）度の右京区役所の発掘調査 16-83[附1] では、飛鳥時代の基壇埋土、瓦、奈良時代の土壙、柱穴、平安時代の建物が検出されている。また、古墳時代後期の円筒埴輪片、飛鳥時代に属した瓦類が多量に出土した。昭和 54 年（1979）度の発掘調査 16-52[附7] では、古墳時代後期の竪穴住居、円筒埴輪片、平安時代の瓦などを検出している。昭和 55 年（1980）の発掘調査 16-88[文232] では、古墳時代後期の竪穴住居、建物、平安時代中期の建物、土壙、柵、埋納遺構が検出されている。埋納遺構は、土師器皿を数枚重ねて埋め、その下の小壷に、銅銭十数枚を埋納していた。建物の地鎮に伴うものと考えられる。昭和 62 年（1987）度の調査 10-196 では、広隆寺東辺を画した幅 3m、深さ 1.0m の溝を 2 箇所で検出している。同年の調査 16-46 では、広隆寺桂宮院北側で、平安時代後期の遺物包含層を検出した。遺物の時期を特定できないが、鋳型片も出土している。平成 3 年（1992）度の発掘調査 16-91[文416] では、古墳時代後期の溝、竪穴住居に伴う竈が検出されている。また、平安時代前期から室町時代に至る各時期の土器、瓦などを多量に包含する大規模な土壙と、遺物包含層が確認されている。同年の発掘調査 16-82[文417] では、平安時代前期の東西方向に平行する 2 条の溝が検出された。これは北西から南東への傾きをもっている。平成 5 年度の発掘調査 16-85[文433] でも、平安時代中期の東西方向の溝が検出された。この溝も、平成 3 年度発掘調査検出溝と同様の傾きをもっている。これらの溝から、広隆寺南門前の道路（府道二条停車場嵐山線）の中心までの距離は約 110m と計測できる。葛野郡五条荒蒔里八・九・十・十五・十六・十七坪、南北 2 坪、東西 3 坪の方 6 箇坪とされる広隆寺の寺地を南北に区分する遺構と考えられる。創建期の広隆寺の寺域は、太秦蜂岡町南半、太秦東蜂岡町南半、太秦桂木町北半にあったといえる。

一ノ井遺跡　調査 10-182・196 で、奈良時代から平安時代後期に至る土壙、溝、柱穴などを検出した。またこの東側では、広範囲にわたる湿地堆積土層を検出し、古墳時代から平安時代の遺物が含まれることを確認している。遺跡の範囲は、太秦一ノ井町西部、太秦垣内町に広がる。

西野町遺跡　この遺跡は、昭和 56 年（1981）度の市立嵯峨野小学校の発掘調査 15-14[文249] で発見された。調査では、古墳時代後期の竪穴住居、溝、土壙、柱穴が検出されている。また、石鏃、石包丁が出土する竪穴住居も検出された。平安時代と鎌倉時代から室町時代の遺物包含層も検出され、遺跡が重複することを確認している。その後、昭和 63 年（1988）度に発掘調査 15-21[文380]

が実施され、古墳時代前期の土壙、古墳時代後期の竪穴住居、奈良時代から平安時代前期の建物、土壙、井戸、溝、柵などが検出された。同年の調査 15-9・22 では古墳時代前期の竪穴住居、遺物包含層、同後期の土壙、遺物包含層、飛鳥時代から奈良時代の土壙、遺物包含層、平安時代前期の遺物包含層を検出した。

またこの遺跡からは、飛鳥時代から奈良時代の行基式丸瓦、重弧文軒平瓦、蓮華文軒丸瓦、その他の瓦類などが出土している。これは、飛鳥時代から奈良時代にかけて、広隆寺と並行する時期の寺院とみられる遺跡が存在したことを示唆している。遺跡の範囲は、太秦西野町から嵯峨野千代ノ道町全域に広がる。

御所ノ内町遺跡　調査 15-5・6 ～ 8 で、奈良時代から平安時代前期の土壙、溝、遺物包含層を検出した。別業か山荘跡の遺構群を検出したものといえる。遺跡の範囲は、太秦御所ノ内町全域と太秦堀ヶ内町西半に広がる。また、この遺跡の北方段丘に仲野親王陵高畠墓も存在している。太秦地区で、新たな遺跡を発見したものであり、「御所ノ内町遺跡」と呼称する。

史跡蛇塚古墳　蛇塚古墳は、昭和 11 年 (1936) に浜田耕作博士によって調査[文40・46]が実施され、墳丘と石室の実測が行われた。この時、飛鳥の石舞台古墳と匹敵する規模が確認されている。昭和 63 年 (1988) 度の調査 15-27[文325] が、蛇塚古墳とその周辺で実施された。調査は、後円部石室周囲と前方部中央を縦断し､その周濠の推定位置を含むものであった。周濠は検出できなかったものの、石室周囲で、石室基底部より下位に位置する遺物包含層から、6 世紀第 4 四半期の土師器甕、須恵器蓋・杯・器台が出土した。この遺物は、蛇塚古墳築造の上限を規定する。同様に、昭和 59 年 (1984) 度の立会調査 15-31[文270] でも、古墳時代後期の遺物包含層を検出している。

太秦馬塚町遺跡　平成元年度の調査 9-29・33・36・37・45、試掘調査 10-189[文395] などで、この地域一帯に多数の土壙を検出した。土壙の壁面は、垂直に切り込まれたものが多い。この内の一例である土壙内から、平安時代後期の土師器皿 4 枚と白磁椀・皿が出土している。出土土器のセット関係から、墓の副葬品とみられ、土壙群は墓壙の可能性が高い。平安時代後期の墓地を発見したといえる。土壙を検出した範囲は、太秦馬塚町、太秦上ノ段町、太秦青木元町、太秦青木ヶ原町、太秦宮ノ前町、太秦中筋町、太秦乾町、太秦一丁芝町、嵯峨野嵯峨ノ段町に及ぶ。また調査 9-33 では、古墳時代後期の土壙や遺物包含層を上ノ段町遺跡の北西段丘上で検出している。太秦地域で新たに発見したこの遺跡を「太秦馬塚町遺跡」と呼称する。

嵯峨野高田町遺跡　調査 15-40・41 で、高田三ノ宮神社境内と南側の畑地から、古墳時代後期の須恵器を採取した。昭和 63 年 (1988) 度の調査 15-39 では、数箇所の地点で古墳時代後期と平安時代の土壙、溝、遺物包含層を検出した。この地区は、飛鳥時代以来の葛野の有力氏族である高田首氏の本貫地である可能性を指摘できる。遺跡は、嵯峨野高田町、嵯峨野南浦町、嵯峨野東田町西辺、嵯峨野西ノ藤町北辺に広がる 。古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡とすることができる。この遺跡を「嵯峨野高田町遺跡」と呼称する。

梅津坂本町遺跡　昭和 63 年 (1988) 度の調査 15-39 で、平安時代前期から中期の土壙・溝・柱穴を検出した。遺跡は、梅津坂本町を中心にして、梅津北川町、梅津開キ町に広がるものと推定される。この遺跡を「梅津坂本町遺跡」と呼称する。

梅津中倉町遺跡　この遺跡は、昭和 62 年（1987）度の調査 15-44 で発見した。調査では、遺物包含層から平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。遺物包含層は、梅宮大社の西側地区に集中する。遺跡の中心は梅津中倉町、梅津前田町、梅津尻溝町にあるとみられる。この新発見の遺跡を、「梅津中倉町遺跡」と呼称する。

梅津中村町遺跡　昭和 58 年（1983）度の試掘調査 20-2[文276] で、室町時代、鎌倉時代の土師器、瓦器、瓦類を検出している。平成元年（1989）度の長福寺境内の調査 20-1 では、平安時代前期・後期、室町時代の土器、瓦を採取している。修理職木屋か、藤原氏の別業に関係した遺跡と考えられよう。遺跡は、梅津中村町を中心として、梅津北浦町、梅津西浦町、梅津北町、梅津南町に広がると推定される。この新発見の遺跡を、「梅津中村町遺跡」と呼称する。

古墳時代の遺跡（図 88）

古墳時代中期の 5 世紀後半には、広隆寺旧境内の周囲で前方後円墳の築造が始まる。段ノ山古墳は、広隆寺旧境内の真南の自然堤防上に造営されている。引き続いて築造された清水山古墳、天塚古墳の墳丘には、円筒埴輪が葺かれていたことも確認されている。後者より古式と考えられる段ノ山古墳にも埴輪が葺かれていた可能性は高い。6 世紀代には、仲野親王陵古墳、太秦馬塚古墳、蛇塚古墳などが相次いで出現する。一方、広隆寺旧境内からは、円筒埴輪片が出土する。周囲の前方後円墳に供給する埴輪が、この地で製作されていたとみられる[註2]。この間の 6 世紀後半代には、太秦北方の段丘で、常盤御池古墳、甲塚古墳、巽古墳、遍照寺古墳、稲荷古墳、印空寺古墳などの、径 20 ～ 30m 規模の円墳が築造されている。

6 世紀半ばまでには、山背秦氏の本格的な葛野（平安京右京域）開発が進み、本宗家が葛野の北域（平安宮域）に拠点を構えたとみられる。この頃の秦氏は、御室川以東に主要な居住地や生産の場を持っており、太秦地域は、彼らの父祖を葬送する地として設定され、広隆寺旧境内はいわば葬送事業を企画準備した地区であったといえる。

7 世紀前半には、太秦北方の山麓と山腹に、群集墳が 100 基を越す数で築造される。この造墓は、太秦東南方の広大な原野を灌漑し、農業生産力の高まりを受けて富裕化した人々の所産といえよう。桂川の堰堤（葛野大堰）の整備や、有栖川、御室川、宇多川の統御に成功し、標高 35m 以下の太秦南方地域や、梅津、山ノ内、西院、西京極を含む地域で開発が進展したとみられる。

一方、6 世紀末頃には、広隆寺旧境内、常盤仲之町遺跡、西野町遺跡、上ノ段町遺跡、多藪町遺跡、嵯峨野高田町遺跡などの集落が、広隆寺旧境内やその周辺に出現する。集落の進出と集中は、周辺の農業生産の高まりを基盤に、手工業生産力の増大と効率化に対応した結果とみられよう。

これと時を同じくした 7 世紀前半には、広隆寺旧境内に多量の瓦を葺く建物を配置した寺院（葛野秦寺）が造営され、7 世紀半ばには西野町遺跡で瓦類を使用した建物を持つ「徳願寺」とみられる寺院も姿を現している。この時期以後、太秦の地は、秦氏の祖霊を祀り父祖を葬送した墓地から、新しい信仰体系や生産技術の象徴である寺院（葛野秦寺）と、これを核にした手工業産品の生産地に変貌したとみることができる。

平安時代の遺跡（図 89）

延暦 13 年（794）に、愛宕郡西域と葛野郡東域に平安京が造営されると、太秦の地は京の西郊に位置付けられ、大きな変化に見舞われる。嵯峨野一帯は、天皇や親王家の禁野、別業の地とし

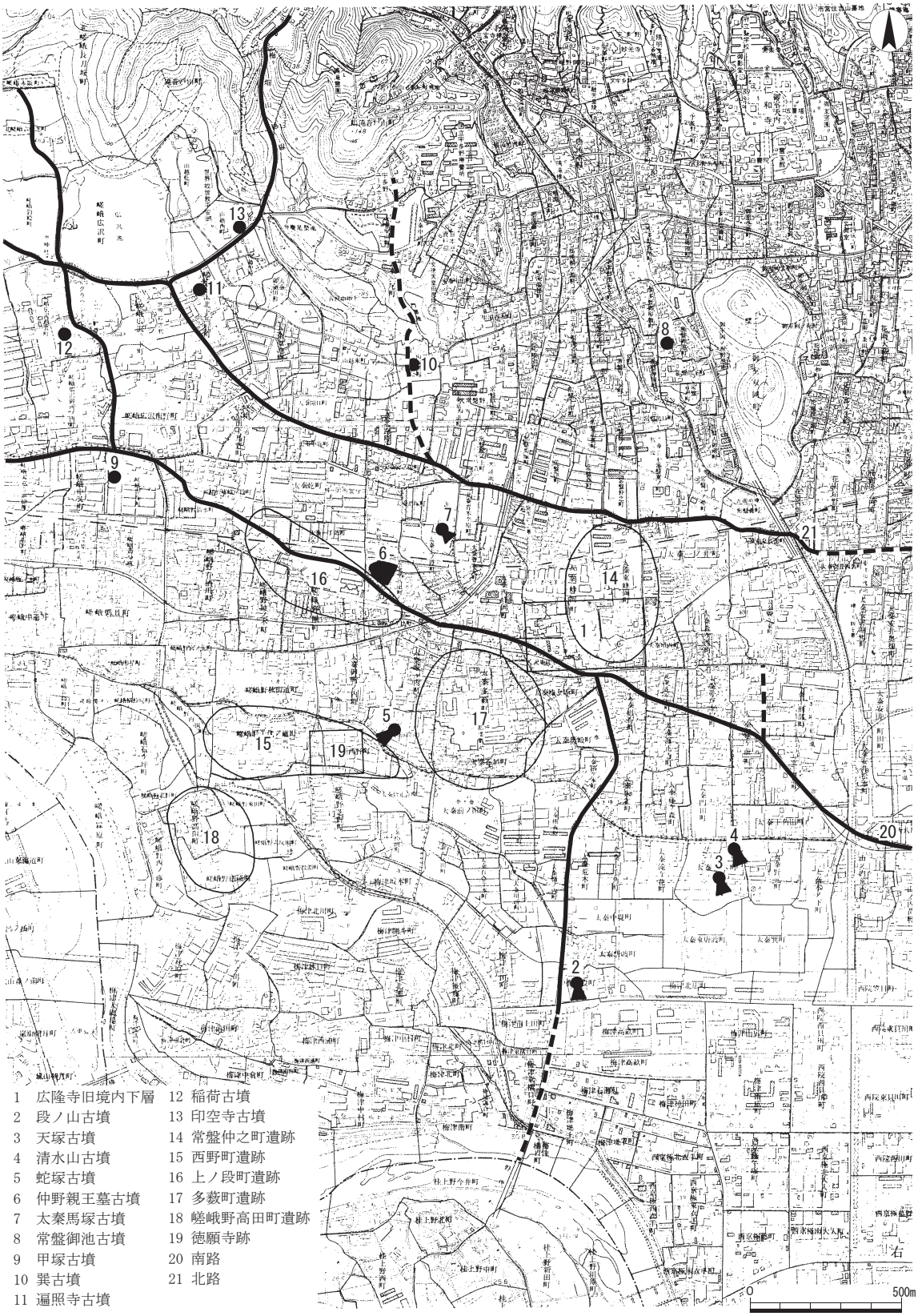

図 88　古墳時代の遺跡と古道配置（1:20,000）

て規制を受ける[註3]。太秦では、遷都時すでに「葛野秦寺」があり、伽藍を維持している。しかし遷都直後、天皇の寺である「常住寺」（野寺）が、平安宮北西の「蜂岡寺」（北野廃寺）の位置に設定されたことで、蜂岡寺の寺宝や仏像は葛野秦寺への移転を余儀なくされたといえる。太秦の外京化は、遷都当初から企画されたと考えられ、前述の動きと深い関係がある。葛野秦寺の寺地、伽藍の整備も本格的に行われたことが、平安時代前期の文献や遺構からうかがえる。二条大路末道に面して葛野秦寺の南門を建設し、広隆寺としての寺観を整え、広隆寺領を設定したのもそのあらわれとみられる。

遷都以降この地域には、葛原親王の高田別業、仲野親王の別業、源　常の山荘などが造られている。また遷都後、長岡京南へ移転される山城国府も、この地域にあったことが知られている[註4]。

古道の成立と変遷

旧石器時代以後、道を利用した交流は始まっている。石器や土器の製作技法に共通性があり、原材料や製品、食料の交換があったことからも明らかであろう。弥生時代は、生産物の交易のために活発な交通が行われている。古墳時代には、経済を基礎にした道の設定だけではなく、政治や信仰（祭祀）と深く関わった道も造られて行く。

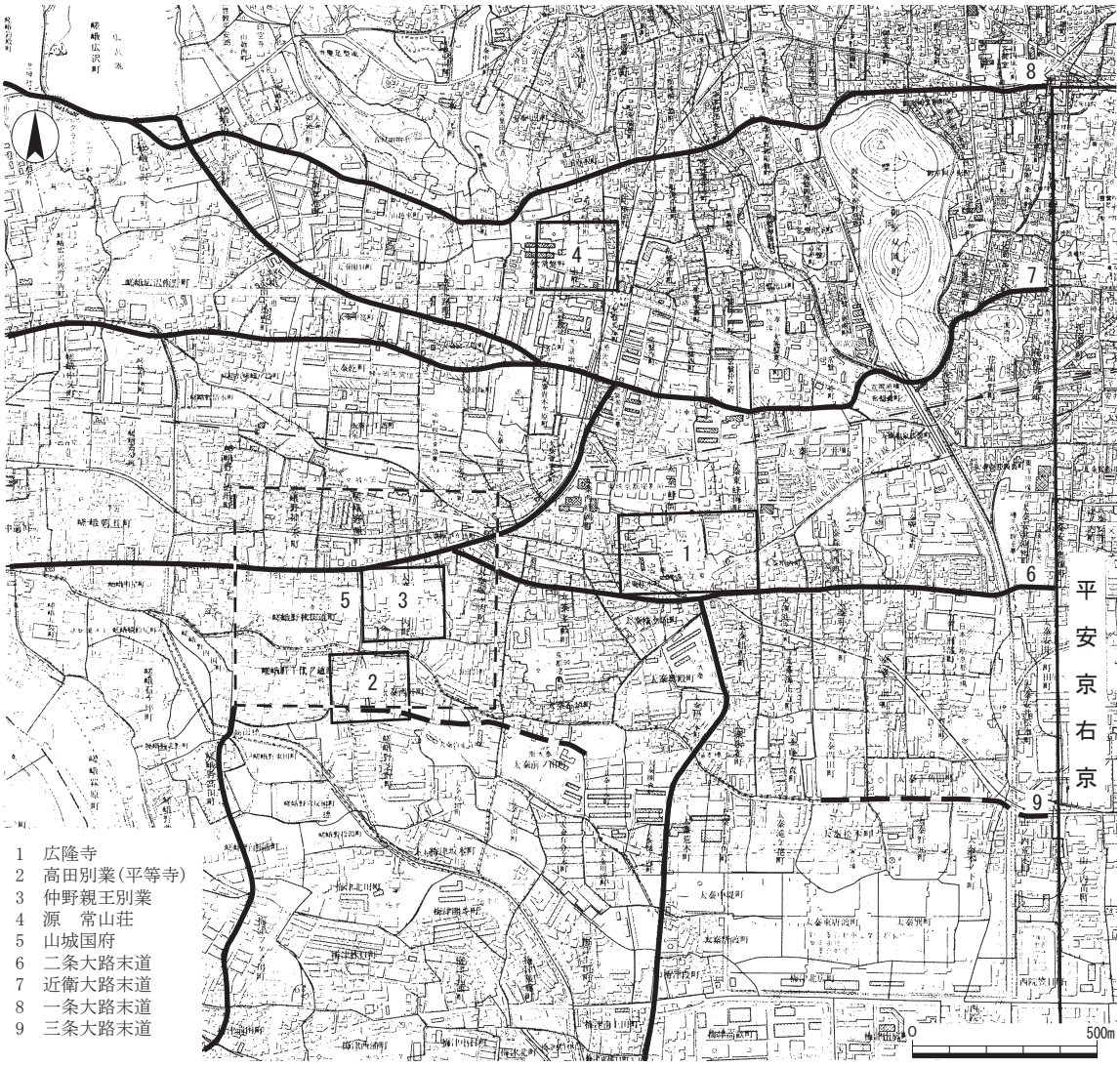

図 89　平安時代の遺跡と古道配置（1:20,000）

太秦地域は、5世紀後半から6世紀前半に、山ノ内の猿田彦神社あたりを中継点にして、広隆寺旧境内に達する道が設置されたとみられる。起点は、初期の秦氏の拠点であった伏見稲荷の南方、七瀬川流域一帯（深草屯倉[註5]）を有力な候補地とできる。これを発して北西に向かい、山ノ内付近に達し、御室川を渡り、広隆寺旧境内南端に通じた道が想定できる。

6世紀後半には、太秦の丘陵に中型古墳が築造され始めており、古道も「南路」がさらに北西に延長されたとみられる。また、双ヶ岡三ノ丘南端を中継する、新たな「北路」も設置され、広沢池から嵯峨七ツ塚に達したとみてとれる。起点は「平安宮」の南端付近で、現在の出世稲荷神社あたりを発し、「旧太子道」を西行し、三ノ丘南端に至ったと想定できる。7世紀前半には、群集墳が山際や山腹に造られるに従い、さらに北に延長されている。

しかし古墳の新たな築造を終えた7世紀後半には、古道の末端から徐々に機能を停止したとみられる。だが、広隆寺と広隆寺周辺の道は存続し、旧宇多川流域の各集落から、葛野秦寺へ参詣する道としてより複雑になり、発展したといえる。

平安時代には、双ヶ岡東麓と御室川の東側が平安京域に取り込まれ、整然とした区画と道路が設置されるにおよび、西京極の各大路末から発する嵯峨・大堰への連絡道が開かれている。二条大路末から、広隆寺門前に至る道が最初に整えられ、帷子ノ辻まで「南路」を利用、ここからほぼ直線的に渡月橋北端の大堰に通ずる道が成立する。

嵯峨天皇の時代には、近衛大路末を発して双ヶ岡三ノ丘南裾から、御室川を渡って「北路」に入り、太秦宮ノ前町で二手に分かれ、西進して阿刀神社の南で「南路」に出、さらに西北進して嵯峨離宮南辺に至る道が成立する。また「北路」をそのまま西北進して、広沢池西南端から嵯峨離宮に達する道が再利用される。下って嵯峨院成立の頃には、一条大路末から双ヶ岡一ノ丘北端をかすめ、広沢池東端に至る道も開かれたとみられる[註6]。

これらの道は、平安時代後期に、奥嵯峨に成立した浄土宗寺院や貴族層の山荘に通じる道、化野への葬送墓参、愛宕山への参詣に利用される道に引き継がれたとみられよう。

註

1　第Ⅲ章の1鳴滝地区で報告した。

2　第Ⅳ章の3で円筒埴輪の出土を報告している。また、昭和45年（1970）の（財）古代学協会による大酒神社から南門東側府道バイパス工事に伴う調査でも円筒埴輪の出土報告がある。山田邦和「広隆寺旧境内出土の土器・陶磁器」『平安京出土土器の研究』（財）古代学協会・古代学研究所　平成6年（1994）。出土量は少量であり、出土地点が分散する。出土埴輪自体に時期差が認められるなど、製作地と考えるのが妥当であろう。

3　桓武天皇は、平安京遷都以後の延暦13年（794）から24年（805）の11年間に、大堰、北野、西野などへの行幸、遊猟が40数回にのぼる。

4　『日本紀略』延暦16年（797）条に山城国府を葛野郡から長岡京南に遷すとある。

5　『日本書記』欽明天皇即位前記に秦大津父は山背国紀郡深草里に居住とある。『日本書記』皇極天皇2年（643）条に深草屯倉の存在が記される。

6　『日本後紀』弘仁5年（814）条に嵯峨天皇が嵯峨離宮に行幸とある。『日本後紀』承和元年（834）条に嵯峨上皇が嵯峨新院に移るとある。

3　嵯峨・嵐山地域の遺跡

史跡名勝嵐山に指定されている範囲には嵐山の他に化野・天龍寺周辺などが含まれ、鹿王院・車折地区は、周知遺跡の範囲外であるが、古墳時代から江戸時代に至る数多くの遺構と遺物の検出があった。また、大覚寺南・広沢・野々宮北地区でも大堰川北岸の離宮跡を始めとして平安時代前期を主体とする遺構・遺物を検出している。これらは、嵯峨・嵐山地域の新たな遺跡として認識されるべきものである。以下、嵯峨院、観空寺、檀林寺などの範囲の推定を含めて調査で明らかになった遺跡について述べる。

北嵯峨の遺跡（図版 57　図 90・91）

嵯峨院の文献における初見は『日本後紀』弘仁 5 年（814）条であり、嵯峨天皇の皇子時代の山荘として造営され、即位後には離宮として利用された。後の貞観 18 年（876）に淳和天皇の皇后正子がこれを大覚寺と改め、嵯峨院は寺院としての様相を整えることになり、現在の北嵯峨一帯がその寺域となった。また、後宇多上皇が徳治 3 年（1308）、この大覚寺に入り、寺内の蓮華峰寺を仙洞御所として院政を行ったため嵯峨御所とも呼ばれている。

嵯峨院・大覚寺御所跡　これまでに当研究所がこの遺跡を対象として行った調査は 20 件を数

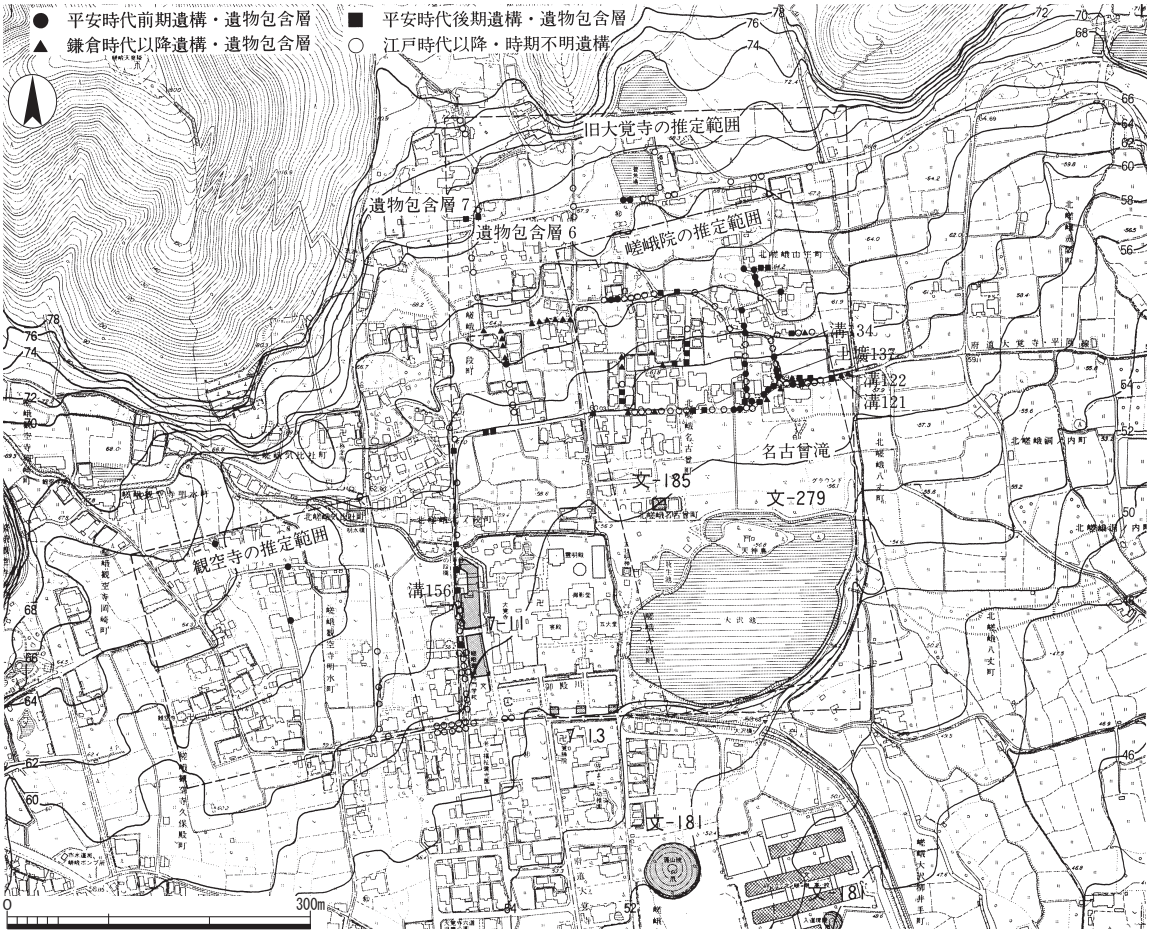

図 90　大覚寺周辺の遺構分布（1:7,500）

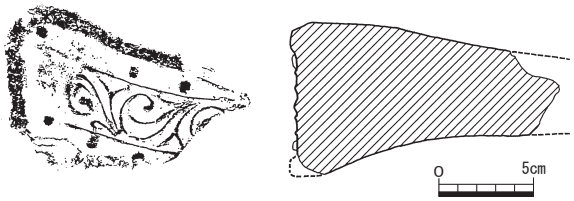

図 91　大覚寺境内出土軒瓦（1:4）

える。他機関による調査は大沢池整備委員会による調査[文279]があり、平安時代前期に属する遺構が検出されている。今回実施した調査 1-2[文434]では、平安時代前期の遺構分布が大沢池の北方にさらに広がりをみせることが明らかになった。その遺構・遺物が集中する範囲は、およそ北嵯峨山王町の南部と北嵯峨名古曾町の北半部にあたり、名古曾滝北側の東西約 250m、南北約 150m である。ここで検出した遺構群はそれぞれ部分的なもので、嵯峨院内の土地区画や建物の配置などを推定するには至らないが、この範囲内に嵯峨院に関連する施設があったことは確かである。現存している名古曾滝の石組みや遣水遺構の一部は、平安時代前期の遺構を踏襲していることが発掘調査[文279]によって確認されている。平安時代前期の離宮は園池の北側に殿舎が展開している[文281]例が多く、今回調査した名古曾滝の北側の遺構群は、嵯峨院の主要な施設に関連しているとみられる。

この範囲内から出土した遺物は、平安時代前期のものが多く、なかでも土壙 137 などから一括で出土した土器類は、その形態や成形手法から 9 世紀前半代[文337]に比定される。また、大沢池の西方[文418]、名古曾滝の周辺[文279]から出土している平安時代前期の軒平瓦（図 91）は、平安宮大極殿跡[文191]、西寺跡[文191]からの出土品と同文で官窯の製品であり、官との関係が強いことがうかがわれる。ただし、当地で出土した平安時代前期の瓦類は量的に少なく、嵯峨院の主要な殿舎は桧皮葺きであったとみられる。

図 90 は平成 2 年（1990）の都市計画図に、大正 11 年（1922）の都市計画図の等高線を重ね、近年の発掘・試掘・立会調査地点をおとしたものである。この図の等高線からは、北側の朝原山の裾部の標高 70m の地点から、標高 56m の大沢池まで緩やかな南向きの斜面の形成が読みとれる。また調査 1-2 で検出した地山上面の標高数値も同様の傾向を示しており、この地は山荘・離宮などの占地に適した地形といえよう。

今回の調査成果に基づいて嵯峨院の範囲を推定すると、遺構分布の範囲は現大沢池の東西幅とほぼ同じく、東限は、大沢池の東端の北延長線、西限は、大沢池の西端付近の北延長線とする。北限は、堤の盛土に平安時代前期の遺物を含む溜池の南側とし、南限は、地形から大沢池の南辺とする。これらを四至とすると嵯峨院は東西 2 町、南北 4 町の規模になる。さらに、調査 1-2 で検出した東西方向の溝 134 は、東で北に振れる傾きを持っていることから、嵯峨院は当地に施行された西偏した条里地割りの方位[註1]に基づいて造営している可能性がもたれる。

大覚寺が所蔵する古絵図『大覚寺伽藍図[註2]』（図版 57-2）は、後宇多上皇によって整えられた大覚寺の伽藍を描いたと伝えられている。この絵図では、大沢池の北側に御所の内として 7 区画し、それぞれに築地塀を廻らせている。区画の東に檜皮葺きの中御所を構え、前庭には滝殿を配している。さらに中御所の北側に本堂、宝塔などを配する。中御所の西は 5 つに区画され、楼門が設けられ灌頂堂、金堂などの建物群が建ち並ぶ様子が描かれている。現在の大覚寺の伽藍は大沢池

の西側に位置しているが、『大覚寺伽藍図』にみられる大沢池の北側に展開する伽藍を、仮に旧大覚寺と呼ぶことにする。ここで検出した平安時代後期や室町時代に属する各種の遺構は、平安時代前期の遺構分布の範囲を拡大する形でさらに西と北に広がっている。この分布状態は、『大覚寺伽藍図』に描かれている大沢池の北側一帯に伽藍が展開する状況と符合している。

今回の調査成果を総合し、旧大覚寺の範囲を推定したのが図 90 である。まず東限は、調査区東端の南北方向の溝 121・122 を想定した。溝 121 は室町時代前期の溝であるが、比較的規模が大きく、前時期の溝 122 を造り替えた痕跡が認められ、溝の位置、規模や当地の地形などから寺域の東限を示すと考えられる。西限は、南北方向の溝 156 を想定した。現大覚寺の西側に位置するこの溝も比較的規模が大きく、13m の距離にわたって検出している。溝の位置、規模などから平安時代後期における寺域の西限を示すと考えられる。北限は、平安時代の遺物包含層 6・7 を、朝原山の裾部付近で検出していることとその地形から、朝原山の南裾部を想定する。なお、南限は、地形からみて大沢池の南辺とする。これらを四至とすると、大沢池の北側に伽藍を持つ旧大覚寺は東西 3 町半、南北 5 町の規模になる。

また方向についていえば、大沢池北側の発掘調査[文279]では、鎌倉時代の東西方向の築地とその雨落溝が検出されており、さらに、調査 1-2・7-12 で検出している寺域東限と推定した南北方向の溝 121・122 と西限の南北方向の溝 156 は、共にほぼ真北方向を示している。これらのことから、大沢池の北側に位置した旧大覚寺は、嵯峨院期の西偏した条里地割りとは異なった方位で伽藍配置を行ったとみられる。

観空寺　この寺院の文献における初見は『三代実録』貞観 12 年（870）条で、嵯峨天皇により創建され、後には定額寺とされた。中世以降は荒廃していたが、後水尾天皇の御願により慶長年間（1596 ～ 1615）に再建された。しかし、その後再び衰退し、大覚寺所領の境外仏堂となった。現在の観空寺は大覚寺西方の嵯峨観空寺久保殿町に小規模な堂宇を残している。

調査 1-8 で、嵯峨観空寺明水町内に平安時代の遺物包含層の広がりを確認している。この西側には嵯峨観空寺久保殿町、嵯峨観空寺岡崎町、嵯峨観空寺谷町など町名に「観空寺」を冠する 4 つの町が存在し、この付近が平安時代前期に創建された観空寺の旧境内地とみられる。

現時点での資料をもとに観空寺の範囲を推定したのが図 90 である。西限は、旧地形の復原により現在の観空寺の西に位置する西に傾き持つ南北方向の旧流路の東肩部を想定できる。北限は、遺物包含層の範囲北端部にあたる東で北に傾く東西方向の小路とし、南限は、大覚寺の南辺から西へのびる道路とする。なお、東限は決めかねるが、寺域は、嵯峨院と同様の西偏した条里地割りの方位に基づいた 4 町の範囲を推定できる。

化野の遺跡（図 92）

化野は「仇野」、「阿陀志野」などとも記され、平安時代より鴨東の鳥部野、北の蓮台野と共に葬送の地であった。化野念仏寺は、寺伝によれば、元は五智如来寺と称し、大覚寺所轄の真言宗の寺であったが、中世、法然上人が念仏道場を開いたことから念仏寺と改称されたという。なお

現在の本堂は正徳2年（1712）、寂道和尚により再建されたものである。現在、寺の境内に祀られている数多くの石仏、石塔、板碑は、この化野の林野に散乱、埋没していたものを集め安祀したもので、その数はおよそ八千体といわれている。

今回の調査では、平安時代、室町時代、江戸時代の墓跡を検出している。平安時代の墓跡は小石室を持つ火葬墓で、蔵骨器を埋納した末期の墓13がある。室町時代の墓跡には土葬と火葬の2形態がある。前者には、遺体を備前甕に埋葬した中期に属する墓5があり、後者には、直接土壙内に火葬骨を埋納した後期の墓21・40がある。また、江戸時代も同様に、遺体を直接土壙内に埋納した墓15と、土壙内に直接火葬骨を埋納した墓27・28がある。また、時期が確定できなかった火葬墓もあり、墓11は直接土壙内に火葬骨を埋葬していた。墓10・12は火葬骨と炭を出土した土壙の内壁が焼土化しており、これらは火葬場所がそのまま墓壙となった例である。

今回の事例からは、化野は平安時代から江戸時代にかけて形成された墓域で、当初は小石室を持つ火葬墓が造られ[註3]、それ以降は土葬と火葬が混在して造墓が継続されたことが判明した。

図92は大正11年（1922）の都市計画図の等高線図に化野念仏寺、二尊院など寺院、有智子内親王墓、後亀山天皇嵯峨小倉陵、愛宕道を記載し、立会調査で検出した墓跡や蔵骨器出土地点をおとしたものである。化野念仏寺の南東に東向きの緩斜面が広がる地形があらわれており、調査で検出した墓跡などがここに集中している。

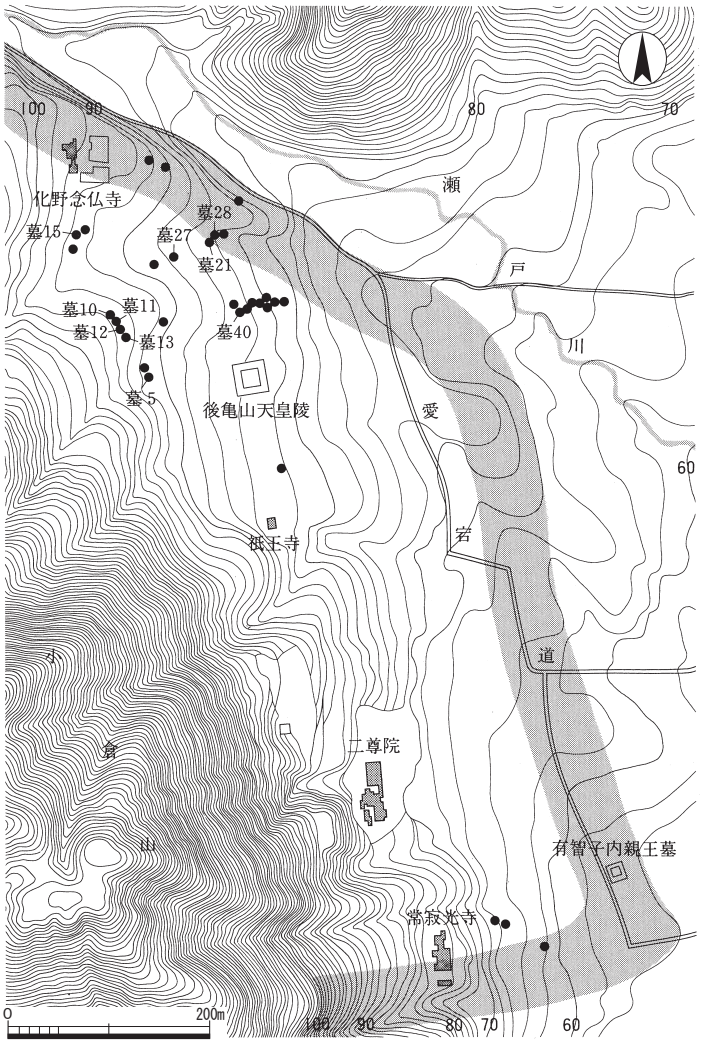

図92　化野の墓域推定図（1:7,500）

検出した墓跡や遺物の分布から、小倉山の東麓に展開している「あだし野」の墓域を推定してみる。まず、北限は、境内で蔵骨器が出土[文176]していることや、谷によって画される地形を考慮して、化野念仏寺北側の谷と想定することができる。西限は、小倉山の東斜面部で、化野念仏寺の西側では標高120m、また、二尊院の西側では標高100mまでとする。ほぼこの標高で等高線の変換がみられ、これより上方の急斜面は、造墓には適していない。南限は、境内の隣接地で火葬墓を検出していることから、常寂光寺の南側の谷によって画されると想

定する。東限に関しては調査例がなく、地形から推測すると標高 58m に立地する有智子内親王墓を含み、愛宕道辺りとなる。

なお、この化野念仏寺北側から常寂光寺南側まで広がる墓域は、地形上は祇王寺の南側の谷で南北に二分することができる。北部は、化野念仏寺南側からこの谷まで広がっている比較的なだらかな東方に向かう斜面部であり、南部は、狭小な平坦部に二尊院や常寂光寺など寺院が立地する小倉山裾部の急斜面を呈している部分である。この南部は、二尊院境内には鎌倉時代に造立された三帝の塔や古墓が所在し、常寂光寺では境内に隣接して数基の火葬墓があり、いずれも寺院に付属する墓地が広がるとみられる。これに対し、北部では標高 80m から 97m、南北約 330m、東西約 170m の範囲の緩斜面上に平安時代から江戸時代に属する古墓が特に寺院に付属せず点在し、明らかに南部の墓地とは性格が異なっているとみられる。以上のことから、化野の埋葬は平安時代の小石室を持つ火葬墓の造営に始まり、それ以降は火葬墓と土葬墓の混在する二つの形態の墓域が融合して形成されたものとみられる。

天龍寺周辺の遺跡（図版 57・58　図 93・94）

大堰川の北岸、現在の天龍寺付近に、承和年間（834 ～ 848）、嵯峨天皇の皇后橘嘉智子が檀林寺を造営したとされている。皇后の死後は官寺となり、伽藍十二院という規模を有したが、平安時代中期には廃絶したといわれる。亀山殿は、後嵯峨上皇が建長 7 年（1255）に亀山の東麓に造営した仙居で、のち亀山上皇の仙洞にもなる。天龍寺は、足利尊氏が夢窓国師の進言により後醍醐天皇の菩提を弔うため、暦応 2 年（1339）、すでに荒廃していた亀山殿の跡地に勅願寺として造営した。広大な寺域には、大伽藍と 150 におよぶ塔頭子院が営まれている。この天龍寺は延文 3 年（1358）を始めとして、以来、元治元年（1864）まで 8 回におよぶ火災に見舞われた記録がある。これまで当研究所が、史跡名勝嵐山内の天龍寺周辺を対象として行った調査は発掘調査を含め 19 件を数え、上記に関連する平安時代から江戸時代に至る遺構の検出がみられている。

天龍寺下層遺跡　天龍寺と大堰川に挟まれた嵯峨天龍寺芒ノ馬場町南部の東西約 240m、南北約 100m の範囲で、平安時代前期の土壙や遺物包含層の広がりを確認している。調査 13-1 の土壙 100 から一括で出土した土器類は、9 世紀初頭[文337]に比定でき、また遺物包含層も同時期に属している。この遺物包含層は、発掘調査 13-6[文379] で検出されている平安時代前期の園池の東端から東約 170m までの範囲内に集中しており、この池と関連する遺構とみられる。また、池の北側一帯では平安時代前期の遺物を検出しており、嵯峨院など池の北側に建物が展開する例があり、この池の北側にも殿舎を想定することが可能である。この大堰川北岸に位置する園池を含む遺構群は、文献に記される桓武天皇の「大堰」行幸[註4]に伴い使用された施設の可能性があり、現時点では「大堰離宮」の一部と考えておきたい。

図 93 は平成元年の都市計画図に大正 11 年の都市計画図の等高線を重ね、近年の発掘・試掘・立会調査地点をおとしたものである。この図の等高線からは小倉山の裾部の北西から南東に向かう緩やかな地形が読みとれる。当地では、東西・南北方向の溝をそれぞれ複数検出しており、中

図 93　天龍寺周辺の遺構分布（1:7,500）

には互いの溝間の距離がほぼ 60m の倍数を示すものがみられた。ここでは、この数値に注目し、120m を基準として当地の地割り復原を試みることにする。

現時点での調査成果をもとに大堰川北岸のこの地に、平安時代前期の離宮を想定したが、この遺跡の範囲について推定してみる。まず、東限は、平安時代前期の遺構群の検出地点東端部とする。西限は、遺物包含層の分布状況から推測すると園池の西辺となり、この地点は東限から西へ 240m の距離にあたる。南限は、大堰川北岸があたる。北限は、遺物包含層の分布状況から天龍寺の放生池あたりが想定でき、ここは、大堰川北岸からは北へ 240m の距離になる。これらを四至とすると離宮は東西 2 町、南北 2 町の規模となる。なおここの地形からすると、離宮の範囲は亀山の裾部までさらに西へ半町分広がることも考えられる。また、調査 7-36 で 10m 以上にわたって検出した東西方向の溝 7 は、東で北に振れる傾きを持っており、この溝を西に延長すると、推定した離宮の北限に合致する。このことから、離宮は当地に施行されたとみられる西偏した条里地割りの方位[註5]に基づいて造営している可能性がもたれる。

檀林寺跡　平安時代前期の嵯峨野の土地利用状況を示す「山城国葛野郡班田図[註6]」（図 94）には、一条社里の二十七、二十八、三十三、三十四の各坪に檀林寺の名が記されている。檀林寺の寺域復原案はこの「葛野郡班田図」を基にして複数例[註7]があり、それらは図 93 に示したようにいずれも天龍寺の北方とされている。

この範囲内にある野々宮神社の南側で、平安時代前期の大規模な東西方向の濠 171[註8] を検出している。この濠は、埋土の状況から空濠であった可能性があり、区画を示す濠とみられる。この濠の東延長上には、調査 7-36 で東西方向に 15m 以上にわたって検出した溝 19 が位置している。

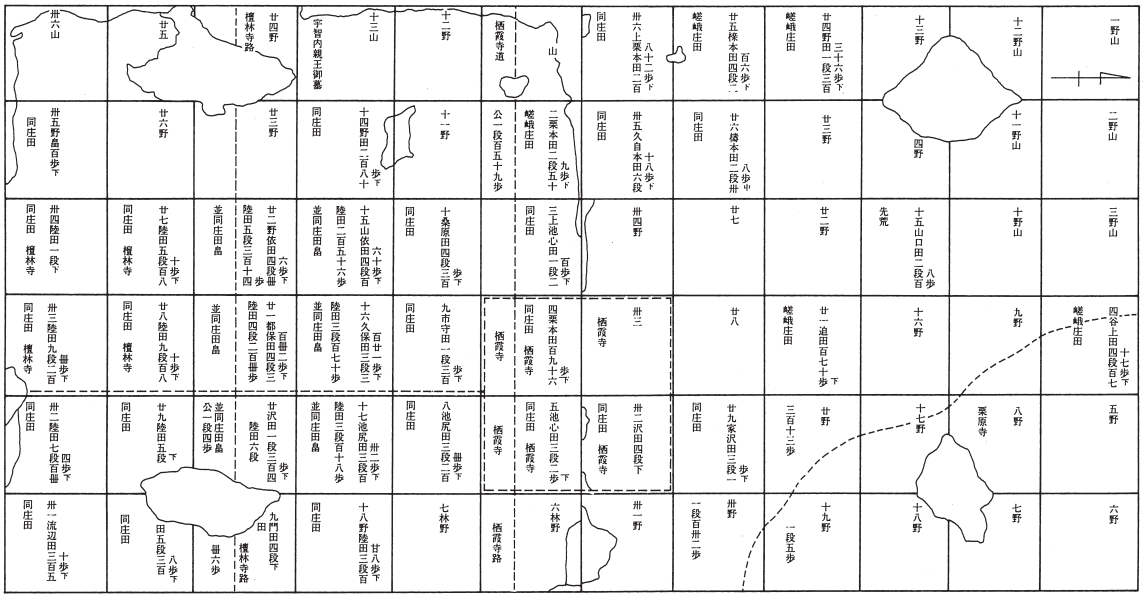

図 94　山城国葛野郡班田図

これらの濠 171・溝 19 は、前述した東西方向の溝 7 と同様の傾きを持ち、葛野郡の条里の傾きに合致している。また、溝 19 は離宮の北限と推定した溝 7 の北約 240m の距離に位置しており、120m を基準とした地割りが実施されたとみられる。また、地山層の堆積状態はこの濠の約 10m 北を境に、南側は黄色粘土層、北側では拳大から人頭大の礫主体の堆積層とかわることが明らかとなっている[註9]。他に、天龍寺境内の弘源寺墓地[註10]、同松厳寺墓地[註11]（E 地点）、嵯峨天龍寺芒ノ馬場町北端[註12]（D 地点）では主に平安時代前期の軒瓦（図 74）などが多く採取されている。

現時点では、この檀林寺の寺域北限を上記の濠 171 と仮定する。この位置は、離宮の北限から北へ 2 町分の距離にあたる。寺域を 1 町規模と想定すると、南限は天龍寺境内弘源寺北となる。東限は離宮の東端部の北延長線を想定すると、西限は野々宮神社東の南北方向の現道路にほぼ合致している。なお、この範囲は、上記の安定した地山層の存在からも寺域占地の上で妥当とみられ、瓦採取地点もこの四至の範囲内であり、推定した寺域と矛盾していない。

天龍寺旧境内　現在の天龍寺境内とその北側では、平安時代後期の遺構や遺物の出土量は、前期に比べて増加することが明らかになった。この状況は、当地における「葛野郡班田図」と「嵯峨舎那院御領絵図[註13]」の比較にみられる土地利用の状況[註14]とはやや異なることが判明した。

「山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図[註15]」（図版 58-1）には亀山殿、浄金剛院、西禅寺、六僧坊、朱雀大路などが描かれ、鎌倉時代の当地の状況を知ることができる。天龍寺と大堰川の中間の地点の発掘調査 13-5[文426] では、道路と宅地を区画する濠や建物などが検出されており、この土地区画と上記の指図の位置関係は、符合するとみられ、指図はほぼ信頼できると考えている[註16]。今回の調査で検出した鎌倉時代に属する遺構には土壙、柱穴、溝、石組井戸などがあり、これらの遺構群も上記の指図と位置が符合するとみられ、南北方向の溝 151 は「惣門前路」の側溝に、井戸 134 は「冷泉宰相給」の施設に関連する可能性がもたれる。

室町時代については、「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図写[註17]」（図版 57-1）に、創建された天龍

寺一帯の状況が描かれ、寺院や塔頭の配置、街路の位置を知ることができる。調査では、室町時代に属する遺構が当地全域に分布していることが明らかになり、遺物も多量に出土した。天龍寺境内やその周辺で検出した各東西・南北方向の溝や各種石組遺構は、天龍寺や天龍寺の塔頭子院の区画を示す施設の一部とみられる。特に、清涼寺と渡月橋を結ぶ現道路の端部付近で検出している溝（調査 7-23 の 9、調査 7-30 の 71・72、調査 7-37 の 29・38・39、調査 13-10 の 164）は、絵図に記された天龍寺に東面する「釈迦大路」の側溝にあたるとみられる。また、土壙 90 からは二次的に火熱を受けた多量の瓦類と共に 15 世紀後半の土師器が出土しており、これらは、応仁の乱による火災後の整地に伴って廃棄されたとみられる。

なお、当地で検出した遺構には、天龍寺に東面する街路の側溝を始めとして、溝の主軸が真北から西へ振れ、付近の現在地割りと同方向の主軸を持つものが多くみられた。これらのことから、天龍寺付近の地割りは、平安時代前期から継続する西偏した条里地割りの方位を踏襲しているとみられる。

鹿王院・車折神社周辺の遺跡（図 95・96）

嵯峨遺跡　鹿王院や車折神社を中心として、西を瀬戸川、北から東を有栖川、南を西高瀬川で限られる広い範囲で新たな遺跡を発見した。この遺跡は低位の沖積段丘や氾濫平野に立地する飛

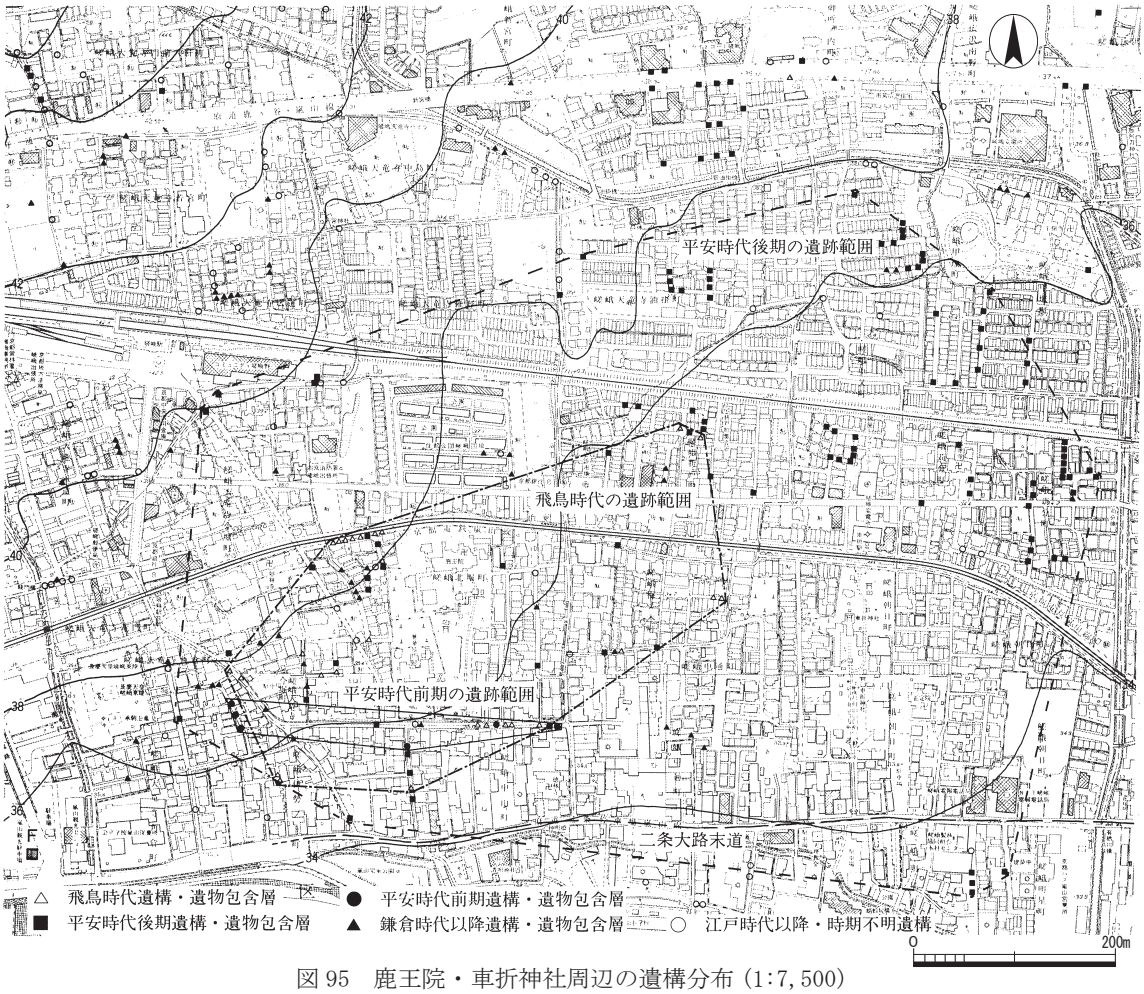

図 95　鹿王院・車折神社周辺の遺構分布（1:7,500）

鳥時代から江戸時代におよぶ複合遺跡であり、ここでは嵯峨遺跡と呼称する。

図 95 は平成元年（1989）の都市計画図に大正 11 年（1922）の都市計画図の等高線と、調査で検出した遺構を時代別に明示しておとしたものである。この図からは、瀬戸川と有栖川の中下流域の緩やかな地形上に遺跡が展開していることが判る。

飛鳥時代の遺構と遺物包含層を、鹿王院を中心とする嵯峨天龍寺今堀町、嵯峨伊勢ノ上町、嵯峨北堀町、嵯峨折戸町、嵯峨梅ノ木町で検出した。ここでは、柱穴を検出しているが、建物を復原するには至っていない。嵯峨折戸町で出土した土器類は 7 世紀中頃のもので、嵯峨北堀町では、7 世紀後半に属する土器類が出土している。また嵯峨北堀町では、少量ながら奈良時代の遺構・遺物も検出しており、集落の継続性が考えられる。

この時期の遺跡の立地は、瀬戸川と有栖川の中下流域の緩やかに北西から南東に傾斜する地形の南西部で、標高 36m 前後の低位・沖積段丘の先端部に位置している。7 世紀中頃の遺物包含層は鹿王院の北東部の標高約 35m、7 世紀後半の遺物包含層は鹿王院の南西部の標高約 36m で検出しており、遺跡の中心部が南西に移動していることがうかがわれる。この遺物包含層は東西約 500m、南北約 400m の範囲で検出しており、遺跡の面積は約 100,000 ㎡とみられ、大規模な集落になるとみられる。

西に隣接する瀬戸川右岸の F 地点では、7 世紀前半に該当する竪穴住居[註18]が検出されており、この地点まで当遺跡が広がることが考えられる。この地点は、大堰川から東方の太秦広隆寺方面に流れる西高瀬川の取水部に近接しており、西高瀬川が「葛野大堰」を踏襲[註19]するものであれば、この竪穴住居は葛野大堰の取水に関連した施設とみることも可能である。この地点の標高は約 35m であり、取水口をここに設けると当遺跡周辺と東方の太秦地域一帯に灌漑が可能となる。

平安時代前期の遺構や遺物包含層は、嵯峨天龍寺今堀町、嵯峨北堀町、嵯峨伊勢ノ上町に広がる東西約 300m、南北約 50m の範囲で検出した。この時期の遺跡は、氾濫平野奥部に立地し、飛鳥時代の遺構分布範囲の南端部寄りに位置し、規模はおよそ 15 分の 1 の面積に縮小している。平安時代前期に作成された「葛野郡班田図」からは、当地の低平な部分

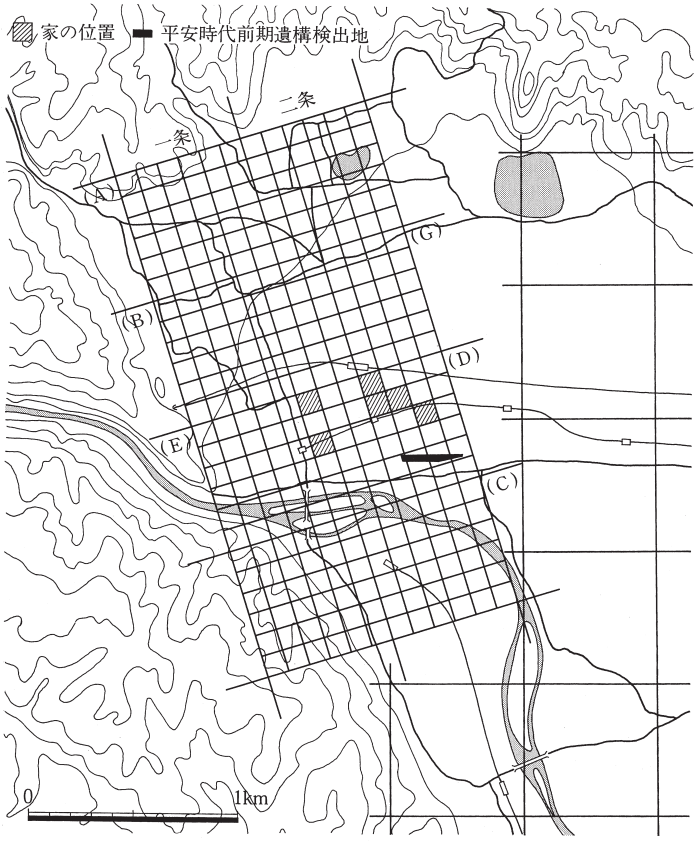

図 96　山城国葛野郡条里比定図

は開発され、耕地化されていたことが判る。この「葛野郡班田図」の現地比定[註20]には、宮本　救氏によるものがあり、大堰川以北の当地では妥当な現地比定と評価されている。図 96 は同氏の現地比定図に今回検出した遺構群範囲をおとしたものである。それによれば、今回検出した遺構群の位置は、現地比定図中に「家」と記された二条Ｉ里三・九・十・十七坪よりも南東側にずれていることが判明しており、当地における土地利用の解明に際して、新たな検討資料を加えることになった。

また、この時期の遺跡は平安京二条大路末から太秦広隆寺南門前を経て大堰川へと続く路[註21]の北側に隣接しており、嵯峨地域が平安京と密接な関係を持っていたことがうかがわれる。

平安時代後期の遺構と遺物包含層は、北が嵯峨天龍寺若宮町・嵯峨甲塚町、西は嵯峨天龍寺今堀町、南は嵯峨伊勢ノ上町・嵯峨明星町、東を嵯峨刈分町とする東西約 900m、南北約 800m の範囲で検出した。ここで検出した柱穴の状況からは建物を復原するには至っていないが、遺物包含層は 80 箇所で検出した。この時期の遺構の分布範囲は、平安時代前期よりも大幅に北・東方へ広がりをみせ、嵯峨新宮町など有栖川の北岸部にもおよんでいる。西の天龍寺周辺や北方の大覚寺南側に展開するこの時期の遺跡範囲の拡大と同様に、平安時代前期から継続している耕作が当地一帯に拡大した様相がうかがわれる。

図 97　嵐山周辺の遺構分布（1:7,500）

鎌倉時代から室町時代の遺構の分布は、平安時代に比べさらに天龍寺側に広がりをみせることが判った。直接に寺院などの建物に関する遺構は認められないが、区画を示す溝や道路面などを確認した。これらの遺構群は、「山城国嵯峨諸寺応永釣命絵図」[註22]（図版 58-2）にみられる鹿王院、宝寿院などを始めとする天龍寺の塔頭子院や門前町に関連するとみられる。また、臨川寺の北東の調査 8-71 の 42 地点の南で地山である黄色粘土層を浸食した痕跡が認められ、現在の瀬戸川は地形からみると、臨川寺の創建時に若干東に寄せられたとみられる。

嵐山の遺跡（図 97・98）

嵐山谷ヶ辻子町遺跡　桂川右岸一帯の大部分の箇所では、砂礫層が厚く堆積する桂川が及ぼした広範囲な氾濫原を検出している。その中で東一ノ井川より東側の数箇所

で、主に黄褐色砂泥の堆積によって形成された自然堤防を確認した。平安時代前期から後期の遺構と遺物包含層は、この自然堤防上で検出しており、ここでは嵐山谷ヶ辻子町遺跡と呼称する。この遺物包含層は調査 14-34 より南の松尾大社付近にまで広がるとみられる。図 97 は平成元年の都市計画図に大正 11 年（1922）の都市計画図の等高線を重ね、調査で検出した遺構ならびに自然堤防をなす地山層の堆積範囲を示したものである。

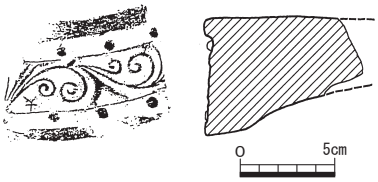

図 98　平安宮太政官出土軒瓦（1:4）

平安時代前期の遺構と遺物包含層は、嵐山上海道町、嵐山山ノ下町、嵐山谷ヶ辻子町にまたがる東西約 240m、南北約 140m の範囲で検出した。また、嵐山谷ヶ辻子町では平安時代前期の瓦類を多量に含む東西方向の溝 44 を検出している。

桂川右岸にあたる当地一帯の条里比定には、二つの異なる説が知られている。まず、図 96 に示された大堰川以北における西偏した条里を南にそのまま当地まで延長した復原[註23]と、葛野郡における一般の条里を西に延長した復原[註24]である。上記の東西方向の溝 44 は、東側で北に振れる傾きを持っており、前者の復原説と合致するとみられ、当地にも西偏した条里が施行された可能性が強い。

当地は「葛野郡班田図」による条里の比定では葛野郡の一条大井里に比定[文97]されている。ここで検出した遺構や遺物包含層の分布、さらに多量の瓦の出土からは、当地に瓦葺きの建物を含む寺院または別業などの遺跡の存在が想定でき、溝 44 から出土した「大井寺」銘の軒平瓦は大井寺[註25]に関係することも考えられる。なお、「大井寺」銘の同笵軒平瓦は、天龍寺境内[文422]、嵯峨院跡[文185]、平安宮太政官跡[註26]からも出土しており、当地と大堰川北岸の嵯峨野や平安宮との関係が強いことがうかがわれる。

平安時代後期の遺構と遺物包含層は、北は嵐山上海道町、嵐山茶尻町、南が嵐山内田町までの南北約 600m、東西約 200m の範囲で検出している。検出した柱穴の状況から建物などを復原するには至っていないが、この時期の遺構の分布範囲は平安時代前期よりもさらに南と北へ拡大しており、当地における開発をうかがい知ることができる。

結　語

嵯峨・嵐山地域で確認されている旧石器・縄文時代の遺跡は少なく、相互の関係も不明な部分が多いが、菖蒲谷池・広沢池周辺からは旧石器時代の石器、広沢池周辺・天龍寺境内から縄文土器が発見されており、この地域の歴史が旧石器、縄文時代から始まることを語っている。今回、北嵯峨の段丘上で検出した縄文時代中期の土器は土壙内から出土したもので、縄文時代の新たな遺跡を加えることができた。また、弥生時代の土器も、わずかに天龍寺境内の旧流路から出土したものに限られる。東方の御室川流域に弥生時代の集落跡は確認できるが、現時点ではこの地域では明確な弥生時代の遺跡は確認できない。その原因として、高燥地と氾濫原に二分される地形的制約が大きかったことが考えられる。

古墳時代では、前期から中期の遺跡は現時点では確認できていない。5 世紀末から 6 世紀後半の時期に、東方の太秦地域の低位段丘上に、秦氏一族による前方後円墳が次々と築造される。太秦の西に位置する当地域では古墳の築造は 6 世後半になってからであり、中位段丘上に甲塚古墳、稲荷古墳や大型円墳を含む大覚寺古墳群、広沢古墳群などの古墳群が築造される。この嵯峨地域が開発されるのは、墓域としての土地利用である。

この地域の景観が大変化を遂げるのは 7 世紀初めである。この時期に朝原山を中心とした山際や山腹に鳥居本古墳群、朝原山古墳群、長刀坂古墳群などの群集墳が築造され始める。次いで、7 世紀半ばには、当地にも東方の太秦側からの開発が波及し、耕作地は拡大し、有栖川・瀬戸川中下流域には大規模な集落である嵯峨遺跡が形成されている。この集落は北方に展開する群集墳と密接に関連するとみられ、この時点で当地域の南部は墓域としての利用から人々の生産・生活の場として大きく変貌した。

新たな転機は平安時代前期にみられる。この地域に桓武天皇の頃から皇族の遊猟地が設定され、多くの別業・山荘が造営される。隣接地には檀林寺、観空寺など寺院も建立される。今回の調査では嵯峨院、観空寺、檀林寺などを対象とし、古絵図や古文献資料を参考にして、考古資料を基にその範囲を推定した。他にも大堰川北岸の大堰離宮、大堰川南の大井寺など新たに離宮もしくは寺院の存在の可能性も明らかにした。檀林寺は平安時代中期には廃絶するが、平安時代中期以降は別業・寺院等の建立などの開発は、東方の双ヶ岡地域の仁和寺周辺に移ることとなる。

有栖川・瀬戸川中下流域では、平安時代前期の遺構分布を提示し、平安時代後期には集落跡が大幅に拡大する状況を明らかにした。また化野では、検出した多くの墓跡から平安時代に埋葬が始まり、さらに貴族層から各階層に広がり、鎌倉時代から江戸時代にかけて墓域が拡大されて行くことを述べた。

天龍寺周辺の調査で検出した鎌倉時代から室町時代にかけての重複する大規模な区画溝や、多くの瓦処理土壙の遺構は、亀山殿の建立以降に始まる室町時代の禅宗寺院、門前町が建ち並ぶ姿の痕跡である。この時期の遺構は重複が多く、まだ明らかになっていない部分が多い。鎌倉時代以降の嵯峨・嵐山地域の歴史景観の復原は、今後の発掘調査の課題となろう。

註

1　文 97 の中で宮本　救氏が「山城国葛野郡班田図」の現地比定を行い、桂川北岸の嵯峨の西偏した条里地割りが復原されている。

2　元享元年（1321）頃に完成した伽藍を、江戸時代中期に復原的に描いたものである。

3　平成 7 年度の調査で、平安時代前期の小石室を持つ火葬墓と江戸時代の火葬墓を検出した。未報告。

4　『日本紀略』延暦 14 年（795）6 月条に初めてみられ、以後『日本後紀』延暦 23 年（804）9 月まで 14 回におよぶ。また、当地周辺と考えられる「葛野川」への行幸は 9 回にわたってみられる。

5　註 1 に同じ。

6　「山城国葛野郡班田図」は天長 5 年（828）頃の成立とみられ、桂川北岸の嵯峨の部分について条里プランの 6 里分の土地利用を示している。さらに、「栖霞寺・栖霞寺路・檀林寺・檀林寺路・宇智内親王

御墓」なども書き加えられている。

7　図 93 に示した推定範囲 A は西田直二郎氏、推定範囲 B が金田章裕氏、推定範囲 C は鳥居治夫氏によるものである。

8　平成 7 年度の調査で、幅 3.1m 以上、深さ 0.95m の規模で検出した。未報告。

9　平成 7 年度の調査で確認した。未報告。

10　昭和 39 年 (1964)、木村捷三郎氏によって採取されている。

11　昭和 50 ～ 54 年 (1975 ～ 79)、服部政義氏によって採取された。本報告書の第Ⅳ章 2-c で報告。

12　註 11 に同じ。

13　建永 2 年 (1207) の成立である。亀山殿が建立される以前の当地の様相を描いている。天龍寺所蔵。

14　「地形と土地利用の復元」『甦る平安京』において金田章裕氏は、嵯峨野の開拓と土地利用について、両図を比較検討し、多少開発は進んだとしても平安時代を通じて大きな変化はなかったとみている。

15　室町時代前期の成立とみられるが、絵図には天龍寺がなく、亀山殿の記載がある。天龍寺所蔵。

16　文 426 において『天龍寺文書』に残された絵図と発掘調査結果の検討がなされている。

17　貞和 3 年 (1347) の成立である。天龍寺所蔵。

18　竪穴住居は 1 基で、壁溝を有し、竈と思われる部分には焼土が馬蹄形に残っていた。他に東西方向の溝も検出されている。平成 4 年 (1992)、嵯峨天龍寺造路町で関西文化財調査会が発掘調査を実施。吉川義彦氏のご厚意により実見させていただいた。

19　『政治要略』に「秦氏本系帳」が引用され、葛野大堰の記載がある。足利健亮氏は文 390 で、西高瀬川水路の成立を古墳時代まで遡らせることが可能としている。

20　註 1 に同じ。

21　調査 11-102・16-46 などで路面堆積層を検出している。この路に隣接して平安時代の創建とされる斎明神社も位置している。

22　応永 33 年 (1426) の成立である。天龍寺所蔵。

23　文 97 の中で宮本　救氏は、大堰川以北の嵯峨の特殊条里はさらに一里南にのびて上山田の一部にもおよぶことを指摘している。(図 96)

24　文 198 の中で金田章裕氏は、特異な方位をとる嵯峨野の一・二条のプランを、桂川を越えてまで延長するのは不自然であり、その積極的理由が見当らないと述べている。

25　『続日本後紀』承和 9 年 (842) 条に「大井寺」の記載がある。しかし、この寺の規模や位置などは不明である。

26　昭和 63 年 (1988) の発掘調査で、築地跡から軒平瓦の「大」銘部分 (図 98) が出土している。